

# 奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

1965・2



2月号

奇譚クラス

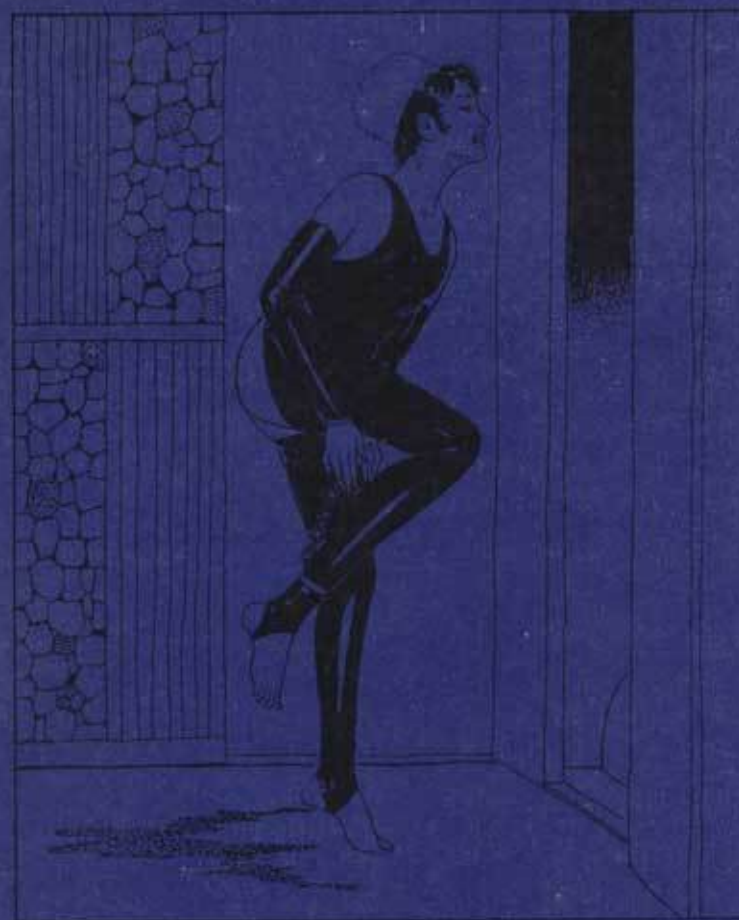
2月号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisyn

Osaka Japan



2月号

¥ 300



# 四馬 孝秘蔵版画集

大中判 (13×18 釐) 印画紙焼付↓コレクション専用

口絵の制約によって十分その腕を揮うことのできない肉の喰をこらえていた四馬孝氏  
が、登場の女主人公をすべて全裸に剥いで、美しく目ざましい秘蔵版をものしました。

## △責められる美女波津子の痴態▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号 (しお)

### 一、恐怖の浣腸責

ベッドの上には、白く輝くような肌にとす黒い縄が無惨にも喰い込んでいます。激しい後手しほりに身動きもできない波津子、伸びやかな脚を逆エビに持ちあげられし猿ぐつわの下で苦痛にあえいでいる。男の手にした30ccのガラスシリンダーは、今まさにアヌスに迫るとして恐怖。

### 二、柱抱きの責め

斜めに立てかけられた五寸柱をアグラに組んだ足で抱くようにしてあらにもく縛られた波津子。豊かに肉のついた胸や腹が、じかに柱に密着して、大きく開ききった両方の太腿のアグラ縛りも恥しい妙齡の女性にとっても、最もむづかしい責めである。それだけにS的ムード満点である。

### 三、庭のハダカ責め

夏草の生い茂る庭の棒杭に、両手をひろげ、左足を高々と頭の位置まで挙げて縛られた奇妙な晒しものポーズ。霞から蚊や蟻が白い

肌を這ってくるが、波津子は只、白布の猿ぐつわの下で、ううう、呻めくだけである。最大限に左右に開けきった四肢は、哀れにも自由にできないのである。

### 四、イルリガートル

皮紐で高小手に縛られた波津子は、両足首に鉄の足輪をはめられ、その両足を高々と持ち上げられてチェンブロックのフックに掛けられようとしている。一リットルの石鹼液をなみなみと入れられたイルリガートルは、逆立ちのポーズをとらされた波津子の腸内へ、ドクドクと注入されてゆく。

### 五、荒縄の股間縛り

均整のとれたグラマリーの美しい肢体の波津子の腰部には、トゲトゲとした太い荒縄で縛りが締められている。鼻孔には火のついた巻煙草が挿し込まれ、荷造用のロープで両手は背後で揃えて括られて、いっつの物体として、非情な男の手になぶられるのだ。

## △可憐な少女加奈子の羞恥責め▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号 (しる)

### 一、ロウソク責め

可憐な美少女加奈子が、この屋敷に囚われの身となって、すでに幾日経つてあろうか。なやなよとした青い実の裸身には、麻縄がむごたらしく肌を痛めつけ、火のついた百多ロウソクの焰が、テレビの前で足挙げポーズで縛られた加奈子の頬を襲ってくる。嗜虐的な男の眼が恐ろしい。

### 二、アンヨは上手!

加奈子は男の可愛いベットである。全裸に剥かれて、後手高小手に縛られた上、首と膝頭とを革紐で繋がれ、ヨチヨチと部屋の中を歩かされる。ピンク色に染った繊細な足の指先に力をこめて、転ろげないようにと、懸命に歩こうとするが、縛られた身体は遅々として前へ進もうとはしない。

### 三、逆エビ柱吊り

夜の縁側の柱に、加奈子の白い身体が逆エビ縛りにされて、柱に宙吊りになっている。スタンドの

スポット・ライトが蠟のように白い加奈子の全身を、闇の中で浮彫りのように照らしたいている。肌にあざむく痛みに、思わず、ああッとする悲鳴を、心地よげに聞く怪しい男のシルエット。

### 四、被虐の絶叫

後手高小手縛りの上に、革のベルトの股間縛りで締めつけられて喘ぐ加奈子の右足を無理矢理に挙げて固定しようとする、いやらしい禿頭の暴虐。可憐な加奈子は、あまりのことに悲鳴をあげて絶叫すれば、一層の被虐の念が全身を戦慄させる。そして男には快い音楽と聞えただろう。

### 五、美しき儀の鑑賞

美しい宝石のような加奈子の身動きも出来ない全身を、それこそ足の爪先から髪の毛の一本一本に至るまで、刻明に観察しようという野卑な男の欲望は、彼女をなほ好部屋に柱に晒しもののような恰好で括りあげてしまったのである。じろじろとナメクジのような目で全身を眺められる気味悪さ。

## 「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

### G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 釐) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

1	顔面から全身厳重縛 (東浦)
2	アグラで縛られる (玉田)
3	豊臀と足首と後手縛 (玉田)
4	一条まとわぬ晒し者 (玉田)
5	敷布に悶える白い肌 (玉田)
6	縄に羞らう裸しほり (長野)
7	煙草責と荒縄緊縛 (大塚)
8	全身ガンジガラメ (大塚)
9	手吊り全裸さらし (玉田)
10	恐怖のいたぶり (新井)
11	浣腸器に脅びえる女 (玉田)
12	全裸しほりと浣腸器 (玉田)

13	踏みつけられる美貌 (大塚)
14	美しき全裸強調縛り (大塚)
15	そりかえる鼻の頭 (大塚)
16	黒フンで縛られる女 (玉田)
17	責写真に埋れた緊縛 (大塚)
18	諸親の後手しほり (玉田)
19	椅子に縛られた全裸 (玉田)
20	足首と後手首と (玉田)
21	二つの乳房アップ (長野)
22	縛られて鼻を任す (大塚)
23	後手縛全裸椅子跨ぎ (東浦)
24	豊胸に黒紐の輝やき (長野)
25	肌刺さる荒縄 (大塚)
26	机の脚に縛られる (新井)
27	草の狼替で責める (新井)
28	白肌は縄にくびれて (大塚)
29	緊縛裸身を誇る足 (長野)
30	逆エビと浣腸器 (大塚)
31	肥り肉を晒らす女 (東浦)
32	踊子の緊縛ポーズ (絹川)
33	足でなぶられる鼻 (大塚)
34	典型的な股間しほり (大塚)
35	美貌と豊胸を誇る女 (長野)
36	写真に埋れた全裸姿 (大塚)
37	裸を誇りの椅子縛り (玉田)
38	柔肌は縄にくびれて (玉田)

39	全裸の肌は細まかせ (玉田)
40	女囚哀歎 (宇治)
41	女囚縛られ姿 (宇治)
42	オシメカパー縛り (大塚)
43	庭の見える部屋にて (大塚)
44	トイレを前にして (大塚)
45	荒縄と豆絞りの狼替 (大塚)
46	裸身の美を誇る縛り (長野)
47	後手逆エビ強烈鼻責 (大塚)
48	股間縛り全裸重量感 (大塚)
49	嚴重荷造縛りの全裸 (玉田)
50	全裸正面強烈亀甲縛 (木村)
51	全裸胸絞め首縄狼替 (木村)
52	後手首縄膝頭一括縛 (木村)
53	全裸後手吊り晒し (玉田)
54	後手吊り全裸の美 (玉田)
55	椅子に縛がされた女 (新井)
56	後手縛りで寝室へ (絹川)
57	色魔に脱がされる (新井)
58	不安定な台上股間縛 (大塚)
59	無抵抗の裸いじめ (大塚)
60	両手吊りの猿ぐつわ (新井)
61	可憐ないじめられ様 (大塚)
62	責めぬかれた表情美 (大塚)
63	強奪されたパンティ (大塚)
64	後手縛全裸の美しさ (大塚)
65	猿ぐつわの婉な表情 (新井)
66	手吊り足縛り仰臥 (新井)
67	目かくしのハリッケ (大塚)
68	首枷のさらしもの (大塚)
69	木馬責め斜め後姿 (大塚)

70	木馬責め斜め前姿 (大塚)
71	革全頭マスクと手錠 (大塚)
72	火あぶりにあう女 (大塚)
73	長髪垂らし全裸縛り (長野)
74	豊満を誇る露出癖 (長野)
75	白肌で縄にうそぶく (長野)
76	縄にもだえる美女 (絹川)
77	美貌をいためつける (新井)
78	首吊りの責め (新井)
79	両手開き吊り顔虐め (新井)
80	全裸後手足首連繫縛 (玉田)
81	蒲団上に転がった女 (遠藤)
82	首縄開股強烈縛り (木村)
83	巨大な臀部全裸後手 (大塚)
84	膨隆見事な乳房責め (長野)
85	ヤンチャ娘開股縛り (長野)
86	全裸でしやがむ後手 (玉田)
87	豊満裸身を誇る緊縛 (玉田)
88	美麗の全裸に厳重縄 (玉田)
89	後手縛り裸立姿晒し (木村)
90	奴隷の裸身を捧げる (木村)
91	白布の狼替と白肌責 (大塚)
92	六尺巨人大臀部虐め (大塚)
93	裸身を晒す両手縛り (大塚)
94	全裸アグラ坐り縛り (玉田)
95	白肌に映える光の縞 (玉田)
96	膣乳房強調喰込む縄 (大塚)
97	股間縛り全裸の膝立 (大塚)
98	台上的緊縛裸身像 (長野)
99	反りかえる緊縛裸身 (長野)
100	膨大な臀部を眼前に (大塚)



## 四馬孝画

### 倒錯美絵画集

大中判印画紙極鮮明焼付秘蔵版画集

今まで発表しました四馬孝描く分譲画集の好評に刺激されて、ここに三度、口絵として掲載できない各傾向マニヤ待望の秘蔵版を追加発表いたします。

### 「花と蛇」画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えに)

京子に芸を仕込む鬼源

椅子の上に立縛りにされた京子は、坐りもならず歩きもならず中腰のまま鬼源に美しい鼻を摘ままれて可愛い口を開けた。

静子令夫人の汚辱

豊かに脂づいた輝く裸身を床の上にじかに投げた静子の顔に、嘗ての使用人であった川田の汚れた足がべったりと掩い、高い鼻を足の指で弄ぶのだった。

擦り責めにあう美津子

両手を揃えて吊られた美津子は、腋の下を男の目の前にさらけ出して、ハケでそろりそろりと擦られる全身燃え上るような擦ったさ。

片足挙げ縛りにされる桂子

鉄平石を敷いた冷やかな土間に身動きもできぬ厳しい後手の高縛りで片足を挙げさせられた桂子は、さつきからたまらない激しい尿意と必死に戦っていた。

粗相を強要される京子

恥しいオシメカパーをはかせられた京子は、その中へ粗相をせよといたがられる。限界まできた排泄を耐えている京子の苦悶。

### 女体吊責め特集

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えほ)

弓吊りローソク責め

両手と両足をそれぞれ左右に振り分けて弓なりに反るように吊られた女体の背中には、数本の火のついた蠟燭が立てられている。

エビ縛りの吊り

揃えて括られた両足首が頸にくくほど折り曲ったエビ縛りのまま背中と鼻の先とで宙高く吊り下げられた女体の嗜虐的な美しさ。

股間縛り吊り

一本の棒のように頭から足首までガンジガラメに縛られた女体のタテに掛った股間縛りの縄で高々と吊り上げた素晴しい吊責め。

舌の先吊り

炭火がカンカンにおこった石油缶の上に両手を吊られた美女の舌の先を挟んでじりじりと吊り上げてゆく。上と下か同時に責められて、尚美しさを失わぬ女性。

鼻孔吊り

太いシュロ縄で後手首股間縛りで吊られた美女の鼻孔に通した素晴しいシーン。

### 浣腸と排泄画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えい)

恐怖の浣腸台

身動きもできぬように四肢を固定することのできる浣腸台に据えられた美女は恐怖の眼を大きく見ひらいて、目の前に釣ってあるイリガートルをにらんだ。

浣腸のあとの楽しみ

たっぷり浣腸液の御馳走を与えた上で、両足をいっぱいひるげて吊られた美女。男はそのあとの楽しみでわくわくとしていた。

百CCの浣腸

ガラスのシリンドラーでグリセリンを注入した男は、床の上に敷いたビニール布の上に美女をかまさせて時の経つのを待った。

塩水をヤカンで飲ます

後手に縛られた美女は、只男たちのなすがままだった。鼻をつままれ、開けた口には塩水がヤカンから無理矢理注ぎこまれた。

排便を耐える美女

両手を万才の恰好で吊られていないので、もうどうすることも出来ない。煮えくりかえるような便秘が彼女の全身をふるえさせる。

### 美貌汚辱と鼻責

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えは)

鼻をなぶる

いい恰好の鼻だなあ、と両手の自由のきかない美女の顔を左手で抱え込んで、右手の指で女の鼻を粘土細工のように弄ぶ。

鼻毛を抜く

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本鼻毛を抜いてゆく。これだなあ、あと何本抜けるか。口の中をほじくる

可愛い子だ、おとなしくして

いるんだよ。禿頭の男は棒の先で美女の口中をさぐる。可愛い舌に真白い歯。咽喉の奥まで老人の触手は隅なく腔中をほじくる。

泥絵具の顔

お前の美しい顔は、俺のカンバスだ。白いすべすべした女の命である顔面に、男の手にしたチューブから赤の泥絵具がべったりとつけられる。鼻から口へかけて。

ラーメンを食わす

仰向けに縛られた美女の顔の上の、男は箸にはさんだラーメンをのせる。口から溢れて鼻の穴へまで入りこんでゆく。





## 奇譚クラブ 2月号 目次

立樹縛りにされた妖精	山原清子
縄に操られた囚衣の女	山原清子
麻縄の厳しい後手の縄目	山原清子
お臍と開孔器	大塚啓子
オシメカバーをつけての外出	大塚啓子
離れ家の緊縛絵模様	大塚啓子
サテンの責衣緊縛	大塚啓子
縄の織りなす刺青媚態	山原清子
後手縛りの一つの表情	大塚啓子

### ◆奇クサロン

編集部選 (25)

○最近の二つのこと……編集部 (25) ○奇クファンの方々へ「一月号に投稿して」……長谷好志男 (26) ○我が妻の切腹プレイ写真……六角京之介 (27) ○女の刺青……目黒半平 (27) ○最近号の感想……瀬沼四郎 (28) ○奇譚クラブのあり方について……佐仲晴成 (28) ○最近号の迷評……佐渡耕作 (29) ○ボクの責め方……宝塚三夫 (31) ○サロン楽我記第八回……辻村隆 (32) ○異常正常論その他……山本五城 (33) ○新年号の花々……兵頭庫一 (34) ○武士道残酷物語「切腹心中」……森田敬三 (35) ○「カメラ・ハント」志望……刑部典子 (36) ○ゴムプレイをしよう……中田明 (36) ○輸送されるドレイ青年……美樹輪生 (37) ○身重のグイナナス……瀬沼五郎 (38) ○世相診断室……木戸川健 (39) ○未だ見ぬ女王様に捧ぐる記「有光令子様へ」……河野睦夫 (40) ○編集室より…… (40)

鬼六談義 SMプレイの知恵……団 鬼 六 (41)

女斗美ファンタジック・シリーズ「デパート女相撲より」

肥満ゆきこ(首投げ)長身みずえ……芦浦素舞夫 (50)

花石榴 悦庵絵灯籠 その十一……万田 不仁 (58)

「体験記」女よ、汝の名魔性なり……栗瀬 長 (66)

青春悲歌……中康 弘通 (73)

妖異女斗美八景……佐藤 健児 (88)

拷問映画を観る……牧 高志 (96)

SM・カメラ・ハント……辻村 隆 (100)

竹野ひろ子縛る「オシメカバーとレンコート」

「想うこと」……西条 操 (108)

孤独の遊戯——吉村英子さんに就いて

読者通信の女性……芳野 眉美 (110)

三恵の生活と幻想……かわかみ・けい (116)

SMより見た世界史シリーズ

悲劇の女性「ゼノビア」……黒瀨 嬰一 (122)

芳子を飼育する方法……中田 明 (132)

「花と蛇」に寄せて……近藤 一 (136)

新連載サディズム小説——心傷たむ遍歴——

続・婦人留置場の女達……西条 操 (138)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし……芳野 眉美 (154)

懸賞「告白、手記、体験」入選

SMレター 第一の手紙……佐仲 晴 (160)

連載小説 花と蛇 続篇第四回……団 鬼 六 (174)

読後感……近藤 一 (186)

質作・悩ましのサディズム……芳野 眉美 (190)

森山美歌夫人に関する小品……編集部選 (202)





# 刺青女性緊縛フォト

モデル 山原 清子  
塚本 鉄三・撮影

先月号で始めて刺青女性の口絵グラビヤ並に分譲品を発表しましたところ、非常な好評で次々と発表してほしいという要望が強くありましたので、ここに其の後の作品を分譲品として掲げました。

## 入墨の高手小手

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いち)

華麗な刺青を目の前に見ながら後手小手の厳しい縄目の女体を、ほしいままに視線で凌辱することのできる入墨女性の美しくも見事な背面裸像。

## 縄に悶える入墨

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いへ)

刺青を施したあらわな肌をうねうねとくねらせて二の腕に喰い入った高手小手縛りのままで足の指をくの字に曲げて悶える女。

## 足吊り三態

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いと)

後手縛りのまま両足を交叉させて両の足首を括って吊り上げた痛

## 剥れた腰巻

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いは)

腰巻一つで柱縛りをされていたモデルが、いつの間にか熱が入ってきて、その腰巻もむざんにも剥ぎとられて、大きなお尻をふりたてて、後手に縛られたまま、さまたまのポーズをとるところ。

## 女一匹御意見無用

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いお)

白晒六尺褌一本の裸で、どっかとアグラを組んだ刺青の女の姐御っぷり。両手を胸で交えて、さあ女一匹、どうでもしてくれと居直って凄んだところ正面から。

## 玉取姫が凄む

大手札印画紙  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いる)

目のさめるような鮮かな玉取姫の入墨が背中いっぱいに見事に彫られていて、その立派な背中を胡坐、膝立、立位と三通りのポーズ

## 全裸緊縛立像

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いに)

ライトに映える真白い全裸の肌にマニヤ垂涎の入墨がくっきりと浮かび上っている。すくく立って惜しげもなく身体の秘密を隅から隅までさらけだした緊縛像。

## 入墨ヌード

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いよ)

縛りなしの真正正銘の入墨を見せたヌード。はつきりと鮮明な構図を見せた刺青マニヤにとっては何ものにも替え難い珍品。

## 後手吊りの構図

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いほ)

全裸の豊かな肉体に嚴重にかけられた高手小手の縄目に吊縄をかけて引き上げようとするところ。背中の入墨が、そのたびにまるで生きているようにあえかに動く。

## 黒細帯の裸身

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いわ)

入墨マニヤと黒フンドシマニヤ

日本髪愛好者などを目的に作成した分譲用専用フォト。鮮鋭なレンズによって背中の刺青も刻明に描き出しました。

## 黒褌を誇る

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いか)

細身の黒フンドシ一本にて、すらり立ち上った日本髪の入墨姿の粹なこと。特にこの種マニヤのために撮影した記念写真。

## 入墨自慢

大手札印画紙焼付  
三枚一組 三〇〇円  
略号(いり)

お尻の割目にまで彫り込まれた刺青を二つに割って喰い込んだ真白い晒フンドシ。堂々と腕をくんで、くるりと背中を見せた今年十二才の姐御の心意気。

〔後記〕—— 今月新しく分譲品として加えました「刺青女性」の写真は極めて文獻的価値も高い趣味性に富んだもので、十二月号と今月号のグラビヤ・フォト、並に十二月号の本文カメラ・ハント(辻村隆)新年号の緊縛フォト撮影の実際(塚本鉄三)にも詳細掲げておられます故御参照の上、お気に召しましたら、何卒お注文下さるようお願いしております。

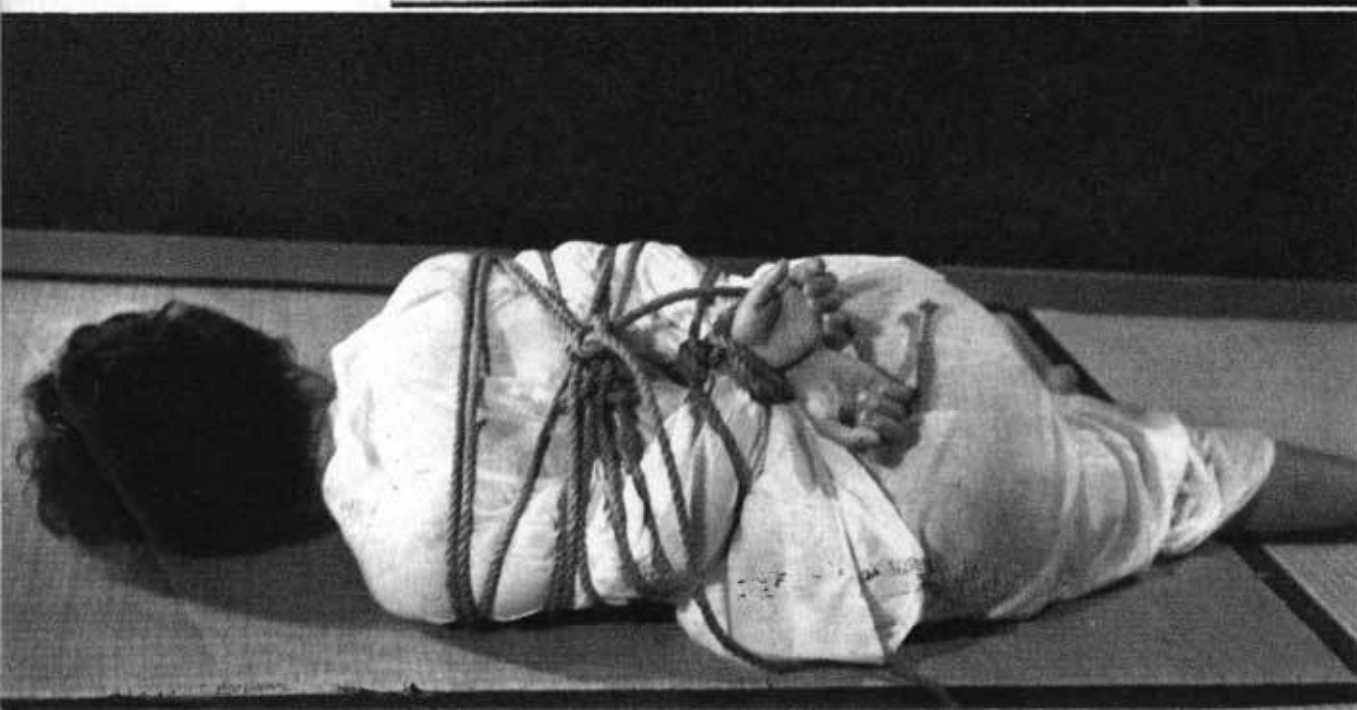




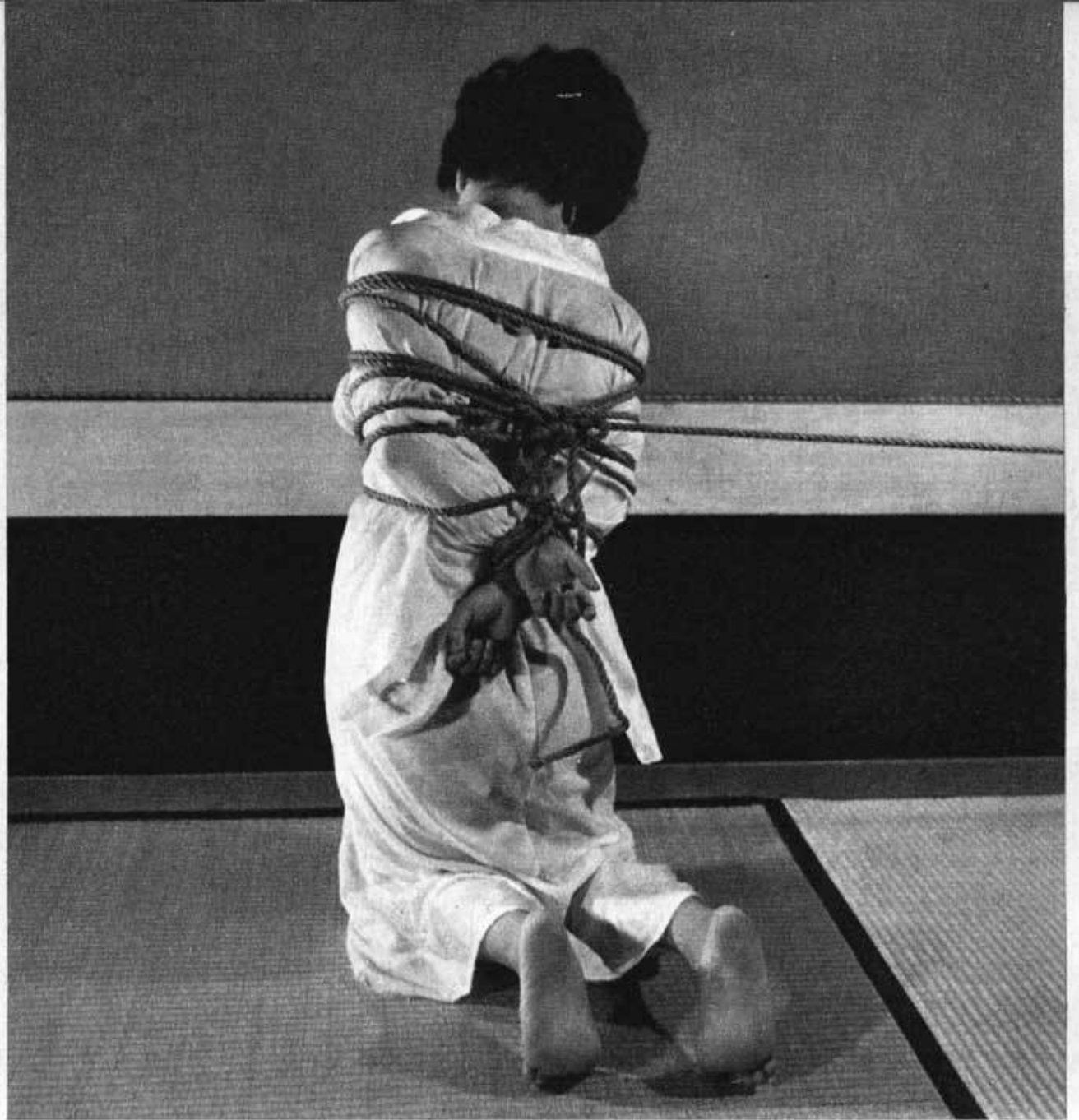




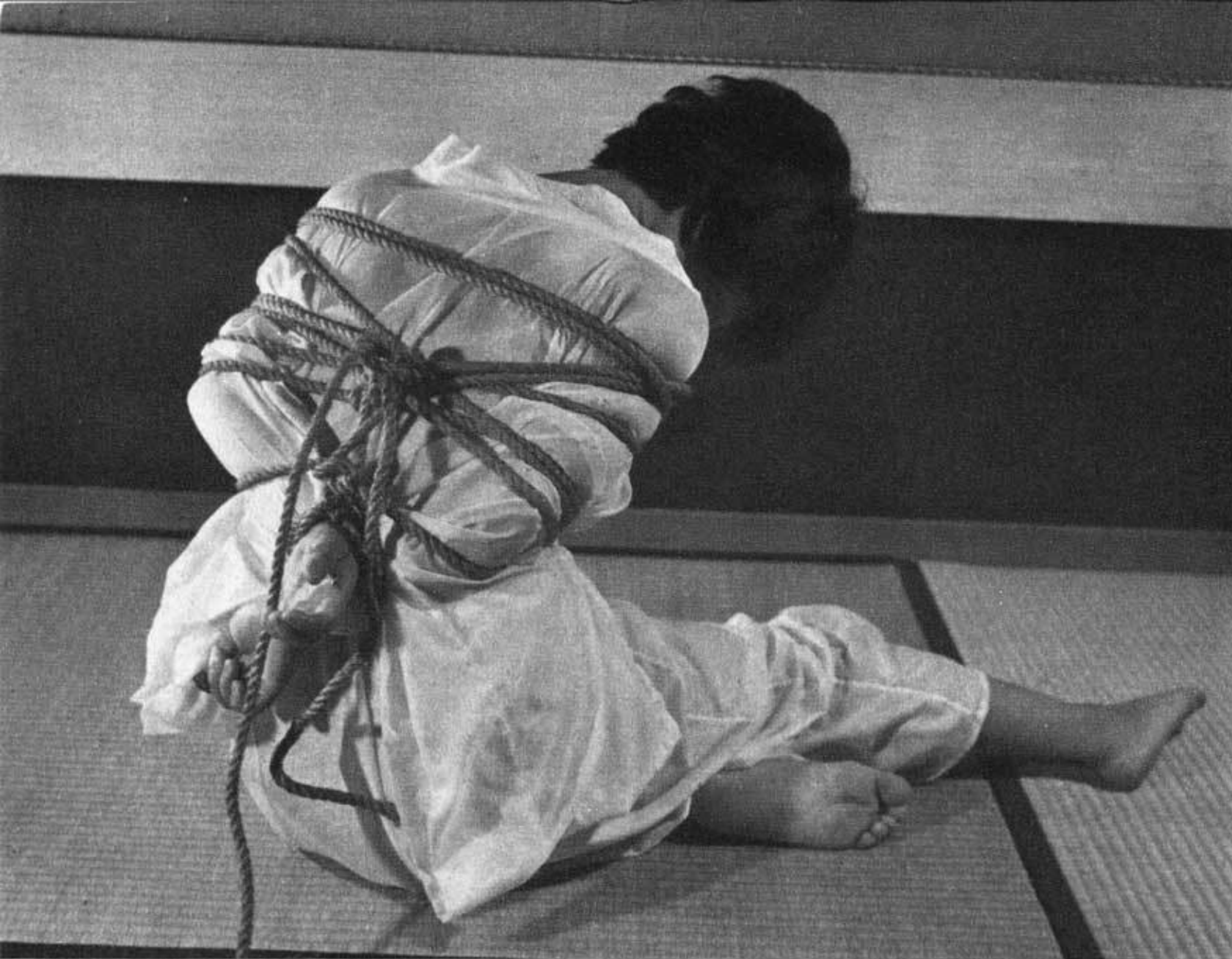




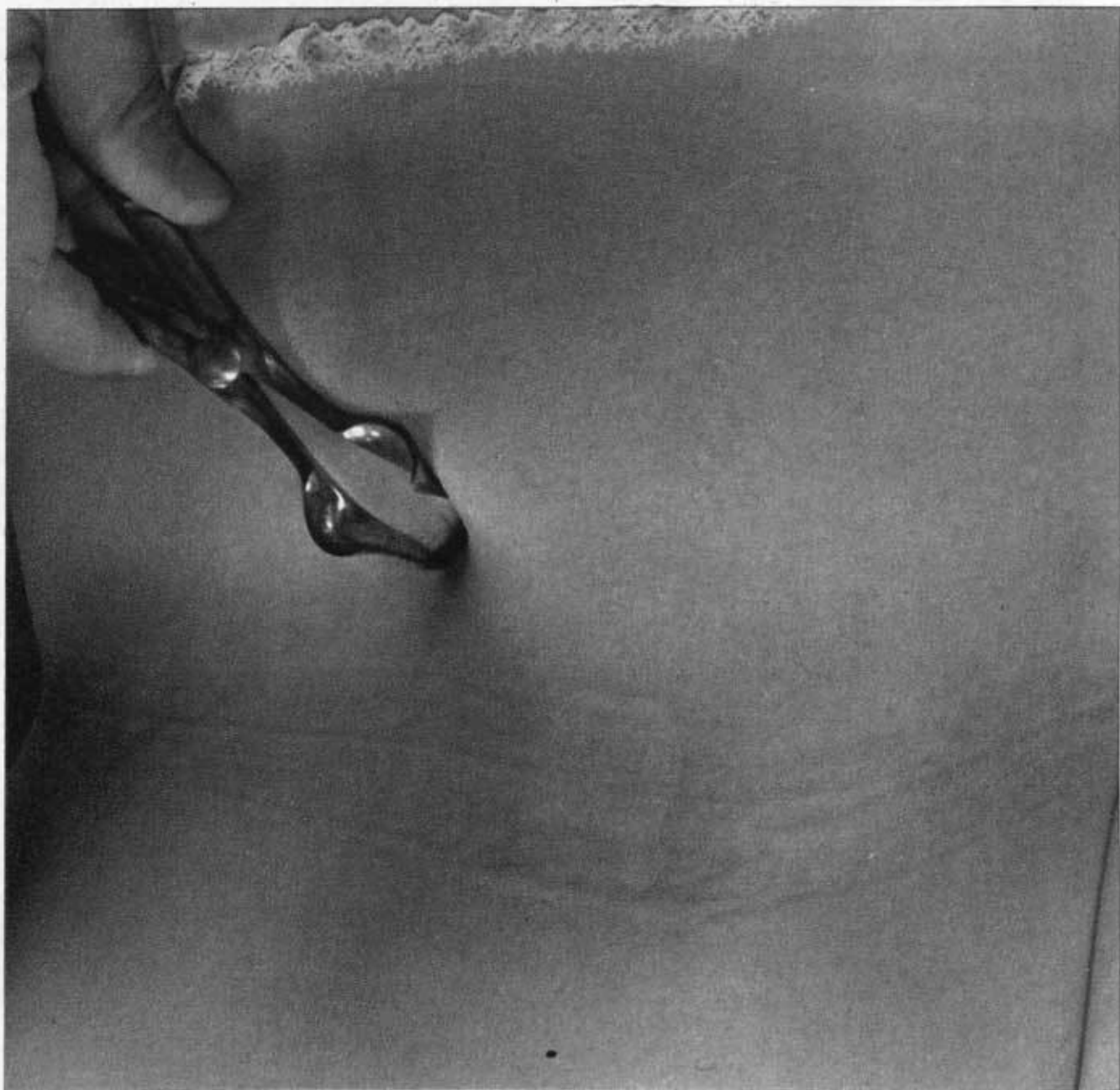
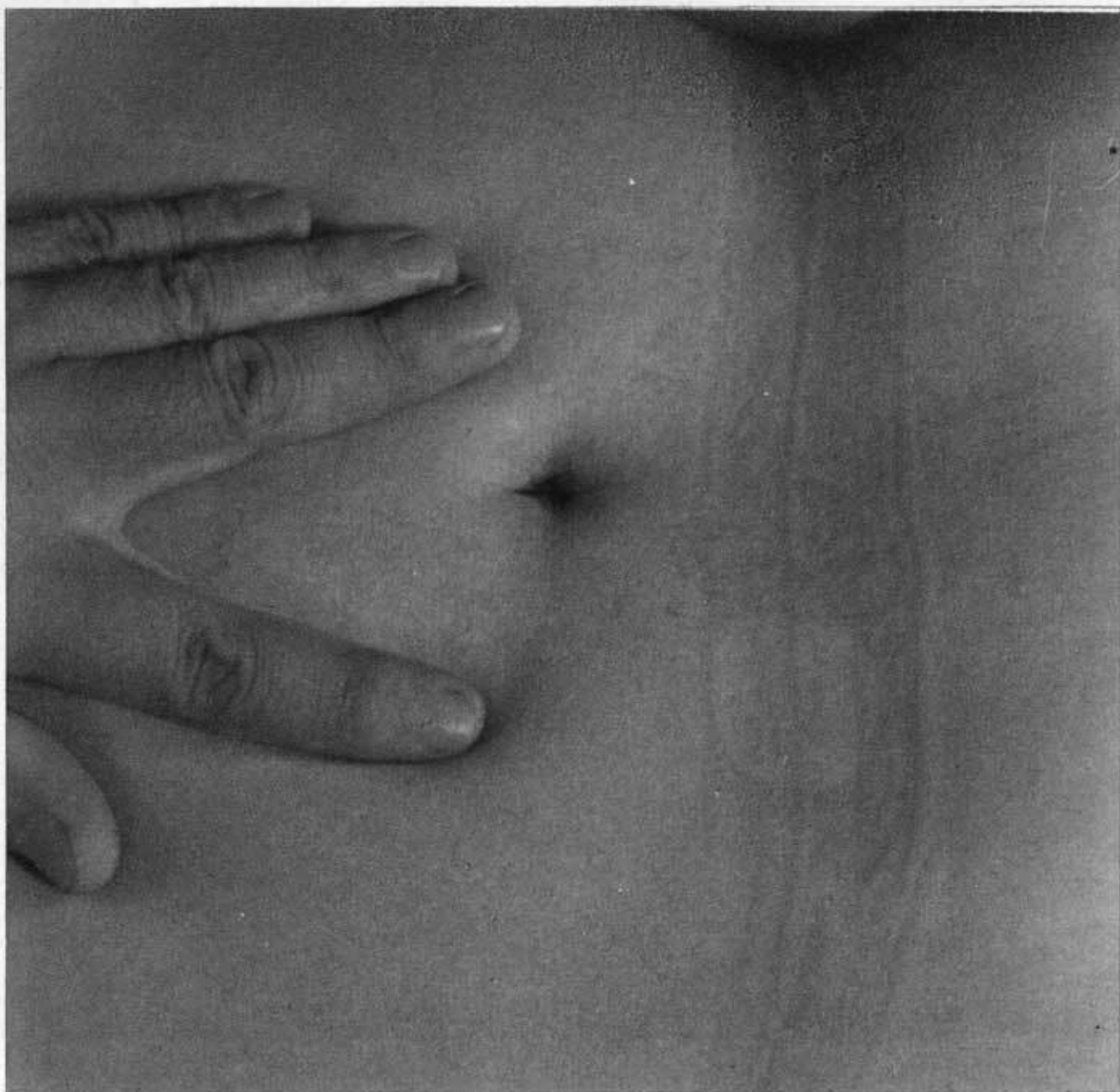




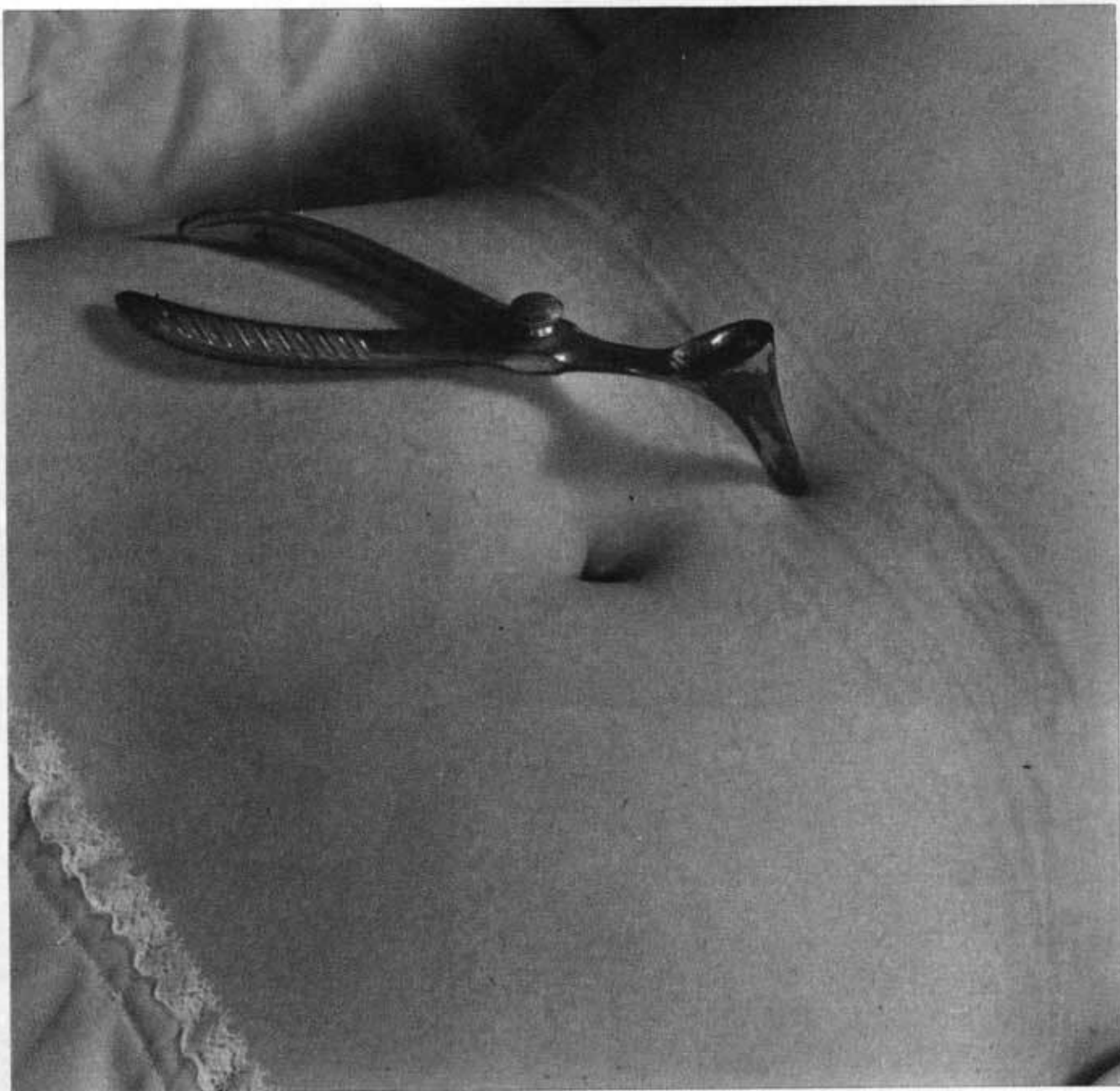




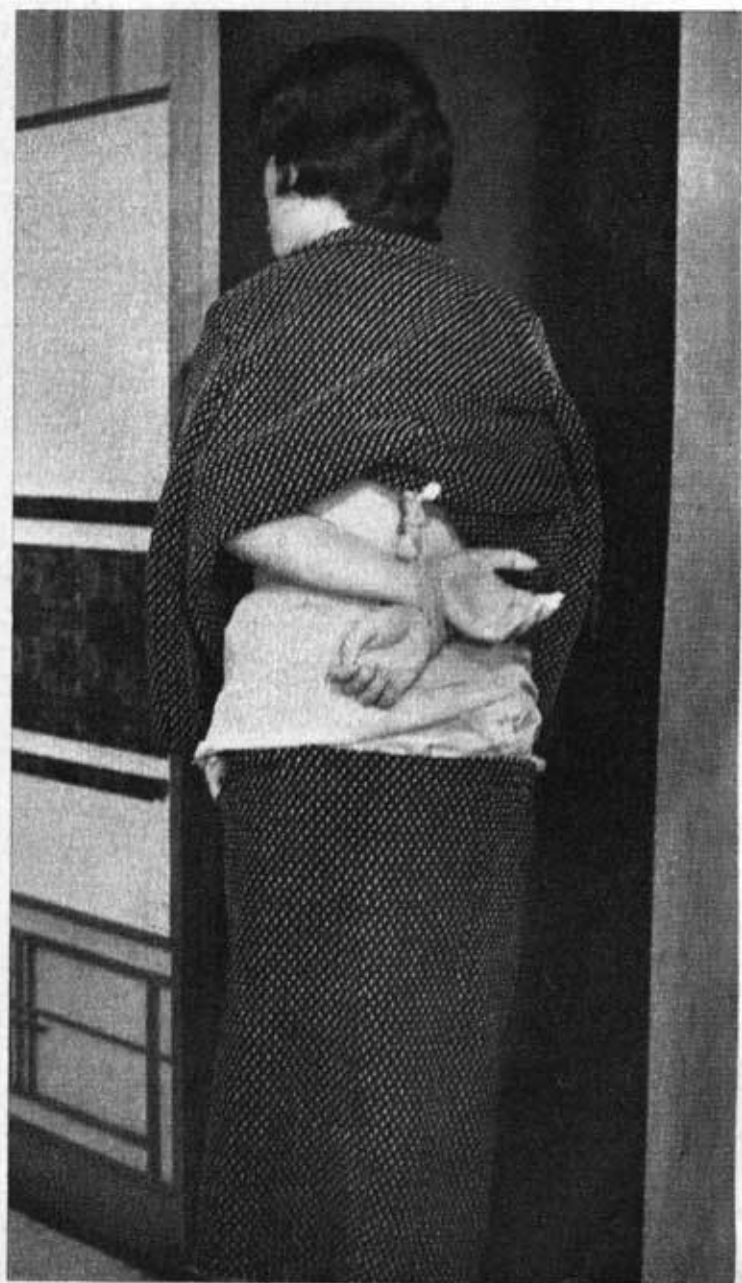
















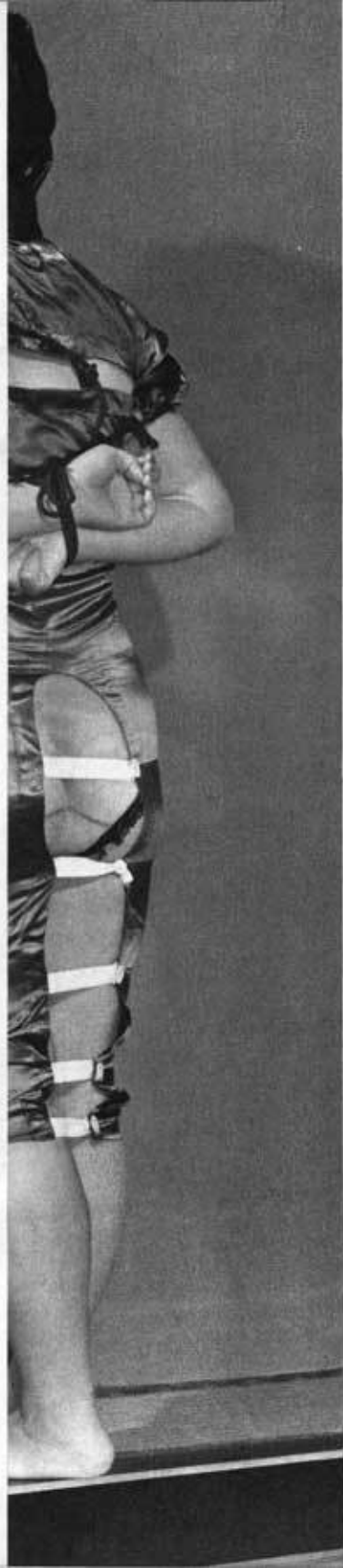




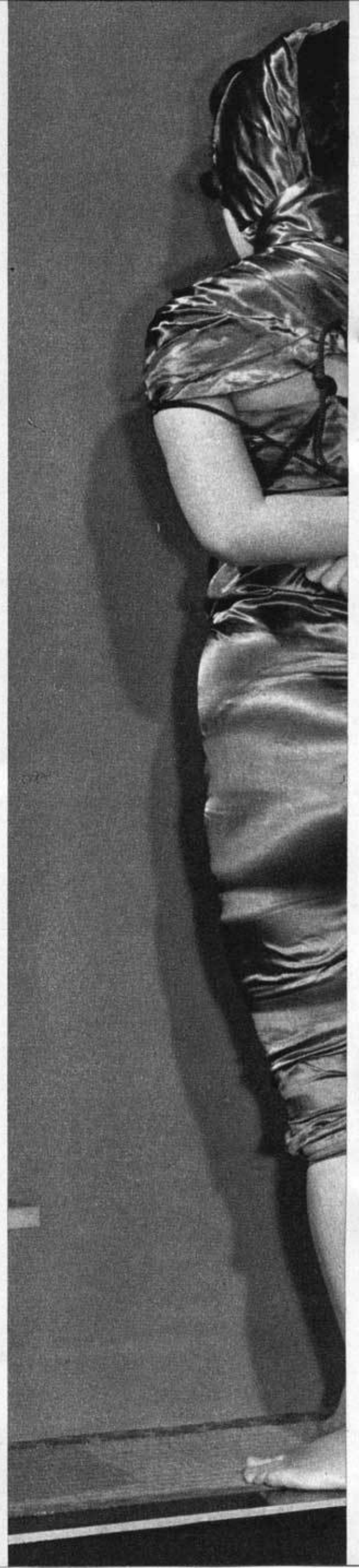




























最近頂いた通信の中で、多く話題になった二つの事柄を挙げる事が出来る。一つは小森プロの「日本拷問刑罰史」に対する賞讃の手紙であり、もう一つは東京都の青少年の健全な育成に関する条例に八誌が指定されたことについての御意見であった。

映画「日本拷問刑罰史」については本誌でも先月号と今月号に若干掲載したし、他誌でも詳細に紹介しているの、重ねて述べる煩を避けたいが、ここに一つ注目すべきことがあった。それは都条例の条文に「残虐性」という項目を重視しているにも拘らず、映画としての「日本拷問刑罰史」が問題になったというのを聞かないという点である。この映画自体、映倫の成人向としての審査をパスしているの、当然といえば当然なのだが、この映画のスタイルを口

絵に掲載した雑誌の十二月号が、この写真の件りが指定になったという事は、一応注目すべきことであつた。

次に私達関係三誌が都条例の初の指定に各々十二月号が含まれていたという事は、ショックといえはショックであつた。この種のテーマが忌避されるであろうことは予想されたので、三誌の自粛申し合せに基いて慎重に編集内容のセーヴをしてきたのだが、勿論はつきりしたボーダーラインを明示されたわけではないので、一応映画館のウィンドのスタイルや劇場のポスターなどで指定になったものの類推から判断して、十一月号以

降、グラビヤ写真の減頁、口絵の廃止、挿絵の減少、文章の削除などを強行してきた。

ここで、まことは皮肉なことは読者の方々に対しては、誌面の内容低下ということが肌身に触れて如実に感じられたにも拘らず、一般の方々からは、まだまだ自粛の線が徹底していないと判断されたことである。

一部商業新聞の中には、もうこれ以上罵倒すべき言葉を知らないという悪意に満ちた一方的な記事を載せていたので、これを読まれた寄稿家や読者の方々から、いろいろと御意見を頂いたことであつた。もっとも業界紙のなかには、読書新聞のように純粋に客観的な立場から事実を冷静に報道している新聞もあることはあつたが、商業新聞の一部にはひどいものがあった。勿論新聞発行も営利事業なのだから、こうした読者をひきつけ易い記事を煽情的に書きたてたという気持は、現在の激しい新聞購読者獲得運動のせり合いから

考えて、その気持はわからぬでもないが、映画では成人向という範疇に入るべきものが、これが雑誌となると、悪書とか不良誌とかいや、もっと聞くに耐えぬ悪罵的文句となるのは、いささかうなずけない。

もっとも成人向映画の広告が彼らの新聞の記事下を何段通しかで埋められてるということを考え合せれば、当然この謎とからくりが解けると考えるのは、嘗ては新聞記者をしていたことのある私の新聞経営の裏の裏まで知りつくしたことになる僻目だろうか。王様であるスポンサーの御機嫌を損じたくないきめ細かな誌面の配慮に、私はむしろ敬意を表したい。

とまれ、私達は真面目な御意見は真剣に誌面に反映させるよう努力している。それが必要とあれば、グラビヤ写真や口絵、挿絵の全廃をさえ断行してもいいと思っている。こういうところがいいの、だと、率直に述べて貰えればそれを改めるには各かでない筈である。今度の十二月号の指定では私達の反省すべき点も順次はつきりしてきたので、皆様の温かい心の籠った書面に感謝しつつ、誌面の改革に努力したい。

## 最近の二つのこと

### 編集子





## 奇クファンの方々へ

「二月号に投稿して」

長谷 好志男

「どうだい、こうして見ると、又別な味があるだろう。」

一月号を見ている妻に声をかけると、生れて初めて本に載った自分の姿を見乍ら「何んだか恥しいわ」と云う。それでも、まんざらでもなさそうだ。

「でも私だけネ前を向いているのは」まわれ右を間違えた生徒みたいな事を云う。なる程『サロン』に同じく投稿された方々のフォトが皆バックスタイルで載っている。妻は投稿された諸兄の作品と自分の印刷された姿を、頁を行ったり来たりして、いつ迄も見ている。そんな姿を見て妻の出方を待っていた私は、内心ヨカッタと思った。

私個人としては、フォトはやはり人間の喜怒哀楽を如実に表現でき得る顔の写っているフォトを好

みます。殊にMSフォトの場合は表情により作品の味が大きく変わると思います。又フォトを製作されている方達の中でも表情をもっとも重大なポイントとなされている方も多い事と思います。しかし色々と事情によってそれを抑えている投稿者もおおいでしようが、

「案ずるより産むがやすし」で思い切って発表している内案外気にならないものと、思います。かく云う私がそうだからです。初めは「バックスタイルだけ」を強調していた妻ですら自分の姿に満足し私の意見に賛成したのです。

私達も『サロン』の呼びかけや諸先輩の写真発表に勇気づけられて投稿した一員ですが、まだ発表されずに一人で楽しんで居られる方、是非発表して下さい。編集部の方や多くのファンが、奇ク読者

がそれを待っているのです。

私達はこのSMプレイの趣味を他人に「隠す」とか「恥しい」と



は思っておりません。出来るだけ多くの機会を見つけて私達の愚作を発表（こんなマズイのもあると云う）させて戴くつもりです。何故なら、私達は『奇ク』のファンだからです。 **△好志男△**

**△編集部より△**

長谷好志男氏御送付のフォト六葉の中から代表的なもの一葉を掲載いたしました。フォトについての御意見を求められていますので誌上での御交歓をお待ちいたします。



## 我が妻の切腹プレイ写真

六角京之助

白サヤノ小刀逆手に、我と我が腹へ。双肌ぬぎの豊かな乳房もあらわに、裾踏みしだいて大きくのけぞらんとするところ。このポー

ズの瞬間、妻は言い知れぬ悲愁の思いを、ぐつと感じたとあとで語っている。



△編集部より▽  
「女志士の斬死」という絵の複写

も一緒に送って来られましたので  
次号に掲載したいと思えます。

## 女の刺青

いれずみ

目黒半平

切腹、女相撲、妊婦と、大分出つくしたところ、いよいよ最後的に、女の刺青が出たようです。いつ出るかと思っていた矢先、本誌昭和三十九年十二月号で婦人の入墨があらわれて、誠にうれしき限りです。

十二月号グラビアの女性は、御承知と思いますが、『彫芳』の傑作で、完成間際に行方不明になった女です。何処へ行ったかと気にして居ったのですが、健在だったので先ずはお目出度いことです。『彫芳』は親子二代の文身師で現在の息子は五十才で、親より

上手です。実に研究的な仕事振りで現在日本一の腕前です。人間がよく、自分



ど女房を試験台やら、見本の意味で全身に刺青を青々と彫って居るものですが、『彫芳』の場合は珍しく夫婦共白々です。趣味はステレオ、ラジオで自分で組立てて休みには静かに音楽をきいているという人柄です。小生との交友は親爺の時代から、彼が子供の頃からです。文身、彫物、刺青、入墨に関する研究歴は五十年近くなります。何なりと助言いたします。刺青同好の方々からの、お便りをお待ちします。





瀬沼四郎

佐仲晴成

佐渡耕作

## 最近号の感想

瀬沼四郎

このところ毎号高野原美氏が投稿しておられる。六月号ごろから注目していたが、十二月号の「蛙腹女体解剖」は収穫だった。原美（孕み？）というペンネームからも、相当の妊婦マニアであることが想像されておもしろい。十二月号でも新年号でもそうだが、切腹（腹裂き？）とか解剖の方に興味があるようで、その点が小生などちよっとちがう。

これも前からの寄稿家で佐土良志氏、新年号でも「花と蛇」のファンとして静子夫人の妊婦ショウに期待しておられる。小生もまったく同感だ。ただ臨月妊婦逆さ吊りの鞭打ちはどうだろうか。流産（早産？）する前に子宮破裂をお

こして死んでしまいはせぬか。心配である。実際の物語では静子夫人がなかなか妊娠しないので、だれか先走って「贗作花と蛇」、というより「蛇と蛙」？の「妊婦ショウの場面」を書いたらどうだろう。

流産（早産？）ショウなどというむごたらしいものより、「分娩ショウ」でもいいではないか。全裸。家庭医学書では、体毛を剃っておくことが望ましい、とあるから、ちゃんとした産院ではもちろんそうするのだろう。あるいは孕み子が大きくなりすぎて、帝王切開分娩をする、などというのはどうだろう。全裸、剃毛、そして下半身だけ麻酔、意識のあるままで

臍の下をタテに切って胎児をとり出す。その手術を見世物にするのである。実際にも全身麻酔は腹の子のためによくないので、局部麻酔で切開分娩をすることが多いと聞いた。

空想はそれ位にして、十一月号サロンの田中美佐子夫人のことばでも、十二月号の小生も参加している座談会の辻村氏の発言でも羽村京子さんの執筆を希望していらる。小生も同じである。妊婦マニアでない方からもちよいちよい要望が出ていふことでもあるし、ぜひ以前同様健筆をふるってもらいたいものである。

最後にサロンその他で、夫婦SMプレイの記事が最近とくに目につく。十一月号では例の田中美佐子夫人と芥川一夫氏、このうち、前者は分譲写真（妊婦フォト）もあり分娩後の写真も二葉のっている。後者は待望の妊婦フォト

（臨月妊婦逆さ吊り！）撮影予定であるという。十二月号でも、巽良一氏の「妻の妊娠と緊縛」、写真にはあまり妊婦らしく見えないけれども、一応のっている。これもマニアにとってうれしい話。新年号では、小川明氏「私の撮った写真（妻をモデルとして）」（写真四葉入り！）高松志朗氏「夢のアルバム（SM夫婦の友を求む）」（写真二葉入り！）、さらに長谷好志男氏「私達はSMプレイ夫婦（同好夫婦の方々へ）」（写真二葉入り！）——それぞれ二十代の若い奥さんでいずれも妊娠可能だろうと思う。そうなれば妊娠フォト撮影可能であろうから、今後もぞくぞくとあらわれると思われるこの種のご夫婦によって、すばらしい妊娠フォト——臨月フォト——を見ることが出来るのもそう遠いことではあるまい。妊婦マニアとしてその願いや切である。

## 奇譚クラブのあり方について

佐仲晴成

最近の奇譚クラブでは、毎月のように「愛読者のみなさまへお願い

い」と題して読者に対して自粛編集のお詫び？をかねて、お願い



を申し上げておられる。

私などは、現在の奇譚クラブのほうか、かつてのそれよりも、より好ましいのであるが、他の多くの読者諸賢に、最近号に対する不満でも山積しているというのであるうか。

ビュ―と飛び散る真紅の血汐……。

どくどくと流れるどす黒い血糊……。

ギァーという野獣の悲鳴にも似た断末魔の叫び……。

ゴボゴボと食道から吐き出されるドロドロの糞尿……。

等々……。

というような、惨酷な場面、グロテスクな情景の描写だけが奇譚クラブの行く道ではあるまい。

もっと現実に立脚した姿のSM生活の中に無理なくとけ込めるSM、そこにはユーモアがあり、ペーソスがあり、私達の夢が綴られる世界。

私は、奇譚クラブが世論に追われることを憂える前に、世論によって守られる存在であってほしいと切望している。

最近の識者と自称する一部の連中のやりかたとして袋だたきになっているかのような感がある。彼等

は、一億総修身教師的な感覚で、日本人全部がまるで一点の非の打ちどころもない聖人君子かのような道徳論をふりまわしている。亦世の多くの人々も、一人一人をすれば、皆エログロは好きであるのに、それを常識という不可解な衣にかぶせて、その道徳論に耳を傾けているふりをしている。

奇譚クラブには奇譚クラブの理想があつて、この道一筋に打ち込んできているのだらうに、それを世間のいわゆるイイカッコーぶる道徳家と自称する連中の攻撃をあびなければならぬとは、本誌編集部の方立場もつらいだらうし私達読者にとつても、にえたぎるほどの怒りに頭が熱くなる思いである。しかし、多くの人の目にふれる出版物には、好むと好まざるとにかかわらず、やはり一定の限界があることを、私達自身も自覚する必要があるのではないだらうか。「文芸春秋」、「小説新潮」とまで期待することは不可能としても、せめて、「良識ある特殊専門誌」として、大衆に認められ、大衆に愛される雑誌に成長してほしいと思う心は、私一人ではないであらう。

そのために、グロの小さな殻

から脱皮して、大衆の生活の中に浸透していき、私達が電車の中で、平気でカバンからこの本をとり出し、膝の上で繙くことが出来る時代を、奇譚クラブと読者が一

## 最近号の迷評

### 10月号

10月号はグラビアに佳作が揃い楽しく拝見しました。

第一グラビヤ「責写真に囲まれて」は、巻頭を飾るにふさわしくそつなくまとまった完成された作品で大塚さんの表情が美しい。

「フォートによるポーズの研究」は左頁上段が女体の美しさを出しています。出来ればこれもコード縛りにして欲しかった。

「ムードを楽しむ美女の表情」はなんといいことはないが梨花さんだけに捨て難い作品。

「首絞めのプレイ」は全身像をも一枚。

「柱に晒された麗軀」は麗人絹川さんを活した作品。表情も脚も申し分ない。乳房が平板になったのは残念。

「赤いビニール・カバー」を穿く

体となって創り出していかなければならない。

その日が、一日も早からんことを祈りながら、ペンをおく。

佐藤耕作

女「悶えのポーズ八態」は実は両方で八態なのだが、ガッチリ縛り上げられた大塚さんの前面、背面を見せてくれる。カラー写真なら白い肌に穿せられた赤いビニール・カバーが艶やかであらう。

絹川さんの「優美な緊縛姿態」は確かに優美なのだが写真の調子の悪さが致命的。

木村洋子さんの「破られたストラックス」は良い作品ですが、これだけでは物足りません。

「強靱さを誇る女体」は題意に反して梨花さんの可憐さを感じる。

アイデア画「お灸責め」は別に目新しいものではない。長い髪を利用して仰向けにし美しい額や喉に灸をすえてはどうでしょう。

「黒光りする革衣」も見慣れた作品、革の質感も乏しい。これに比し「自動給水装置」が良い。半裸



の女体の後手と足首を縛り喉を締めた革紐でベッドの鋼管に固定され、ホースをくわえさせられた女の表情が美しい。

第二グラビヤでは「庭園の変った風景」が絹川さんの美しさを良く出している。特に左頁の肩、腕乳房、それに乳房にかかった長い髪が美しい。顔が影になったのは惜まれる。

梨花さんの「そっちへ行くのはいや」はストーリーのある作品。

耐えようのない残酷な責を美しい裸身に受け哀願の末やっと許された、トイレも前手縛りのままであった。排便中に意地悪く幾度も縄を引っぱられやっとの思いでパンティを穿き終ると同時に引きずり出された梨花は男達の待っている部屋を見て立ちすくんだ。そこには人間である事を忘れさせられるような、女体の哀しさを骨の髄まで思い知らされる恐ろしい責具が彼女を待っているのだ。「ああ嫌々」うわ言のように叫ぶ梨花の体は、その意に反して男達の方へ引きずられていくのだ。

一葉目の下半身の脚線美に上半身の動きが加わって素晴らしい作品。可愛い臍も力の入った鎖骨の表情も良い。後のガラスに薄く写

った背面も楽しい。二葉目の坐りこんで抵抗する梨花さんの姿態が美しい。下肢も美しい。そして四葉目の表情、上半身の柔らかな起伏を表す陰影、流れる脚線、比類のない素晴らしい姿である。ここに又奇巧は名作を産んだと云って良いでしょう。

「顔廃と痴呆の表情」は逆光線に美しく加茂さんの姿態を捉えています。縄は乳房の上下を一、二回強く縛った方が良いと思います。

「誇らかな肢体美の点綴」は量感あふれる作品。

「処刑火炎りの構想」はアイデアだおれ。

「コード縛りの諦観の態」は大塚さんを縛りあげたコードの質感が肌にマッチして佳作。

表情も良い。

随筆「花と蛇」楽しく読ませて頂きました。

### 11月号

「答のある座敷の女」は巻頭作品としてまとまりを見せています。ただ答との関連から「可憐な乙女の風情」と共に背中を剥き出して欲しかった。

「縛られた青木順子」は美しい肢体を見せていますが、奇巧との異質感は否めません。

「うごく芋虫」の梨花さんはやはり素晴らしい。丸ろやかにのぞかす乳房、形の良い脚。のけぞらした喉や顎にたまらない魅力を感じます。

「夏の陽に白肌は映えて」は、白日に晒された絹川さんの麗姿が美しい。

左頁上段はポーズは良いのだが猿轡をもっときっちりかませてほしかった。

四馬孝氏の口絵四葉はいずれも新味に乏しい。強いて云えば「テレビ局スタジオ風景」の美女の上半身と下半身の不調和におもしろさがあります。

「操り責めにあう美女」は右頁下段が梨花さんの腕の美しさを見せ良い作品。このまま脇の下や乳房の囲りを失神するまで操って見たい。

「大人しき『白日夢』」はただ半裸の女性が吊られているだけだがモデルが五月さんだけに手離せない作品。怯えた可愛い顔。流れる線の美しさ、少し傾いて並んだまろやかな形の良い乳房。素晴らしいものです。「破れた下着の悦虐ポーズ」は見なれた作品ですが梨花さんの肢体の美しさはさすが。「竹の棒のアクセント」の大塚さ

んは、表情が可愛い、こんな彼女にSを100%発揮できたらどんなに素晴らしいだろう。

奇巧サロン「四面楚歌をうたう」に愕然としました。責が強烈だとされた数十枚の作品はどんなに私達が渴望しているものか御存知なのでしようか。現在の口絵の手緩さマンネリズムを救うため、一号に一枚づつでも掲載して下さいよう切望します。

奇巧サロンの水野弘氏の「斬り落された生首」にも驚かされました。完全に胴体から切り離された生首。縛られたまま転がされた胴体が生々しさを引きたて凄惨な作品です。

「花と蛇」こんなに早く掲載されるとは思っていなかったので意外な喜びです。挿絵が不満ですが前編に劣らぬ力作を期待します。

「マゾ願望の人気者青木順子を縛る」は良かった。彼女の舞台を是非拝見したく思います。今後もうこうした企画を望みます。

### 12月号

グラビヤは刺青姿の山原さんの作品が多かったが美しくしさも残酷さもなく総じて低調です。

大塚さんの「腰ミノをつけた土人娘」は楽しめる作品ですが腰ミ



## ボクの責め方

宝塚二三夫

「白日夢」の路加奈子の責められる悲鳴ではないが、この頃のボクは専らこの文弥節でたのしんでいる。と、いっても、声はカメラでとるわけにはいかないから、テープレコーダの厄介になるわけだ。最近で、ボクのいう所謂文弥節

の極上は、ヨシ子。はじめてハダカに剃いたのは十七才のくれ。縛ったのは十八才の一月（それは今年のこ



と）そして、三月には……といったわけで、それから、ずうっとマニア道まっしぐら。

そして、マニアの優等生として文弥節を上手にうたうようになったのは、つい一カ月前のこと。

ボクの経験で

は、普通文弥節を上手にうたうようになるのには、早くとも一カ年はかかる。いつまでたっても、はずかしがって（ましてやアブチックに）よううたわぬのは、十人に七、八人。

それが、ヨシ子では、最初のおすましの時代から、甘え、そして最近の文弥節（声はここに聞かせてあげられぬが、テープはいつでも貸してあげる）の名調子まで全くすごいポーズ（カメラ）と文弥節（テープ）とで大人顔負け。

（以下次号）

ノの下に着けたパンティが気になりました。

四馬孝氏の四作は氏ならではの美しい作品ですがやはり物足りなさを感じます。例えば「革製拘束具による調教」ではジッパを下ろし乳房を露にして慙しかった。更に露になった背を笞打ってもらえば最高です。

奇クサロン、竹野ひろ子さんの「おしめカバーと私」は私を喜ばせました。私は貴女の美しい肢体が奇クの誌面を飾る日を心待ちしております。

「花と蛇」早くも佳境に入りました。次号が待ち遠しい限りです。「奇譚三十九夜物語」は残酷な責が全篇に溢れています。後味の悪い作品です。羞恥責小説「花と蛇」に匹敵する本格派責小説の出現を期待します。

最近読者通信欄に女性の投稿が多くなり喜ばしい限りです。

井手雅子さん、私も文通志望候補者の中に入れて下さい。

最後に映画「日本拷問刑罰史」を見ました。木馬責、駿河問海老責、逆海老吊り、生き埋め、逆磔、石抱き、火炙り焼燬、逆吊り等の責が美女に加えられ楽しめる作品です。





(第八回)

辻村 隆

先日、和歌山市内で竹野ひろ子と一緒に『コレラの城』を見た、

(竹野ひろ子との一件は改めて書きます)。相当の責めがあるとの前評判だったが、噂に違わず、巻頭で背にとかげの刺青された全裸の女を、野盗まがいの野卑な男達によってたかたか、土間に転がして、責めさいなむシーンがある。更に圧巻は鰐淵晴子(清純派スターの脱皮)逆吊りシーン。丹波哲郎によって前手縛りで両足を縛られ、太縄の端を水車の軸に括って水を落す。水車は徐々に廻り始め、それにつれて、鰐淵の体は足から段々と吊り上げられて行き、地上数米の高さまで逆吊りされる。結局は丹哲が綱を切って、女の体を宙にうけとめ、ラブシーンとなるが、思わず生唾をのむシーンであった。更に、野盗に捕まった犠牲えの女達四人が、逃げられぬ様に湯巻き一つの裸で高々と一纏めにして両手を吊り下げられて、いる集団緊縛シーンもある。男では河野秋武が、二本の太竹に縛りつけられて逆さに立てられ、水責めにあうシーンが延々と続く。製作、監督、主演の丹哲自体も捕まって後手縛りの鞭打ちがある。サド的傾向から見ると、この映画はリアルで実に面白かった。

青木順子後援会について実に沢山の方々からお便りを頂き、嬉しく思っております。向井一也氏の仙台からの便りによると、公演日程は全部、現在、所属の芸能プロ任せで、その前日まで、次の公演日程が分らぬとの事で、当分は岩手から青森、更に秋田へと東北を五日乃至一週間ぐらいで巡業し、大体来年二月頃再び関西地方へ来る予定だといってきたが、旅廻りの悲しさ、順次日程が立たないの、いまの処、お知らせしようがなく、後援会希望の方々の御尊名は全部保管して、一冊はメモしてありますので帰阪次第直ちに連絡する事にしますから、今暫らくお待ち下さい。関東、中部の方には、青木順子と逢っているいろいろ委細をきめた上、後援会章か会員券を送って、その地方で公演の節、それを呈示して頂いた上、会見されてお二人を激励してもらおう様考えております。『生の確認』をすませ、何か新しいテーマと取組んだそうですが、明細は私にも分りません。不恵——。

に彼の仰有る通り、既に青木順子(文面は活字の誤りで春木順子となっています)のショウのレポートを、一九六四年五月号の「続・濡れにぞ濡れし」でトップに紹介しておられる。謂わば、私のカメラ・ハントは二番煎じに過ぎなかったのであるが、手前味噌を謂うならば、芳野氏は神奈川県下のB劇場の一観客として。私はそれを乗越えて、直かに彼女をこの手で縛って見たという、一歩進んだ観点での違いはあると自負しています。『医者の不養生』めいたもので、絶えず奇巧に書いており乍ら、その内容を精読してない私が、はからずも芳野氏によって曝露されてしまった。そこで改めて彼のものを読み返すと、実に面白い。しかも昭和二十七年頃から、既に名を列ねていた十年選手でもある。私がコプロ趣味を書く、と、どうもギクシヤクして露骨になり、自分でその文がいやになっってしまう。三十九夜にも、芳野氏の趣向と同傾向のものを扱って、数篇のせたが、何れも反応なしであった。

芳野氏の贋作シリーズ、更に綿々と今につづく『濡れにぞ濡れし』のエッセイ——。流麗且つ暢

青木順子の会見記で、私は芳野眉美氏から便りを受取った。確か



達、粹なタッチ、読みの深さに、改めて敬服しています。よき友との御交誼を願う意味で、三隅良信氏の了承を得て、彼のモノしたSMプレイの芳野氏好みのフォト二葉を贈呈した。いつか相見える日もあるうかと愉しみにしている

× × ×

## 異常正論その他

山本五城

芳野さんの文章や「わが体験を語る」座談会の記事のため、三十九年十二月号は夫婦SMプレイの特集号めいた感じであった。特に座談会では女体の美をそこなわぬプレイということが話しあわれていたが、これらに関して次のような私の意見を述べさせてもらいたい。

私に云わせれば、人間に男と女の区別があるということ、それがもはやSM的現象なのだが、それを最もあきらかに型どっているのが夫婦生活である。つまりSMプレイの有無にかかわらず、夫婦生活はSM的な結びつきであるのだから、プレイの有無にしたがって

滋賀の安田さん（十一月月号楽我記記載）を紹介しました。布施のK氏に一言——。

貴方を同好の士と信じ、快よく紹介しましたのですが、お逢いの一件は安田さんからは報告ありませんが、貴方が最初お約束した、プレイの連絡はその後全然ありませんね。

異常・正常を区別するのはおかしい。

だがそういう私も、生体の損傷破壊におよぶプレイは異常だと思ふ。プレイの本来のありかたは、あくまでも、美と健康の逆説的な追求にあると考えるからである。しかし正常・異常を区別すべき分野はもう一つあり、そこでは、同好者の対社会的態度が論じられなければならない。門外者には煩わしさを与えず、同好者同志は秘密と信義をまもって喜びをわかちあうのが自然——正常と云うべきであらう。

さて次に、この正常・異常の区別を風俗誌の存在にあてはめてみ

た。風俗誌の存在は果して異常だろうか？

人間を性的な面からとらえることで、複雑な社会機構や観念・消耗的な労働が失われがちな虚飾のないままの生きものとしての融合感・充足感復活のころみに、ネガティブにでも参加しているところがあれば、風俗誌の存在は正常であるとしなければならぬ。

平和でのびのびとした常識のゆきわたっている社会にはいつも風俗誌が温存されていたように思う。だが乱世にも風俗誌はねばり強く生きのころうとするだろう。わいざつさも多いが、そこにはいわば無名の庶民の赤裸々な情熱があらわされているのである。近頃本誌や同系のU誌の巻頭に、一読にあたいする時評がのせられ、ともに庶民としての発言がなされて

か——。

尚、本稿脱稿後、十一月十九日に向井一也氏より連絡文入手。十一月二十日まで東京都立川市の文化ミュージックにて出演中とのことでした。文面では後援会の件には大変乗気のようにでした。

いるのは注目すべき現象であると思う。

しかし小なりとも公刊誌として継続発行してゆくためには、現況からすれば、編集方針の多少の変更もうまれ、それに応じた一部の読者層の離合集散ということも考えられる。その際、はなれゆく旧読者もこれまでの物心両面の支持者であつてみれば、編集後記などにおける切りすて御免式の言辞はつつしまれねばならぬであらう。それが庶民の立場というものである。

すこし理屈っぽくなつてしまつたが、夫婦SMプレイを中心にあれこれと話しあいたく思つてのことである。剣持逸人氏のお便りをお待ち申しあげたい。また心あるその他の諸兄の御連絡もお願いしたい。





## 新年号の花々

### 兵頭庫一

悲愴美の極致、女性切腹の花々が、新年号にも瞭然と咲いてマニアの男性たちを楽しませている。

飯森潔氏（会津城外飯盛山で深く散った少年武士に由縁の方であらうか）の「落城の女」は今回で二回目であるが、前回は城外、今回は城内での花の乙女たちの切腹

姿態を描いた美しい絵巻物。前回は戦場なので武装のままであるが今回は城内なので女性のたしなみ白装束を身につけてきちんと膝を固く扱帯で縛って心静かに殿様の御後を慕う健気さを示している。惜しいことには印刷が不鮮明な為、折角の苦心作が充分その真価を発揮出来ていないことだ。これは元になった写真か画のせいに依るのか或は印刷技術上の理由に依るのかよく分らないが、もう少し

鮮明な印刷が出来るとよいお願いして止まない。

中康弘通氏の「切腹研究夜話」いつもながら氏独自の論陣には敬意を表する。カットの絵も誰の作か分らないが見事な出来栄である。

新人川上米子さんの絵物語「美女決斗吉田御殿」は滝れい子の麗筆と相まって、この号での圧巻である。十二頁中八枚の挿絵が入っているのも珍しい。この物語は作者の後書にもあるように本誌四月号で発表された牧真二氏の「駿府城女曾我」とその内容が酷似している。三人のヒロインも夫々琴姫（二十二才）瑠璃姫（十七才）絃姫（十七才）の一組と日野の局（二十三才）、百合姫（十九才）瑠璃姫（十七才）の一組とが相対

している。いずれ劣らぬ若さと美貌に武力勝れた花の女性たちである。異なるところは片や「振袖が招く」と謳われた女の館吉田御殿、こなたは徳川由縁の駿府城で敵とねらわれたのは、前者では松平琴姫であり、後者は徳川千姫の思い者本多新三郎である。話の筋では前者よりも寧ろ後者の方が「女曾我」にぴったりで十郎、五郎の兄弟に百合姫と瑠璃姫の姉妹とが対応している。

時に寛永四年秋九月と講談調も面白く、柔肌を覚悟の白装束に固め黒髪はわざと後に長く垂らして襷、鉢巻姿も凛々しい姉妹は、八年練磨の手槍と小太刀に物を言わせて物の見事に大の男の本多新三郎を仕止めて首尾よく首級をあげて父の仇を討つと勢を駆って更に主君の仇、千姫をも討ち取らんと奥殿深く進み、迎え討つ武士や腕自慢の腰元たちをバタバタと斬り捨てる勇ましき。かくてはならじと女乍らも侍女たちの武芸指南役の名花日野の局、既に数人を斬り伏せて大分疲れている姉の百合姫を見事に討取ってその首級をあげる、これを知った妹の瑠璃姫は美しかった姉の死首を見せられるや、最早や是までと覚悟して

千姫はじめ数多の侍女たちの見守る中を、心静かに前押し開いて小太刀で見事腹一文字に掻切って日野の局の介錯に冷たい骸となる。

大体挿絵と本文の内容とが一致している点は珍らしく良いことだ。というのは多くの場合、挿絵画家は本文には余り忠実性を持たないからだ。仇討に白装束を身につけることは武家時代の作法であったようだが、この挿絵のように長裾、長袂を仇討の衣裳に用いることは果して有り得たことだろうか。女性の衣裳としての優美さを保つには元より結構な事と思うが決斗をするには余りにも不意意では無からうか。袂も裾も短くし白の手甲、脚絆をまとうのが普通だと附記して置く。しかしそのお蔭で裾の開き目から赤い湯文字らしい物がふんだんに見られてずんと楽しい挿絵である。

白無垢の衣裳と赤い湯文字というエロチシズムは白黒では勿体ないから、総天然色シネマスコープにしてワイドの銀幕一杯に三人のヒロインと侍女たちとの決斗場面を展開したら、素晴らしい映画となる。映倫の鉄が入るかどうかは一度伺って見ないと分らないがお正月用の映画にしたなら案外入り





があるのではないだろうか、いや、これはマニアの空想に過ぎない。

こうした仇討ではなくとも時代劇で奥女中の決斗場面はひとり切腹にこだわらずに、勇壮且つ妖艶

なテーマとなり得るから、今後も引続いて、楽しい絵物語りを発表して下さるよう作者にお願いして

私の拙い筆を止める。同好の方々からの通信を待つことや切。

## 武士道残酷物語

「切腹心中」

森田敬三

純粹熱烈な二人の愛を、封建的な武士道は、身分の相違故に許さなかつた。二人にとって、愛を得る道は死に通じていた。しかも、死後も葬儀さえ禁じられ、武士にあるまじき行為として、総ゆる辱しめを受けることを覚悟の上で、非人間的な武士道に

反抗する唯一の方法として、最も苦痛な切腹に我が身をさいなまれながら、自殺する心情も哀れです。

今日なら純愛と賞讃され、前途を祝福されるべきものが、当時では不義密通という犯罪なのです。恋愛の自由を享受する現代の若者たちには、この悲恋の苦痛など知る由もありませんが、とかく保守派や右翼の人々の讚美しがちな武士道とは、斯くも残酷です。

恋人が直に後を追うであろうことを信じて、見事に割腹絶命した男性の脇差を取って、女性もまた勇壮に下腹を一気に掻き切り、うう……と覚えず呻めいた場面を描きました。

原画となったのは、男性は滝れ

い子氏の「相對死」、女性の方は某氏の御好意によって入手した写真ですが、原作はこのような服装ではありません。腰巻を解いて腹部の前に引出したのは、私の創意で、こうすれば腰巻に妨げられず切腹ができるだろうと判断したわけです。諸兄姉の御批判をお待ちいたします。

なお、これはここに掲げた拙作と画は関係のないことですが、本誌上では、毎月私達の渴望してやまない女体切腹に関連した記事や写真、絵画を掲載されていることは感謝にたえないところですが、この記事の故に、毎月本誌を期待して購入している私達マニアとしては、その少しでも多くを望むのは当然のことです。

しかし、どなたかが通信が言っておられたように、全誌面を切腹で埋めてくれなどということは望むべくはないので、せめて、文章写真絵画の各一つぐらいは、毎月確実に発表していただくというわけにはまいらないでしょうか。



## モネル通信



## 「カメラ・ハント」志望

刑部典子

——辻村隆様へ——

愛読しておりました『三十九夜物語』も終り、引続いて毎月カメラ・ハントがのりますので愉しみに致しております。

青木順子さんや、刺青の女性など、特異な方が次々登場されますが、辻村様——、私ではカメラ・ハントの特ダネにはならないでしょう。現在二十三才独身です。器量は自分というのもオカしいですが、まあまあだと思っております。丸顔で、身長は一五六cm、体重四九キロでございます。

神戸元町の中華料理店で住込で働いておりますが、休暇は月に三回、私の自由な日にとれます。私の他の女の方と異なる特徴は、耳穴に穴を穿っている事です。

「三十九夜物語」の最終回の「穴に憑かれた男」に出てくる巫女の

様に……。お気に召しませんか。

穴を穿ったのは、今から二年前で、この店の主人の太々(奥さん)が中国の人で、穴をあけておられいつもヒスイの耳輪をはめておられますが、私もイヤリングをいつも常用しておりましたが、主人のすすめで、ふと穴を穿つ気になり主人にあけてもらいました。

私は、空想では、よく縛られたり、汚辱にまみれる自分を想像しますが、未だ本当に縛られたことは一度もありません。この耳穴を責め用に使われて、縛られ責められて見たらと思いつけるうち、思い余ってお便りして見ました。果してどこまで耐えられるか私にも見当つきませんが、誰彼構わず、こんな事は喋れませんが、思い切って辻村様をお願いする事に

きめました。

呼んでから困ると仰有られると私もメンツがありますので、お店に來られて私を御覧になっても結構です。店は××飯店で神戸では有名な方です。店での名前は中国風に、ピンギョ(碧玉)となっておりますが、一階入口のレジに座っておりますからすぐ分ります。

こんな私でもよかったです。是非私の夢を叶えて下さい。名古屋の「M七〇生」の方とSMプレイ

## ゴム・プレイをしよう

中田明

なつかしい名前である——竹野ひろ子。

奇ク十二月号は貴女が健在である事を伝えてくれた。それより以前、九月号だったかには、辻村氏の記事の中で、貴女とばかり逢った事が記されてあり、今回のサロン記事で貴女自身がそれを認めていた。何より喜ばしい事である。

得恋から同棲、そして破局を経ての貴女には、心から同情し出来る事なら優しく慰めの言葉もかけて上げたいと思う気持切である。

イをして、鼻と耳を責めて見られては。私からでも構いません。仕事の関係で、神戸市内なら、気楽にプレイの出来るホテルを存じております。

耳穴は三ミリ程度までのものなら通ります。いつか、私の耳責めフオトが、カメラ・ハントにのる事を、毎夜夢見ては、辻村様のお返事をひたすらに待ちつづける私です。

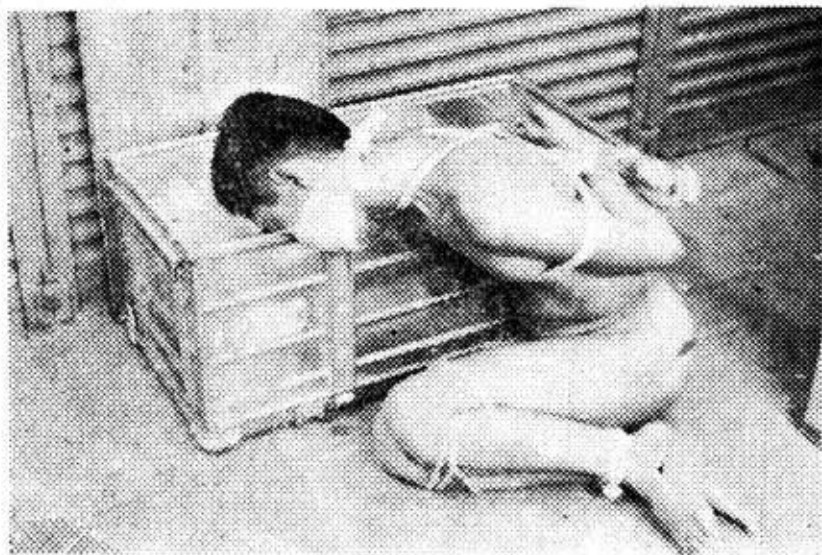
彼——貴女の愛した人との生活の中において貴女が告白しているように、変な女だと思われたくない許りに「性癖をひたかくして尽した事の甲斐もなく淋しい別れで報いられた貴女は、彼を恨んでいい筈なのに、もとの自分を再発見した事で慰めているのはいいらしい。

今、幸いに私は大阪に來ている——出来る事なら優しい言葉もかけて上げたい……といったのは社交辞令である。より直接的に貴女と会って話し合ってみたい。貴女

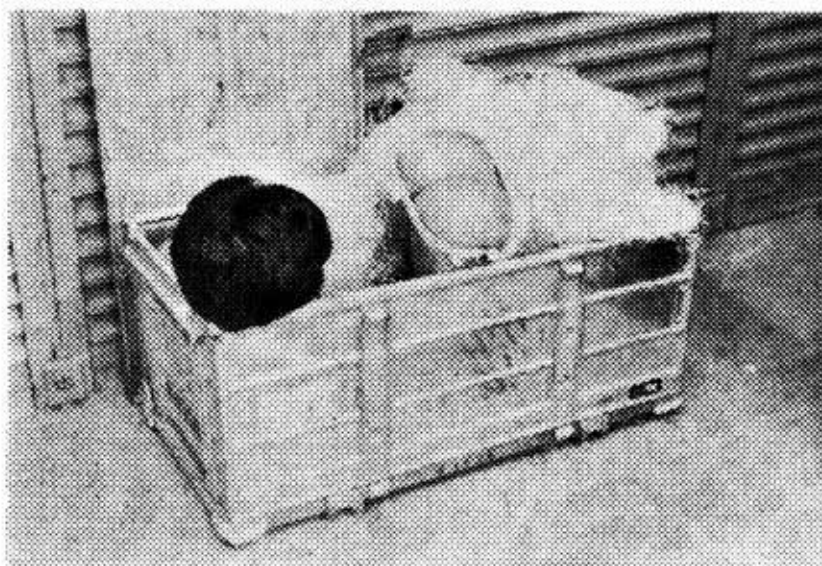


## 輸送されるドレイ青年

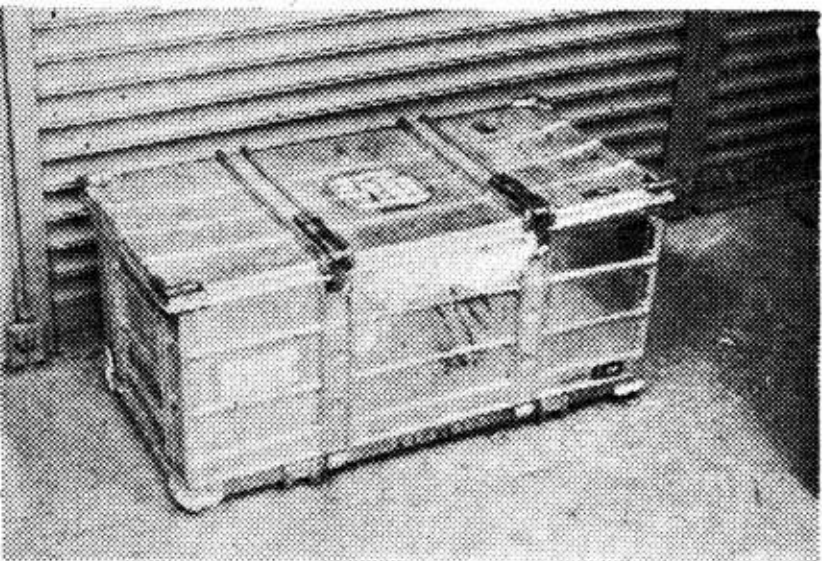
美 柳 輪 生



捕えられたドレイが運び込まれる



コンテナに詰め込まれるドレイ



ドレイを収容した日通コンテナ

が望まれるように「私を喜ばせて下さる方。」として貴女の前に立ってみたいと思っている。

私は奇ク十一月誌上で、ゴム・プレイのアイディアを津田亜紀子嬢に呈した。貴女はおそらく単なるガールハントのつもりでパートナーを探しているプレイ・ボーイだと私の事を想像しないだろう。昔話になるが、貴女が奇クの読者通信にその名を見せた直後——昭和三十七年六月——には、同じ読者通信で私は貴女に呼びかけた。

だが「今迄沢山の方々が、私に呼びかけ下さっておりますのに、沈黙を続けていた私——。」といわれているその沢山の同好者の陰に私もまわされてしまっていた。だが今こそ好機ではないだろうか。社用で大阪に出張して来ている私であるから、十一月号のサロン記事で触れたようなゴム器具の手持ちは今はない。でも、因縁めいた話にはなるが、貴女がモデルとして辻村氏のカメラに納った時、一番好まれたというハエバーソフト

のビニール袋が、手持ちの荷物の中に入っているし、貴女をしのぶ手がかりとなっている分譲フォトの一片に、そのビニール袋詰めフォトがコレクトされている。

貴女とプレイが出来たら、本当に嬉しい。私のプランはその記事をお読み下されば納得出来るだろうし、貴女が希む「若し縛るのであれば裸で縛った私の体に、レインコートを纏わせて、心斎橋でも一緒に散歩してくれる方——。」のようにして意義ある読者同志の

交歓を果してみたいと熱望する。

貴女の望む条件と、今の私は全てがピッタリと合致している。難波の新歌舞伎座裏に宿をとった私は、貴女が通勤で昇降しているであろう南海電車の終点である高島屋のネオンを、なつかしい人に会える喜びを抱き乍ら眺めている——この手紙が貴女の許に回送された暁——きっと貴女とめぐり合う事が出来ると信じている。

貴女と「ゴム・プレイをしよう」と呼び掛けた事が夢ではない事を期待したい。





## 身重のヴィーナス

瀬沼四郎

所用で大阪に来た機会を利用して、久しぶりにストリップを見た。名前を挙げては迷惑かも知れないけれども、天満の辺りの「浪花ミュージック」という小さい小屋である。ご多聞にもれず、いわゆる関西ストリップのきわどいシーンに観客は夢中になっていたがむしろその点では、ここはまだおとなしい方で、小生の横に座っていた人などは、大いにものたらぬ様子に見えた。ところで小生が関心をもったのは、ヌード・ダンサー（と近ごろでは言うらしい）の一人が明らかに子を腹に妊んでいることに気がついたからである。

奇ク誌上に小生はたびたび妊婦

マニアとして、妊婦のストリップがあればいいなどと書きもし、さらに勝手な空想を加えて、あれこれ言ったりして来たけれども、実のところを言うと、はっきり妊んでいることがわかる踊り子を見たのは、これがはじめてである。新××とか夕刊××とかいうような新聞に広告をのせている程度に有名な劇場では、まずおそろく妊娠したことの無いダンサーだけを集めているだろうし、場末の劇場とていうのは案外分らないものである。そこでその妊んだ踊り子のことを書いてみよう。

その孕み女は、こんなことを書くのは気の毒であるが、どう見ても美人ではなく、年令も、他の踊

り子より幾分ふけているように見えた。肉体も決して美しいとはいえない。しかも、若くて、美人でグラマーである他の踊り子が、手を変え品を変えて何度もくりかえし登場するのに反して、幕あけとフィナーレとに全員出場するときと一緒に出る外は、ごく短かい時間一回出るだけなのである。幕のあく時には、おそろいの着物を着たままなので、ちょっと胴が太いなどと思う程度にこまかされてしまふし、フィナーレでは、これもそろいの紗をまとっているの、気をつけて見ると、異様に太い腹がすけて見えるので、はっきりそれと分かる程度である。ただ一回の出場では、膨隆した腹部を出して見せるが、着物の前をひらひらさせて、なるべく腹を見せないようにに隠そうとするので、妊んでいる腹部のグロテスクな大きさがその全容を観客の目にさらされるのは、全部でせいぜい五秒から十秒くらいではないかと思う。小生にとつては、まことにもどかし、残念であった。それに、客席の中に延びている細長いステージには脱ぐ前に出て来るだけで、いかにも自分の妊娠した姿を恥じているのである。

けれども、着衣で踊っていると、きから、からだの恰好や身のこなし、動作などが、かなりはつきり妊婦の特徴を示しているのである。たとえ、数秒でも、相当ものすごい大きさに膨れ上った妊娠腹を見せるのだから、小生の見たところでは、おそらく全部の観客が彼女が妊んでいることに完全に気づいてしまふのである。着衣のうちから、体つきで腹が大きいことが大体分かってしまふのだから。たしかに普通の腹ではない大きさを、妊婦特有の姿勢をしているのだ。脱いで行くにつれて、彼女が妊んでいることがますますはっきりする。おそらく何度目かの妊娠なのであろう。黒く着色した乳房はかなりのたるんで、腹全体が異様に大きく、臍も、腹の皮膚の緊張とともに、うんと浅くなつて、大きな腹の真中に、ポツンとついている。明きらかに、妊娠している腹でなければ、こうなるはずがない。それを見れば誰だって、彼女が月の進んだ孕み女であることがいやでも分かってしまふ。

若くて、美人で、グラマーである（そうでないものもある）他の踊り子が出ると、観客は興奮して、声援が飛ぶけれども、彼女は申し



## 世相診断室

木戸川 健

二言目には「近頃の若い者は」と言っていた大人たちも、さすがにあきれ返ってしまったものか、それとも自分たちの若い頃の行状を顧みて感ずるところがあったのか、最近余り言わなくなった。歓迎すべき現象である。

それでも中には、言ってみても仕方のない枕詞を念仏のように唱

わけなさそうに、そそくさと踊りを終えてしまう。見ていて、小生は彼女に同情し、もっともよくその妊娠腹を見せてくれればよいのに、もっと近くまで来て、ゆっくり見せてくれればよいのに、と残念で仕方なかった。小生が見ていたときでは、彼女があらわれると客席がざわざわし、「腹が大きい」などというつぶやきがあちこちで聞こえた。けれども「腹ボテ、ひっこめ」などという残酷なヤジの出るような雰囲気ではなかったのは、このややくたびれた、あまり美しくない、妊んでいるヌード・ダンサーへの同情のためか

それとも別の好奇心が一瞬観客をとらえたのか、小生には分からなかった。とにかく小生がこの孕んだ踊り子に、ひどく同情したのは事実である。

むしろ彼女は、堂々と孕んだ腹を——腹だけでなく全身を——観客の前に誇示して、「ほれ、こんなに、わたしは孕んでいるのよ。女の孕んだ腹を後学のためによく見ておいてちょうだい！」と逆手に出て、観客のドギモをぬく方がよかったのではないだろうか。どうせ皆分かって見ている、かわいそうに思っていないのだとしたら、彼女自身が笑いとばしてしま

うだけの度胸があった方が、面白いと思う。たしかに妊娠した女がヌード・ショウに出ていることは何かしらあわれで、残酷な感じがしないでもない。不美人で体の線が年令のためにくずれているとすればなおさらである。しかし小生は別のように考えてみたいと思うのだ。彼女のやや下腹でたるんだような感じのする、それでいて腹全体にわたってぶくりと大きく膨れ上がった蛙腹と、たるんだオッパイの形が、今でも小生の眼の裏に焼きついていて。

小生の推測では、彼女はもう見ても妊娠七カ月にはなっている。あるいは八カ月以上なのかも知れない。いつごろまで舞台に出るのだろうか。

える人わかつちやいない。頑固な明治生れもいる。もっとも「降る雪や、明治は遠くなりけり」という降る雪が、近頃表日本では、すっかり陰をひそめてしまったせいか、それとも「グロンサン、明治のうるさくなりけり」という川柳がほんまなのか、とも角、近頃とみに明治生れがハッスルしているから（私はオリンピックの成功が原因していると思うが）、若い奴がよい気になっていると、そのうち一ぱい喰わされる。軍隊の

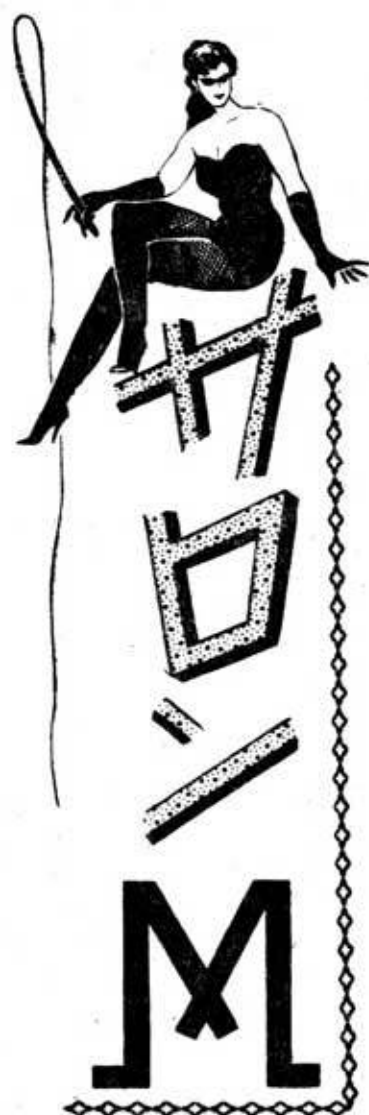
飯を——。何にしろ、日本の指導者層（エスタブリッシュメント）の大半は、まだ明治生れである。油断は出来ない。

ともあれ、そういう大人たち、余程御自身の青春時代に自信があるに違いない。私は願ってみて、青春時代（今も心の中ではそう思っているが）に自信が持てない。だから自分よりも若い世代に対して、「近頃の……」とは言わないことにしている。けれども、余りといえは余りな所業に、ついつい

思うことはある。

京浜東北線で、鶴見川崎間、午後七時ごろ——。勤め帰りのハイティーンの二人が平然とこんなことを話していた。「あんな、月経日（ゲッケイビ）いつ？」「二十五日よ」「じゃあ、月給日（ゲッキユウビ）と同じじゃない」私はぎょっとした。それとも、ケイとキユウとを聞き違えたか。「アンネという英語があるじゃない。そう言つてよ」やはり、そうだった。（近頃の若い奴は……）





## 未だ見ぬ女王様に捧ぐる記

有光令子様へ

河野睦夫

ハーズン・オフ。これは私の好きな言葉の一つです。どうどうと空に鳴る風、逆まく波、賑やかだった浜辺も人っ子一人なく、ただ無情に白い砂がサラサラと鳴るばかり。そうした岩蔭からのこのこと這い出る人影。人間馬の調教プレイか、素裸に剥かれた哀れな男は、砂浜の上に四つん這いになって、両手には手錠をはめられています。その背中に、どしんと跨っているのは、知性美あふれた若き女王。左手に手綱を握りしめ、その尖端を人間馬に巻きつけ、右手には黒く光る乗馬鞭がゆれていきます。手錠をかけられた上、やわらかい砂の上では、歩きにくいこと

は知れている。のろのろした速度なら、勿論ムチがお尻に叩きつけられ……。

有光令子様。

前置きが長くなりましたが、十一月号のお呼びかけを拝見して、こんな空想がつい浮かんでくるほど私は貴女様に魅入らせられてしまいました。

私は、数年来の奇クのファンですが、ここ二、三年の間に、写真や挿絵を切り抜いて一冊の画集を作りました。これを唯一の貢物として女王様のドレイに志願致したく存じます。前述の文よりお察しのことと思いますが、私の一番好きなプレイは、人間馬の調教です

が、犬にでもなれますし、おみ足のお掃除も命ぜられるまま行ないます。どんな奉仕にも、又お気に召さぬ時の、どんな厳しい苛酷なお仕置も、いささかもいけません。このように志願するからには、女王様の度を越した虐めにも音はあげませんし、決してお恨みも致しません。

美しきもの、それは強くなくてはなりません。美しさに自信をお持ちになられる貴女様は、男をこやしにして益々美しさに磨きかけられるようお願い致します。私を貴女様の意のままにこっぴどくいじめることは、素晴らしい一つ的美容術だと信じます。

ここにお馬のミロンガを記して貴女様に捧げますから、私の切なる願いをかなえて下さるよう重ねてお願い申し上げます。

歌はお得意その節まわしお馬のミロンガ心こめてはすむ体になさなも軽く若き乙女の胸は鳴るいつも陽気に苦勞も忘れ日がな一日乗りまわす私や名騎手お前はのろ馬手にしたムチで力の限りお馬のお尻を叩くだけ

(東京△河野睦夫△)

## 編集室たより

○毎月号であれば直接訪問お断りと書いてあるのに、突然の訪問があとを絶たないのは困りものだ。いくら訪問されても絶対にお逢いしないのだから、来られても無駄である。お互いに時間の浪費だから止めてもらいたい。度々書いてるように、事前に書面で用件や本名、住所、職業などを明記して連絡下されればお逢いする日時をお返事することになっている。突然何の前ぶれもなしに訪問されることだけは、お断りする。

○それから、もう一つ。本誌では手紙の転送を斡旋するというようなことは、只の一度も書いた覚えもないのに、盛んに請求されるのは止めてもらいたい。文通はすべて、読者通信欄を通じてやってほしい。尚、文中で文通を斡旋してもらったように書いてある通信もあるが、あれはあくまで編集部的好意から発したものであって、義務づけられたものでないことを御承知してほしい。以上の二点は呉々もお願いしておく。





## 鬼六談義

## SMプレイの知恵

団 鬼 六

大体、人間の性情には大なり小なりのS的分子とM的分子が混入しているものである。

いいかえれば、SとMとは紙一重なのだ。真に、拙作の『花と蛇』を御愛読下さっている諸兄は、川田や田代の如き、極悪人になりきって筋を追っていられるばかりではあるまい。時には、静子夫人や京子、または美津子などに自分をおきかえてみて、受虐の倒錯した喜びを噛みしめておられる筈である。

十二月号であったか、畑村信一氏より愚作に対する数々のおほめの言葉を誌上にて頂き

恐縮している次第であるが、小生、Sが五一%、Mが四九%とは、いみじくも申されたり正に至言で、そうでなくては美女羞恥責め

(何だか妙な言葉だが)の味がわかるう筈はない。私の友人に、自分はSであると、はっきりいいきっているのが何人かいるが、遊ぶ

となると、きまって、新宿、花園町あたりのせせこましい飲屋街をはしごして廻り、あぐくの果て毒々しいネオンを明滅させるトルコ風呂へもぐりこみ、トルコ嬢の怪しげなるサービスを受けるのが常だが、トルコ嬢のスペ

ッシャルなどというサービスを望む心は、SではなくMなのである。トルコ嬢が、努力して奉仕する間、寝台に体を横たえる男は恐らくM的興奮を楽しんでいる筈だ。S的境地に立って、M的満足を得る。SとMとは紙一重というのは、こういうところにある。

Sが九〇%というのは、畑村信一氏のいわれるようたしかに危険な人物である。と同時に味もそっけもない冷血漢であろう。Sがそれほど過剰な男性は、女性に対するサービス精神などは耳かきですくう程もなく、セック



スにおいても自己の満足のみを追求するに違いない。

私は、ここで、下手なセックス論などぶつわけではないけれど、セックスによって、もたらされる絶頂感の完全な一致は、男性と女性の等しく憧憬するところであり、そのための努力を惜しまず、つまり、女性を頂点へ達しめるためのリードの巧者は、SとMとを均等にそなえた男性なのである。セックスの間にあつて、我が身を男性的立場や女性的立場に適当におきかえる事が出来るからでもある。S過剰の男性なら、こういうだろう。

「阿呆らしい。なんでそないに女の気嫌とらんなんのや。そんなしんどいことやめや」  
S過剰の男性は女性に対し、こういう暴論を吐く事になるのである。

女性の満足を自分の満足として受入れる、これが、いわば性生活における男性の醍醐味である。しかし、これを無為な事とするS的男性の如何に多い事か。精神的な深い愛情、これが性生活における不可欠な条件である。小説『花と蛇』は、この精神的肉体的愛情の変形したものだと思つてゐる。倒錯心理的肉体小説とでもいうべきか。

それならば——と今度はM過剰の男性より

文句が出るかも知れない。女性ばかりを主眼にせず、加虐の対象に何故男性を選ばないのかと。女性が男性を虐げる光景があつてもよいではないかといわれるかも知れない。しかし、私は男性の肉体にどうしても美というものを感ぜられないのだ。静子夫人や京子、そして、美津子など、川田や田代達の調教が重なるうち、精神的にも肉体的にも著しい変化が起ってくる。乳房にしろ、腰部にしろ、皮膚の色艶、肢の曲線、情事の幾山河を踏み越えてきた海千山千の男性達のリードのうちに、彼女達の全身は色香あふるる艶めかしい輝きを見せる事であらう。こうした事は作者にとつても興味のあるところである。官能をうずかせる美があるからだ。つまり、こうした美しい女性達の美しい肉体の変化は、被虐を通して得た一種の満ちたりた性生活が、精神活動と相まって、肉体に波及するからである。それにくらべると男性の肉体変化など書きようがない。書こうにも、ほとんど変化というものが無いからだ。被虐的な異様な生活に浸つて、やせ細つたり、肥満し始めた男性などむしろ気味が悪い。

川田や田代が美女達を責める事は、いいかえれば、美女達に対する愛撫動作なのだ。女

体に対する愛撫動作の中に、ニューアンスとヴァライティが要求されるのと同様、『花と蛇』では、それを羞恥責めによって表現しているといつてもいい。

とはいえ、こういう世界、(つまり、花と蛇的な)に興味を持ち、ひたすらそこに官能美を追求する性情は、たしかに異質なものであると、私自身、悩んだ時期があつた。夫婦生活の弛緩、疲労などから、こういう異質の世界に踏みこみ、興味を持たれた人はあるまい。『花と蛇』を御愛読下さる諸兄姉は、先天的な性情の持主だと思う。むしろ、それは幸せな事なのだ。秘かな楽しみのある人間は、ない人間が馬鹿に見える時もあるものである。

私の仕事——シナリオライターとしての日常をよく知っている人は、私の書く作品が、およそ、エログロ、またはSMなど何の関連もない極めて生真面目なものである事をむしろ哀れんでいる。たまには時勢にのつて、少し、ドギツイものを書いてはという人もある。だが、制約されたテレビ映画の中で、中途半端なベッドシーンなどに力を入れる気にはならない。いや、それよりも、仕事の中でやくざなどが女を責めるシーンをどうしても書かねばならぬ段になると、むしろ、私は顔



をしめ、さっとお茶をにごしてしまい、あとでディレクターから、もっと、この責め場に念を入れて欲しかった、などと叱言をいわれたものだ。不思議なもので、そういう場面には特にハッスルしなければならぬ筈の私なのに、何というのか、ビッコの作家がビッコの人間の描写をしなければならぬ時の苦しさに似て、妙に念を入れる気にならない。

普段はそうに実に弱気で素直な、そして、積極的な現世主義者として、職人的な仕事をしているものの、昔は、ふと些細な事から仕事の事で喧嘩をし、何もかも面白くないといった心境になると、えい、遊んでやれ、ともう制御出来なくなってしまうものだ。日頃、ひそかに隠していた異質な性情がムクムク頭をもたげ出し、仕事のうっぶんを女で晴らそうという衝動にかられて、花と蛇的世界の探究に一人乗り出したものである。自己の性情を満足させるべく、気持のおもむくままに振舞い出し、若気の至り、押さえていた遊蕩癖もどっと出て、仕事場を飛び出して、女を縛りに出かけたものだ。

こうして何日でも正常の生活から遠ざかり人生の時間をどれだけ無駄にした事か。不健康な消費面に耽溺して得たものは——むしろ

失望の方が多かった。つまり、花と蛇的な世界は観念と空想の世界として、とどめておく方が無難であったのである。今、考えてみると、全く馬鹿げた事をくりかえし、大へんな金を使ったものだと思うが、しかし、楽しい思いもないではない。

フォートにしても、一人のモデルのものを何枚も持っているより、大勢のモデルのものを少しずつ持っている方を私は望むものであるから、SMプレイの対象とした女性もずいぶんと数は多い。悲願千人縛りだなどと当時の私は胸の中で大言壮語し、いわゆる女体遍歴をしたものだ。新鮮な魅力を持つ女性、媚婦的な魅力を持つ女性とプレイなるものをしてみたが、やはり、観念の世界に映ずる女性に勝るものはない。ただ一人、赤坂のとある酒場で知り合った当時二十四であったKという女性は今でも忘れる事は出来ない。私をして充分満足せしめた愛すべき女性であった。

この種のプレイを始めるにおいて、大切な事は、まず、女性の警戒心をとり除く事である。よく読者通信などで、誰か僕とプレイをしませんか、と呼びかけている愉快的な男性がいるが、女性の神経はデリケートなもの。たとえば、M的要素充分の女性であっても、はい

いたしましよ、と首を出して来る事はまずないであろう。私は酒場などで、これと思った女性にめぐり合った場合、まず馬鹿になって一カ月ぐらいは通う。それとなく、SとかMとかに関する話題を持ち出して、彼女の顔色をうかがい、興味の有無をさりげなくたしかめてみるのだ。女性は本来、M的な生物、いや、受動的な人間故、たいていは、こういう話題に興味を持つものだ。ホテルへ誘える段階になっても、最初から、決して縄など使ったりはしない。ずいぶん、のんきな話だと思われるかも知れないが、先にもいったよう女性を安心させる事が第一、いきなり、根生をむき出すのは浅ましい。それに、私の場合は緊縛プレイをする価値があるかどうか、まず彼女の肉体をたしかめるのである。乳房が小さかったり、盲腸手術の大きな傷あとがあったり、ちよっとした欠点でも、神経質な私はすぐに辟易してしまうのだ。

だから、赤坂の酒場で逢ったKという女性と、そういう関係になり、それが容貌も肉体も充分私を満足させてくれる女性である事を知った時、私は、ホテルへ誘う事三回目にして、色々な道具をたずさえ、待望の緊縛プレイをいどんだわけなのである。Kを虐げてい



る間、私はふと自分を忘れて、阿呆のように夢中になったものである。

M的要素を充分にもったKであるが、今夜は本当に縄を使うよと私に聞かされ、顔を染めて、もじもじし始める。だが、やがて、全裸に剥がれ、その豊満な裸身にひしひし縄をかけられてしまったKは、肉ずきのいい両肢を立膝に組み、軽く瞑黙している。枕元にあるスタンドのピンク色の光線に写し出されたKの申し分のない美しい姿をしばし観賞した私はKをあぐら縛りにすべく鞆の中より新たな縄を取り出して迫っていく。そんな仕事にかかり始めた私に対して、柔軟な裸身を拒否的にくねらせつつ、ふとあげたKの観念した美しい瞳。如何にM的要素を持つ女性でも、生まれたままの姿で、男性の前に、あぐら縛りにさせられたあられもない姿をさらす程、切ない事はあるまい。彼女の大脳の中には羞恥という精神的抑制が大きく働き出すのは当然である。男性はこの女性の羞恥図を大いに観賞するのはよいが、やがて、これを徐々に柔らかく取りほぐしてやる事を忘れてはならない。女性はセックスにおける態度など男性が極端なものを要求しても忍び得るが、こうした姿を何時までも観賞される事は、たとえ

娼婦であっても辛くてたまらないものであるから、そんな羞恥図を何時までも観賞しつづけるのは酷である。

この場合、私は箱根の雲助にでもなった気分、またKは、雲助に捕われた小町娘あたりに自分を置きかえていたのである。そうした夢想の合致が楽しいプレイの開幕となるわけだ。Kは、顔を伏せたり、そむけたりする拒否的な仕草をとりながら、赤裸々なあぐら縛りにされ、私は、そんなKにびったり寄りそって盛んにからかい（愛情のこもった）を始める。決して、女性に嫌悪の感情を起させないよう、要するに女性の心を高ぶらすべく留意するのだ。色々な写真を見せて反応を見るもよし、これからのプレイに用うべく彼女に選択させるのも一方法だ。

こういう過程の結果、Kは私の言葉のくすぐりに誘い出された如く、一切放擲のせっぱつまった心境になってしまふ事になる。女性の肉体というものは、実に複雑微妙なもので、理屈で割り切れるものではない。私のこうしたからかい、いいかえれば、愛の言葉で、それは女体に大きな刺激効果をもたらすものである。

私は最初、こうしたプレイに入った時、途

中で縄を解いてやるのが常であった。動きにつれて、不自由な女の体がもどかしくなってきたからであるが、しかし、それは間違いであった。などといったはおかしいが、熟練してくると、別に不自然な感じもなく、むしろその状態のままの方が、精神の高ぶりを双方ともに感じ得るようになったのである。これはまた当然の事であろう。途中で、縄を解く方が不自然である。色々な研究？ によって、完全なる結婚の図表ではないが、そうしたプレイの図を挿絵画家の友人に書かせてみたがもう二十二枚にもなっている。普通は四十八もあるというから、研究次第では新作がまだまだ現れるかも知れない。機会があれば、夫婦プレイをされている方々の参考に供したいと思っている。

話は横にそれたが——話といっても、つまらぬのろけ話で恐縮です——そういう風に研究？ をつんでいた私は、Kの足縄のみを解くだけで、プレイに入っていたのである。

やがて、万策つきたように泣きながら、Kは、しばし、没我の谷をさまよい、ふと眼ざめて、責め手と視線が合った時、ハッとしたように顔をそむけ、ぴったりと腿を閉じ合わせて、上体をねじまげ、顔を布団に押さえつ



け、小さくすすり泣くのであった——私は、この時のKの美しさや可憐さを思い浮かべつつ、『花と蛇』の情景描写をしたものである。つまり、『花と蛇』は私の放蕩が生んだ産物だ。

忘我の境地からふと眼覚めた時、Kには思ひ出したように新たな羞恥がこみあがり、それに身をさいなまれ、せめて、この縄目の恥辱からだけは逃れたいともじもじして哀願するのであるが、私はそれには応せず、私の視線から遠ざかろうとしているKの縄尻をとるや、満足したか否かを聞いてやる。耳もとをくすぐるように幾度も私に問われるKは、ためらいがちにうなづき、はじらいと感謝のこもった妖艶な瞳で私を見上げるのである。そこで、私は、縄を解いてやるための条件を出す。君が決断して人に見せない姿を今見ておきたいのだと。精神的な愛情を互に持つていればこそ、こうしたプレイは出来るものなのだ。その愛情がいわば、おどしの種にもなる。それだけは、勘忍して、とベソをかきそうになつて頼むKに対し、愛する女性のすべてを男は知っておきたいものだ、などと私は奇妙な脅迫をするのである。見せられないというのは僕を愛していない証拠だなどと私も

駄々っ子のように一步もひかない。やがてKは抗しきれなくなつて、じゃ、貴方、決して私を捨てないと約束して下さいますか？ それは承認の意味である。私は、Kのふくよかな肩に手をかけて立上らせ、バスルームのドアを押す。そこには白く冷たい西洋式トイレがKの着座を待っている。私に背を押されてその前に立ったKはふと、とまどつたように体を硬くしたが、それを打ち払うように私の方に向き直り、私の耳もとに口を寄せて「ねえ、やっぱりして見せなきゃ駄目？」

「当たり前だ。今頃何いってらんだ」

Kは、そのように、私とのプレイの間、新鮮な果実が、水々しく成長する過程を見せてくれた愛すべき女性であった。

ここで、KK誌ファンの女性の方に申し上げます。SMプレイにおいては、特に女性の羞恥心が男性にとって、大きな魅力である事に違いないが、かといって、その羞恥ばかりにこだわって、男性、つまり、責め手に手をやかしてはいけない。『花と蛇』の川田や田代の如き厚顔、かつ破廉恥な悪漢なれば話は別だが、とにかく、夫婦プレイ、または愛人同志で行うこの種の行為においては、女性側の協力も必要なのである。というのは、こうした

プレイを悦ぶ男性というものは、お人好しで、気が弱く、その上、フェミニストが多い。空想の中では、ものすごい事を考えていても、実際、プレイをする段になると、ちよつとした女の苦痛の表情にうろたえてしまうものである。私の友人であるこの種のマニヤは、私の紹介したマゾ女性と親しく交際するようになったのはよかったが、そのマゾ女性は、或日私にこぼした。

「あの方、紳士的すぎてつまらないわ」

——彼女の話によると、たとえば、嫌よ、かんにんして、と声をあげると、彼は大急ぎで縄を解き始め、悪かった、どうして僕はこう乱暴するのだろう、と謝り出したそうである。縄を解かれてしまった彼女は拍子抜けがしてしまったそうであるが、拒否的な言動を女性がとるのは、一つのアクセサリである事を彼は知らないのだろうか。そんな彼が、私には、一つ、SMの混ったすごいシナリオを書いて下さいよ、などというのであるから、人間とはわからないものである。

いざとなった場合、むしろ、男性よりも女性の方が度胸をもつ。先程いったようなKという女性がSMプレイを行う上の理想的な女性ではないだろうか。新鮮なものから、妖艶



なものに入っていくが、その間、水々しい羞恥を失わず、粘りある女のムードを徐々に出していく。プレイ中のむせぶようなすすり泣きなど、それは浅墓なテクニックだとは思えない。本当に捕われの娘になりきって、苦痛

めいた快感をくみとっていたのである。故に女性は、羞恥ばかりにこだわってはならず、かといって、羞恥を忘れてしまうのも、この種のプレイに興味を持つ男性を悦ばせる事にはならない。というと、中々むつかしいよう



だが、男性、つまり責め手は、女性の羞恥を楽しみつつ、羞恥をむしり取ってやれという複雑な心理で責めているのであるから、時には一切の羞恥を捨てきって、責め手に舌を巻かす程の忘我の姿を示し、すぐにまたそれを羞恥のベールによって包むという事が必要なのわけだ。単なる性生活に例をとっても妻が何時までも羞恥心をもてあましている限り、妻の満足感が充たされる筈はなく、夫もまた、やりきれぬ気分を抱くであろう。

次に、男性側に申し上げるが、SMプレイを行うという事は、自己の精神的なものを満足させるものであるから、肉体的に満足するため、矢鱈に攻撃を加える事は好ましくない。どちらかというとSMプレイなるものは、肉体的な営みがとどろきがちになった初老期の夫婦によってなされる事が、衰退しかけてきた夫婦生活に活路をあたえる意味において面白いものであるが、しかし、いくら老人とはいえ、緊縛したい女性は、やはり、脂の乗りきった縄のかけ甲斐のある美女でなければ面白くあるまい。ただ、若い人間は、とかく直接交渉にすぐに入りたがり、SMプレイもうやむやに終ってしまう事が多いものである。



分類するのはおかしい話だが、前戯が五、

本番が二、後戯が三とする考え方がSMプレイの場合、よろしいのではないだろうか。勿論、SMプレイといっても、ピンからキリまであり、一がいにはいえないが、私のいうのは、花と蛇ファンの方の夫婦プレイなら、まず、こんなところと思うわけである。SM行為も愛情の表現状態の一種であるから、男性は自己の肉体的満足はさておき、とにかくにも女性の精神的興奮と肉体的満足のため専心一意、責め抜かねばならない。責められる方より責める方が体力が必要である。だからSMプレイを完全なものにするためにはなるだけ、男性は、情熱を発散させてしまわない事が望ましい。後戯に必要な体力を消耗させないためである。Kなどは、私とのプレイで少くともこの鉄則だけはよく守られていた。

恥しい監視つきのトイレをすまし終えたKは、そのまま、バスに連れこまれ、念入りに始末をされたあと、再び、縄尻をとられて、寝室へもどる。そして、何もかも目撃されたという口惜しさも手伝って、Kは、我が身が緊縛されているのも忘れたように声をあげて泣きながら、

「貴方って、ひどい人だわ、私、どうすれば

いいのよ。」

つまり、男性の体力というか持久力というか、それがSMプレイを一層華麗なものにするのである。

忘れ得ぬM女性、Kを思い起しつつ、私の好む、おだやかなSMプレイについて、語ったわけであるが、SMプレイのための対象を求めておられる男性は、むつかしい事ではあるが、十人並の美人である、肉体的にも恵まれた対象を求められるよう。それと、M的素要があること——しかし、これは、ほとんどの女性が小なり小なり持っているもので、さほど案ずる必要はない。Mでない男性をMに教育する事はまず出来ないが、Mでない、といいきっている女性でも、男性のリード如何では、見事なM女性に変貌するものである。不感性の女性は敬遠した方がいいが、と同時に容貌もパツとせず、体つきも貧弱な女性をプレイの対象にする事はさけられた方がいいだろう。『花と蛇』の小説の挿絵に、西郷隆盛を女にしたようなものが登場しては、げっそりするのと同様に、ピーンとこない女性と、ぎくしゃくプレイを、しかも、かなりの金と時間を使ってする位なれば、空想の世界で、美女とプレイされた方が得策である。

私も、ずいぶんと放蕩をし、こうしたプレイのために金や時間を使ったが、意になつたものといえ、Kぐらいなもの、このKも数年前に結婚し、今は、二児の良き母親である。一度、私のもとに子供連れで遊びに来て、ふと昔話に花が咲いたが、Kは面白い事をいった。結婚当初、どういうわけか夫の首へしがみつかねばならぬ筈の両腕が背後へ廻り、縛られているような錯覚に陥ったことがあったと。私は苦笑した。Kと何年かつづいたああした生活の中で、私がKの肉体にしみこませてしまったSMプレイの名残りである。Kの主人は、全然、そうした事に興味はないようだ。別に、ありきたりの夫婦生活が嫌になったわけではないが、一度、こんな事をしてみないか、とKが冗談半分に床に入っている主人にいうと、「お前、阿呆ちがうか」といったそうである。そんな主人だから、何だか面白くなって——とこぼすKの、それほど衰えを見せていない眼元や首筋を見て、正直、誘惑にかられないでもなかったがもうKもちゃんとした勤人の妻、それに愛児を二人かかえている身だと思つと、普段は、実直な現世主義者である私は、ようやく静まりかけてきた池の水へ石を投げこむ事もある



まいと、ふと、そっぽを向いてしまうのであった。昔のような体力と勇気が今の私にはないのかも知れない。

話は、飛躍するが『花と蛇』が国映にて映画化される事になった。静子夫人を始め、京子、美津子、川田等も登場する。来年一月、克蘭ク・インする。『花と蛇』愛読者の方々は眼をパチパチされるかも知れないが、あの原作、そのままを映画にする事は不可能故、私がシナリオを書き、内容は大分違ったものになるけれど、S的なものは（映画的に可能なものは）大いにとりあげてある。この映画を監督されるのが、新東宝健在なりし頃のベテランで、しかも、古くよりのKK誌のファン、SMマニアであるから、かなり面白い映画になるのではないかと思われる。

この『花と蛇』の映画化について、ちよつと、面白い話がある。あるプロダクションより、最初、私は一つの注文を受けた。いわゆるピンク映画なのであるが、それを私に持ち込んできたDというプロデューサーは、私を銀座の酒場へさそい、単なるエロ映画も、行きづまりの感がある、SとかMとかを主眼にした一風、変ったものを——といい、そして

彼は、極めて真面目なものしか書いていない私の智能を啓発すべく、SとかMとは如何なるものか、という講釈を始めたのである。勿論Dは、私とその筋のマニアである事は知らない。やがて、彼は、こういう種の小説類をとりあげ、固定した読者層をつかんでいる雑誌があるのを知っているか、と私にいいながら鞆の中から、数冊の雑誌をとり出して私の前へ並べたのであるが、KK誌も無論入っているし、驚いたことには『花と蛇特集号』まであるのだ。彼は、それを渋谷駅近くの新聞雑誌販売所で買ったという。私は、Dの仕事熱心に感心した。彼は、SM的映画をとるために、雑誌屋や古本屋をあさって、研究していたものと思われる。そして、そこから得たSMの知識を私に話して聞かせるのだが、たしかに、私にとっては有難めいわくな話であった。如何にDが本や雑誌などで、SMを研究し、またそれらに興味をいだく事になったとしても、Dは、本当のマニアではないのだから、たかが知れているのである。にもかかわらず、Dは、俺は、この世界がわかるような気がするなどといい、『花と蛇特集号』を手にとって、

「一度、まあ、これを読んでみたまえ、すご

い個所があるぜ。なかなか面白いもんだよ」  
私は何だか、変な気分、フムフム、とうなずいて、ビールのコップを傾けていたが、Dは、盛んに『花と蛇』を賞め始めるのである。

「悪漢の暴虐を受ける女体の描写など、普通でも、ちよつとここまで書けない、この作者は、仲々達者な奴だよ。」

私は、冷汗の出る思いで、矢鱈にうなずきビールをDにすすめ、恐縮していたが、段々と酔がまわると、こっちも調子が出てきて、「そんなに面白いなら、そいつを脚色して映画にすりゃいいじゃないか。」

Dも、成程というような顔つきになったが、すぐに

「だが、そいつは無理だよ。大はばに脚色し直すにしても、一応、原作者の許可をとらなくちゃならない。こういう種の雑誌に書いてる人間の居所をさがすのは大変だからな。原則として、雑誌社の方でも教えない事になっているそうだよ」

「いいよ。俺が居所をつきとめて作者に逢ってみるから」

私が私を探せばいいわけだと実に愉快になってきた。



# 〔新版〕 女体悦虐フオト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 輝) 焼付各組一枚一組 (送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z1 ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z2 囚女第六十三号	(柳)
Z3 猪型手足吊り	(梨花)
Z4 逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z5 ローソク責め	(四浦)
Z6 豊臀への珍責め	(絹川)
Z7 淫らな変型縛り	(愛川)
Z8 ザリガニしばり	(梨花)

Z9 引き回しシーン	(東浦)
Z10 全裸後手高小手	(加茂)
Z11 豊満な肌の被虐	(大井)
Z12 黒髪いたぶり	(大塚)
Z13 足吊り媚態責め	(絹川)
Z14 黒縄高小手縛り	(四方)
Z15 強烈荒縄しばり	(梨花)
Z16 肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z17 くの字の足指苦悶	(桜井)
Z18 裸身にいどむ縄	(前本)
Z19 無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z20 ハリツケの女体	(梨花)
Z21 おへソなぶり	(大塚)
Z22 逆手足吊り	(竹野)
Z23 美肌のいたぶり	(絹川)
Z24 仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z25 恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z26 火箸で責める乳房	(梨花)

Z27 全裸の海老責め	(熱海)
Z28 ベッド上の痴態	(絹川)
Z29 足の裏の襪り責め	(大塚)
Z30 闇の女体飾り縛り	(竹野)
Z31 首絞め晒しもの	(大塚)
Z32 鼻孔に加虐	(若原)
Z33 悦虐責放心状態	(梨花)
Z34 手枷足ぐさり	(四方)
Z35 寝室でのプレイ	(花本)
Z36 猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z37 首縄、柱しばり	(絹川)
Z38 巻煙草責め	(大塚)
Z39 尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z40 厳しきエビ責め	(東浦)
Z41 ゴムのカバー縛り	(竹野)
Z42 ワンピースの縛り	(花本)
Z43 荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z44 尻を突っ立てて	(大塚)
Z45 鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z46 苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z47 酔後の淫らしばり	(絹川)
Z48 逆十字エビ縛り	(大塚)

Z49 全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z50 欄間に宙吊り	(梨花)
Z51 全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z52 荒縄のお仕置室	(梨花)
Z53 庭園の惨酷風景	(館)
Z54 被虐の果て	(大塚)
Z55 痛められた裸身	(大塚)
Z56 鏡の中の全裸像	(愛川)
Z57 セーラー服縛り	(梨花)
Z58 檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z59 全裸の股間縛り	(絹川)
Z60 オムツ逆エビ責め	(田中)
Z61 胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z62 ゴム人形の女	(竹野)
Z63 荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z64 女子大生恥態責め	(田中)
Z65 白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z66 強要する開股縛り	(絹川)
Z67 強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z68 亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z69 ベッド上のもだえ	(愛川)
Z70 恥しさに耐えて	(館)

家へ帰ってから、色々と考え、どうせ、ピ  
ンク映画を作るなら、この種のプロダクショ  
ンとしては一番大きい国映にすべきだと、早  
速、国映社長に持ちかけてみたところ、喜ん  
で承知してくれたので、私は、SMマニヤで

ある監督のB君を国映に推薦し、『花と蛇』  
を撮ってもらう事にしたのである。  
この原稿がKK誌に掲載される頃には、ス  
タッフ・キャストも、はっきり決定する事と  
思うが、その後の撮影の経過など、また、鬼

六談義の章で、おしゃべりさせて頂く事にし  
よう。  
拙作『花と蛇』につき、諸賢の御高評を累  
次賜っているが、今後共御鞭撻御指導をお願  
いして筆をおくことにする。



## 女斗美ファンタジック・シリーズ

## 肥満ゆきこ(首投げ)長身みずえ

## 〔デパート女相撲より〕

芦 浦 素 舞 夫

『東しい、ゆきこさーん。』

『西しい、みずえさーん』

呼出しのウグイス嬢が、得意の美声で二人の女性を呼び上げた。と、それまで、彼女の美声に聞き惚れるように、シーンと静まり返っていた超満員の場内から、セキを切ったように、いっせいに「ワァーッ」と歓声がまき起った。

『ゆきこさーん！ がんばってえ！』

『みずえさーん！ しっかりねえ！』

場内のあちこちから、女子店員たちの黄色い声援が乱れ飛ぶ。

『東西東西。』

番数多く、取り進みましたところ、

かたやー、ゆきこさん。

こなたー みずえさん。

この勝負一番にて』

行司の、女性特有のカン高い結びのフレもともすれば、場内のどよめきに、かき消されそうだった。

丸洋デパート七階ホールでは、同デパート恒例の、女子店員相撲大会が催され、さきほどから、各売場から選ばれた女子店員たちの間で、華々しい熱戦が繰り広げられており、その一番一番に、場内は湧き返っていたが、いよいよ、結びの一番、S売場の肥満ゆきこ対M売場の長身みずえの対戦を迎えるに及ん

で、場内の興奮はついに、その頂点に達した。それもそのはず、この二人の相撲には、この大会の優勝が懸っていたのである。しかも肥満ゆきこと長身みずえは、数年来のライバルであり、二人の対戦は、同デパートきっての好取組として、最高の人気を集めていた。

各売場から代表として選ばれている女子店員たちは、いずれも体格の良い女性ばかりだったが、その中でも、肥満ゆきこの十六貫を越す体重と、長身みずえの五尺五寸近い身長は、同デパートでも最高だった。実力も、さすがに群を抜いていた。この二人は、名実共に、同デパートの両横綱と言ってもよかった。事実、女子店員相撲大会は、ほとんどこ



の二人によって優勝が争そわれていたのである。肥満ゆきこと長身みずえの攻防の秘術を尽しての、力と技の激突は、デパート女相撲の最高峯と言っても過言ではなかった。

肥満ゆきこは、二十二才。小麦色のよく太った、見るからに健康的な女性で、その明るい性格は、多くの人々から愛されていた。

長身みずえは、ゆきこより、二つ年上の二十四才。色白の美貌と、すらりとした八頭身の持ち主。ミス丸洋と言われるその容姿は、皆の羨望の的になっていたのである。

さて、満場の嵐のような声援を受けて土俵に登場した二人の女性は、型通り、二次口で清くチリを切り終った。そして、土俵の一角で四股を踏み、控えの女子店員から水をつけて貰っている。

この間、呼出し係の女子店員たちは、土俵を一周、懸賞をフレ歩いた。優勝の懸った好取組だけに、懸賞の数も、二〇個を下らなかった。（超満員の場内から、割れるような拍手）

肥満ゆきこと長身みずえの二人は、土俵中央に進んで、向い合って四股を踏み、蹲踞の姿勢で睨み合った。じっと見つめるお互いの視線に、早くも火花が飛び散った。

行司の声で立ち上り、足の位置を決めて、第一回目の仕切りに入る。

東方、肥満ゆきこは、堂々たる肥軀に、水色の褌をきりりと締めこんでおり、小麦色の肌によく似上っている。脚を大きく開き、腰をぐっと落しての低い仕切りだが、一五五センチ、六三キロのアンコ型だけに、実に堂々としており、デパート女相撲の横綱の貫録充分だ。対する西方、長身みずえは一六六センチ、五二キロのすらりと均整のとれた体軀に、色もあざやかなグリーン色の褌を締め込んでおり、それが、色白の素肌によくマッチして、すばらしいコントラストを描き出している。

肥満ゆきこの低い仕切りとは対照的に、長身を屈めての腰高の仕切りだが、ぐっと高く持ち上げた大きなお尻に、グリーン色の褌が喰い込み、魅力的だった。女相撲の魅力溢れる一瞬である。二人は、二回、三回と入念に仕切りを重ねた。

肥満ゆきこは、自信満々の表情だった。事実、彼女は強かった。彼女の六三キロの体重を利しての怒涛の寄りには、大抵の相手は、成す所なく土俵を割っていた。また、力まかせの豪快な投げ技にも、抗する者は少なく、

彼女は、自他共に許す、デパート女相撲の横綱として君臨していたのである。もちろん、いままでに数多くの優勝の栄冠に輝いている一方、長身みずえも、激しい突張りや、一六六センチの身長に物言わせての外掛けは、他の女性の追隨を許さず、デパート女相撲随一と評される技能的な取り口は、最近ますます円熟味が加わってきていた。しかし彼女にとって、肥満ゆきこは苦手だった。いつも、もう一步という所で、肥満ゆきこの力に屈し無念の涙を吞んでいた。

前回の大会でも、結びの一番で顔が合い、大相撲の末、寄り倒され優勝を逸したのだ。今日の相撲も、長引いては、苦戦は免れなかった。身長において遙かに優る長身みずえも、力と体重のある肥満ゆきこに、がっぷり組み止められては勝負が薄かった。組むのを避けて早く勝負をつける必要があった。二人の仕切りは、回を重ね、いよいよ制限時間一杯となった。

「ワーツノ」超満員の場内から歓声がまき起った。女子店員たちは、それぞれ最員の二人に声援を送る。

「ゆきこさーん、がんばってえ！ そんなノッポのひとなんか、投げつけちゃうの



よ！

「みずえさん！　しっかりっ！　そんな  
デブちゃんなんか負けちゃだめよ！」

満場騒然たる裡に、いよいよ待ったなし、  
行司の軍配、二人の中に割  
って入った。

長身みずえは色白の美しい顔を紅潮させて必死の表情。切れ長の眼がつり上っている。仕切り線よりはるかに退って中腰で構える。突っ張るつもりなのだ。

肥満ゆきこは、仕切り線一杯、低く構え、相手を睨み上げた。行司の軍配がさっと引かれた。二人の女性は、ほとんど同時に立ち上った。と、次の瞬間、二つの肉体が、「パシュー」と音をたて、激しくぶつかり合った。肥満ゆきこの六三キロのすさまじいブチかましを、長身みずえは、必死に突き放した。彼女は、素早く突っ張って出た。組ま



れては、どうしても不利になる。長身みずえは、必死に突っ張りたてた。肥満ゆきこを県命に応戦するが、突っ張り合いでは、上背とリーチに優る長身みずえに分があった。

肥満ゆきこは、みるみる土俵に詰った。

「ワァーッ！」すでに、満場総立ちである。

肥満ゆきこは、あわや土俵を割ったかに見えたが、左に廻り込んで、辛うじて逃れた。長身みずえは、一気に

勝負を決すべく、なおも激しく突きまくった。肥満ゆきこは、何とかして組み止めようとしたが、またもやピンチに追い込まれた。これが、ほかの女性だったらひとたまりもなく突き出されていたに違いなかった。

それほど、長身みずえの出足は鋭く、突張りに威力があった。しかし肥満ゆきこは、今度も土俵際、よく廻り込んで逃れた。彼女の六三キロの体重がピンチを救ってくれたのである。

そして、ようやく相手の腕を引っぱり込んだ。しかし、長身みずえは、攻撃の手を緩めなかった。素早く双差しとなり、出足鋭く寄



りたてた。この必死の寄りに、肥満ゆきこはたちまち土俵際に追い込まれた。勝ちを焦った長身みずえは、長い脚を飛ばせて左外掛け、必死に身体を浴びせ掛けた。

肥満ゆきこは、弓なりになりながら、徳俵の上で太い脚を踏んぱり、右で長身みずえの首を捲くや、腰を捻って右へ大きく、うっちゃった。二人の身体は、激しく纏れて、土俵下に転落した。（「ワァーツ」と歓声）行司の軍配は、西を指していた。

長身みずえの勝ちか？ しかし物言いがついたのである。ほとんど団体だった。判定の難かしい相撲だった。検査役の女子店員たちが土俵に上って、慎重に協議の結果、ついに取り直しを決定した。当然の処置だった。

取り直しに、場内はまたわき返った。

好取組が、また一番余計に見られるのだから場内の観客が喜んだのも無理はない。さて二人は、髪のを直すと、休む間もなく再び土俵に呼び上げられた。そして、さきほどと同じように、チリを切り、四股を踏んで、蹲踞の構えから仕切りに入り、ぐっと睨み合った。取直しが二人の斗志を、煽りたてたのか、さきほどよりも、よけいに殺気だっている。

取り直し後の一番は、長身みずえにとって不利だった。相撲が長引くと、どうしても力と体力のある方が有利になる。長身みずえは、肥満ゆきこよりも、力が弱く、それに、身長割には体重がなく、あと二、三キロ欲しいところだった。彼女にとって、軽量と非力をカバーするのは、速攻以外になかった。彼女は、どうしても勝ちたかった。肥満ゆきこには、このところ、ずっと連敗していたし、こんどこそ彼女を破って、優勝したかった。勝ち気の長身みずえにとって、二つ年下の肥満ゆきこに敗けるのは、何としてもくやしかったのである。

肥満ゆきこも、美貌の長身みずえに対してはいつも異常なまでに斗志を燃やしていた。いまの一番で長身みずえに散々顔を突張られた彼女は、こんどは特にすさまじい斗志を見せていた。仕切り制限時間は、またたく間に過ぎた。超満員の場内は総立ちになった。

行司の軍配が返った。両女性は、中腰のまま立ち上った。「パーン」と激しい音がした。長身みずえが、いきなり右で一発、肥満ゆきこの頬を張ったのである。この強烈な張り手の奇襲に、激しくブチかまそうとした肥満ゆきこの出足が止められてしまった。彼女

の怯んだ隙に、長身みずえは、すかさず突張って出た。彼女の突張りには、さきほどより、さらにすさまじかった。肥満ゆきこの顔が、みるみる染まる。彼女は、たちまち土俵際に追い込まれた。

超満員の場内は、いまや興奮のルツボと化した。女子店員たちの声は悲鳴に近かった。長身みずえはシメタとばかり突きたてた。だが、勝ちを焦った彼女の足が、わずかに流れた。肥満ゆきこは、その一瞬のスキを見逃さなかった。彼女は、気負い込んで突張ってくる長身みずえの左手を掴んで、強烈なとつたりを打ったのである。この強襲に彼女の長身が大きく傾いた。場内から「キャーツ」と叫び声が出る。しかし、彼女は必死に足を送って辛うじて残した。だが、肥満ゆきこは、すかさず右へ廻り込みながら、左手で、長身みずえの首筋を強引にはいた。そして彼女が懸命に耐えるのを、なおも、しつように肩透しを引く。しかし、長身みずえは、よく残した。大きく前に泳いで、手が土俵につきそうになりながらも、必死に足を送り、肥満ゆきこの前ミツを掴んで喰い下ったのである。はるかに上背に優る長身みずえが、自分よりずっと背の低い肥満ゆきこの胸に、頭をつ



けて双差しで喰い下った恰好は、ちよつと異様だった。肥満ゆきこも、背の高い長身みずえに喰い下られて、勝手が悪く、何とか上手を引こうと、相手の背中越しに右手を伸ばすが、痺に手がとどかない。長身みずえは、長引いては面倒と、必死に寄って出る。肥満ゆきこは、上手が引けないまま、ずるずると後退、苦しまぎれに右から首投げをみせたが、あまり効果なく、かえって自らの体勢を崩し土俵に詰る。（ワァーツと歓声）

だが、彼女は、長身みずえの長い腕を、カシキに決めて、懸命に寄り返した。すごい力だった。長身みずえの美しい顔が苦痛に歪む。彼女は、とうとう右の差し手を抜いてしまった。肥満ゆきこは、すばやく左をこじ入れ、右で上手痺を掴んだ。ようやく、得意の左四つに組み止めたのだ。肥満ゆきこに、上手痺を引きつけられて、長身みずえの顎がだんだん上ってきた。こうなると、力と体重に優る肥満ゆきこが有利になった。

「ゆきこさーん／＼」 「みずえさーん／＼」

場内から、女子店員たちの必死の声援。

肥満ゆきこは、じりじりと寄りたてた。長身みずえは、顔を真赤にして、懸命にこらえる。上手、下手の痺を、じゆうぶん引きつけ

た肥満ゆきこは、巨腹をおおってがぶりながら、ぐいぐい寄りたてた。長身みずえはたちまち土俵に詰ったが、徳俵に踵をかけて、懸命にこらえる。検査役の眼が、鋭く、長身みずえの十文七分の足に注がれる。彼女はほとんど棒立ち。爪先だけで必死に支えた。よく切れた足首に、アキレス腱がくつきりとうき出て、必死に力を入れているのが分かる。

彼女の必死の防戦に肥満ゆきこもいささか持て余し気味だった。さらばと、こんどは一腰入れて、ぐいと吊り身に出た。自分より三寸以上も上背のある相手を吊り上げたのである。長身みずえは、長い脚をばたつかせて必死にこらえる。肥満ゆきこはかまわず強引に吊って出た。長身みずえは、左外掛けで防ぐ。肥満ゆきこの太い脚と長身みずえの長い脚が激しくからみ合った。両者はふたたび土俵中央にもどった。

力の入った大相撲になった。

両女性、土俵中央、がっぷり四つに組みあって、たがいの肩にアゴをうずめて、呼吸をはかりあった。動きが止った。この時、ついに水が入った。場内から拍手が起る。

行司が、二人の中に割って入った。両女性は、ほっとした表情で組み手を解いた。水を

つけに控えにもどった二人の身体から、拭いても拭いても、汗が吹き出してくる。やがて行司に促されて、両女性は土俵に上った。

行司は慎重に彼女たちの足形を調べて元の態勢に組ませた。土俵に肥満ゆきこの九文半の中広い足形と、長身みずえの十文七分の細長い足形が、くつきりといっていた。行司が両手で二人の背中を叩いて戦斗再開を告げた。肥満ゆきこが、じりじりと寄り身をみせる。力の強い肥満ゆきこの、強い引きつけに、長身みずえの、大きな尻がねじられて「ぶるん」とふるえている。長身みずえはアゴが上って、苦しそうである。

肥満ゆきこが攻勢に出た。痺を引きつけ寄りたてながら、右から強烈な上手投げを放った。長身みずえは大きく傾いたが、咄嗟に下手投げを打ち返す。肥満ゆきこは、一気に勝敗を決すべく、強引な上手投げを連発したが決らない。

長身みずえは、さつと右を巻き替えた。肥満ゆきこの強引な上手投げのスキに乗じ、うまく巻き替え、双差しになったのである。しかも、相手の右上手まで切ってしまった。このあたり、まったく巧い長身みずえの相撲ぶりだった。肥満ゆきこは慌てて右上手をさぐ



りに行く。しかし長身みずえは、差し手をうまく返して、これを許さない。肥満ゆきこの顔に焦りが出てきた。長身みずえは得たとばかり、激しく寄って出た。肥満ゆきこは苦しまぎれに、右手を長身みずえの首に巻きつける。長身みずえは両手で相手の太い腰を抱きかかえるようにして寄りたてた。肥満ゆきこは、退りながら、強引な首投げを打った。

長身みずえの身体が大きく傾く、  
「キャーッ」と場内から悲鳴が起る。

崩れかけながらも長身みずえは、しゃにむに寄って出た。肥満ゆきこは、土俵に詰った。無理な体勢から、またも強引な首投げ。長身みずえは、左足を外掛け、体をあずけ



た。肥満ゆきこは掛けられた足をはね上げつつ、強烈な首投げ。長身みずえの身体が大きく宙に孤を描いた。

二人は組み合ったまま、土俵下にどっと転落した。肥満ゆきこは右腕に長身みずえの首を抱えたまま彼女の上にのしかかった。（ワ

ァーッ！ 場内が爆発した。）ついに、肥満ゆきこの首投げが決まったのである。長身みずえは、肥満ゆきこに組敷かれ、乳房でも強打したのであろうか、そのまま起き上れない。ようやく同僚の女子店員たちに助け起され土俵に上り、一礼し終えるや、逃げるようにして花道を退場する。敗れたとはいえ、彼女の健斗に対し、場内から惜しみなく拍手が送られる。

長身みずえの汗にまみれた背中に、べっとりとついた砂が印象的だった。うつむいて、唇を噛んだ彼女の切れ長の美しい眼にはくやし涙があふれていた。首うな垂れて淋しく退場する長身みずえの後姿は、彼女が



背が高かっただけに、よけいに痛々しかった。一方、勝った肥満ゆきこも、さすがに呼吸が乱れ、肩で大きく息をしているが、行司の勝名乗りを、にっこりと笑って受けた。

『ただいまの勝負は、首投げ、首投げにて、ゆきこさんの勝ち。この結果、この大会の優勝はゆきこさんに決定しました』  
場内アナウンスが、彼女の勝利を告げてい

た。思えば、まことに激しい大相撲だった。この肥満ゆきこと長身みずえの一番は、デパート女相撲史上に残る名勝負として、永遠に私の記憶に消えないであろう。(終)

## 〔代理部新版分譲品一覧〕

<p>フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふの)</p> <p>フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふへ)</p> <p>フンドシの前後左右 大手札四枚一組 四〇〇円 栗本ミチ 略号(ふな)</p> <p>フンドシの変わった姿 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふに)</p> <p>女子斗争場面写真 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚、玉田 略号(のわ)</p> <p>二女格斗場面写真 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚、玉田 略号(のか)</p> <p>全裸正面切腹姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(のみ)</p> <p>切腹に悶える裸身 大手札三枚一組 三〇〇円</p>	<p>浣腸と便意の苦悶 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(のそ)</p> <p>強烈エビ責め 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(のけ)</p> <p>後手首の高縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 玉田美佐子 略号(ねむ)</p> <p>椅子またぎの責め 大手札三枚一組 三〇〇円 玉田美佐子 略号(ねと)</p> <p>血紅切腹決定版 大手札十枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号(れは)</p> <p>血紅切腹凄惨姿態 大手札十枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号(れみ)</p> <p>黒いフンドシを誇る 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(くわ)</p> <p>高圧空気浣腸 大手札三枚一組 三〇〇円</p>	<p>浣腸場面大写真 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(むは)</p> <p>施される浣腸 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(むろ)</p> <p>全裸脚拳姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(てい)</p> <p>全裸アゲラ縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(てへ)</p> <p>全裸屈伸縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(てほ)</p> <p>六尺禪の変形姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(てに)</p> <p>蹲踞と拍手 大手札二枚一組 二〇〇円 長野良子 略号(てり)</p> <p>鬼面と接吻する 大手札二枚一組 二〇〇円</p>	<p>強烈エビ責め 大手札三枚一組 三〇〇円 松本アサ子 略号(まと)</p> <p>裸身に羞らう 大手札三枚一組 三〇〇円 松本アサ子 略号(まつ)</p> <p>女賊捕縛 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(へい)</p> <p>女賊処刑 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(へは)</p> <p>全裸緊縛姿態開陳 大手札四枚一組 四〇〇円 遠藤百合子 略号(ゆり)</p> <p>鼻をいたぶる 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(ゆは)</p> <p>浣腸をする女 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(ゆか)</p> <p>バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(ゆお)</p>
---	--	---	--



月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆす)

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 略号 (七〇〇円)  
絹川文代 略号 (らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (ろも)

ふり乱す長髪の悶え

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (ろめ)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
関谷富佐子 略号 (ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
関谷富佐子 略号 (ほむ)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (ちり)

写真の中に悶える

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚啓子 略号 (けよ)

写真に埋れた裸女

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚啓子 略号 (けお)

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
栗本ミチ 略号 (ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
栗本ミチ 略号 (ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)

栗本ミチ 略号 (ふな)

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
栗本ミチ 略号 (ふに)

前開き、ゴムオシメカバー

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
大塚啓子 略号 (しま)

前開き布製防水オシメカバー

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
大塚啓子 略号 (しな)

全裸の切腹悦楽(1)

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸切腹悦楽(2)

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚啓子 略号 (ひと)

乳房しぼり

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚啓子 略号 (うい)

木馬責三態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (もく)

椅子責めの果て

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (いす)

哀婉血紅切腹

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚啓子 略号 (るな)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (そつ)

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (とう)

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚啓子 略号 (はす)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
長野良子 略号 (へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
絹川文代 略号 (ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
絹川文代 略号 (ちた)

オムツ着用フォト

大手札七枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚啓子 略号 (むね)

バンド着用開股ポーズ

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (つん)

マニヤ全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
栗本ミチ 略号 (いな)



花

石

榴

(はなざくら)

……悦唐絵灯籠…… (その十一)

万 田 不 仁

父が転勤になって、R市の外れ、樹木の多い高台の裾の古い家に引越した。マッチ箱みたいな家だった。将吉は土地の中学校に編入した。はにかみ屋の彼は、それまで父の仕事の都合で小学校の頃から何度か転校しているにも拘らず、初めて校門に欧州中世紀の兜と剣を組合わせた燦し銀の校章の光る、その中学校に行った日は、すっかりあがってしまっただ。よせばいいのに父は将吉の転校の都度そうしたように以前の学校で息子が得た優等賞状など抱えて行って、担任の教諭に示し、世馴れた薄い唇を盛んに動かして親馬鹿的言葉を吐いて殊更将吉を恥ずかしがらせた。

三年学級の教室に入ると、皆の好奇心、反撥、軽侮、少しばかりの憐憫の交ざった好意の感じられる目差に逢って、将吉は一瞬ぱおとなった。それは内気な彼の思い過ごしたたが、——弱虫——と、そんな気弱な自分を自分で叱りつけて

「原将吉です。よろしくお願いします」

へんにうわずった声で云ってペコリ頭を下げた。教室の後の方で、くすくす笑い声が聞えたようだった。

☆

早春の雨がストーブの熱に曇った教室の窓ガラスに小さな粒々を作っている。喘息持ち

の英語教師が休んで自習中の生徒たちの間には、午後の睡たい時間に漂う倦怠感がひろがっていた。

将吉も何かけだるい気分でリーダーのロンドン塔の写真を眺めていると、後の席から尻をつつく。

「……」

振向くと、顔中小豆色のにきびを散らした河原という生徒がにやにやしながら机の下から一枚のすべすべした写真を渡そうとしている。河原は柔道が強く、年も食っている、どこか他の中学で停学処分を受け、こちらへ転じて来たという噂がある。将吉はまたかと思



った。写真の素生は知れていた。  
「何に？」

隣の席の島方が小声で聞く。島方は上級生に狙われたり、電車の中で女学生から手紙を渡されたりしている繊細な感じの美少年だ。

黙って将吉はちらりその写真を見せて、その俣島方の手に渡した。こんな場合、将吉は何時も無感動を装った。が、あまり素気なく扱ったり、嫌悪の表情を浮かべることは避けて、河原のようなクラススの暴力や悪を代表している生徒の反感を徒らに買わぬようにしていた。

白人の男女の放恣な姿の写っている写真をリーダーの上に置いて、島方はじっと見詰めている。その白い頬を赤らめもしない。将吉の方が却って恥ずかしくなってしまう。彼にはその一葉の写真に見る男女の姿から、暗い忌わしい思い出が蘇って来たから……。

☆

そこは港町だった。当時父は勤めが快適らしく上機嫌だった。何か知らぬが月給の他に実入りもあるらしかった。

将吉は小学校四年生、その一学期の成績が良く、秋の新学期の始まるのが楽しみで、毎日宿題の昆虫採集に忙しかった。

ある日、父は一人の若い女を家に連れて来た。父はその女を香港の会社で働いていた自分の妹だと将吉に云った。しかし、それは全く嘘らしかった。父は小男で貧相なのに、女は上背もあり、肩が張り、容貌も美しく、立派だった。

「まア、この方が将吉さん、きれいな児ネ、お母さまに似たのネ、きつと。ホホホホ、あら失礼、ごめんなさい、兄さんをお男だって云う訳じゃありません。ハハハハ」

女は喉の奥まで見せて高笑いした。

女は毎朝遅く起きるらしかった。日曜日の朝、女は華やかなピジャマの横坐り姿で、何時までも鏡に向かって丹念な化粧をした。将吉は彼の極く幼ない頃に死んだ母が頻りに恋しく、そんな若い女の姿を憎しみの目を以って眺めた。

夕餉の後、女はマンドリンを弾いた。僅かの晩酌で顔を赤黒くした父は他愛なく手を打って喜んでいた。

「当分、千恵子はうちにいるよ、外国で忙しく働いていたんだから、体をやすませなくちゃ……」

父の云った言葉に、将吉は無言でうなずいた。父と二人きりの佻びしい生活の中で、千

恵子の存在は、そこに真紅の花を置いたようだった。にも拘らず将吉の胸の底に、あるおそれ、何か不吉なもの、そして堪らなくいやらしいものが蟠まって消えなかった。それは逸早く悪の花の香を感じた敏感な少年の感覚だった。

それは朝から曇って烈しく風の荒れる日だった。海鳴りの音が気味悪かった。

将吉は友だちの家へ出掛けたが、途中でその友だちに返す筈のアンデルセンの本を忘れたことに気付いて、急いで引返した。

青いペンキのはげた家は、ひどい風の中にぎしぎし鳴っているかに思えた。将吉は何故か気が急いで裏口から家へ入った。庭のプラタナスの葉が風にすぐく騒いでいる。自分の部屋へ入ろうとして、彼はへんな、だらけた女の含み笑いの声を聞いた。大人の女の本当にいやな声だった。彼の心にそれまで抑えつけられていた疑惑の思いが、この時一度に弾かれたように広がり、彼を唆かした。こそ泥のように忍び足に廊下を歩き、そっとおかしな声のする茶の間を覗き込んだ。

茶の間の卓袱台の傍に千恵子と父がいた。電灯が黄色い光を投げている。将吉は目を見張った。





黄色い地に紺の水玉模様の寝間着をしどけなく着た千恵子が俯向いて笑っている。彼女は右手で自分の白い豊かな乳房をつまんで、下の父に示している。若い女の青白い太腿がそれが何か別の生き物のように父の小さな顔を両側から挟み込んで、きつく締めつけているようだ。女の円い膝頭、絹の下着の白さが冷やかに輝くよう――

――よいしょっと……さアいいわ、愈々切ないでしょう、何か云えて、云えないでしょ、こんなとこ会社の人に見られたら大変ネ、課長さんだいなしネ、フフフフ。

どっと吹きつける夏の風がまたひとしきり庭木を騒がせる。将吉は一步一步静かに廊下を踏み、裏口から家を出た。そしてやけ糞に駆け出した。心臓が破裂しそうだった。……「この外人の女ネ、遅しい体してるネ、強そうだネ、巴御前みたい」

島方の声で将吉は吾れに返った。巴御前――将吉は島方の澄ました顔を見て、そんな島方の連想がおかしくて小さく笑った。彼は今迄より以上に島方が好きになった。

☆

島方勲の父は数年前に病死したが、一流会社の重役で一寸名の知れた剣客でもあった。彼は剣道で同門の先輩の娘を娶った、その娘つまり勲の母が亦女ながら幼ない時から鍛えられた剣道の腕自慢であった。曾て婦人雑誌の口絵写真に島方夫妻の勇ましい立合いの姿が載ったこともある。

「ねエ原さん、勲はちっとも上達しないの、小さい時から教えてるんですけど、やはり親じゃ駄目ネ、大体お父さんが甘かったの、こ



の子は細いから無理だって、私が少し仕込もうとすると、お前は厳しすぎる、体を傷めたらどうするって云うんですもの」

白い稽古着に赤胴、紺の袴をはいた姿の凛々しい勲の母——蒔絵は話した。三十四、五才の中年の女の美貌が男性的な恰好に映えて将吉には眩しいくらいだ。

勲の家へ遊びに行つて、将吉は母子の将吉を見た。綺麗に拭き込んだ小じんまりした道場が家の中にある。その父の死後、母と子と体のいかつい、醜い下婢だけの淋しい島方家だった。

将吉は勲と三本勝負をした。

「仲々お上手ネ、流石に剣道部員ネ、それに筋がよくてよ、今度は私としましょう、一本勝負」

軽く連続胴を取つて勲を一蹴した将吉の腕を蒔絵は褒めて誘った。

「いやア、とても勝負になどなりません」

「勝ち負けなどどうでもいいのよ、勉強になるわ、私にも。私もずうっと稽古らしい稽古していないの、夫が死んでからネ。若い人と打ち合つてみたい」

蒔絵の大きい目が輝いた。一層若やいだ感じの美しい、友だちの母親を相手に竹刀を取

ることが恥ずかしく、そして嬉しい気がして将吉は自ずと頬が赤らんだ。

「じゃお願いします、未熟者ですから、よろしく」

「ええ、こちらこそお手柔らかに」

二人は道場の中央で、左右に別れ互に竹刀を正眼に構えた。勲は道場の端に正坐し、微笑しながらこの対戦を眺めている。

将吉は実は内心可成り腕に自信を持っていた。学校の剣道師範増岡先生から隔日に放課後示現流の剣を熱心に学んでいるし、先生から時々前途に期待をかけられた褒め言葉を頂くこともあったから、蒔絵に立向つてもあまりに惨めな打たれ方はしないような気がしていた。少年らしいみえと自惚れも手伝つて、彼は四段ぐらいの実力を持つ蒔絵に対して勢よく打込んでいった。

しかし、最初の一、二合で、将吉は相手の力強い竹刀捌きに驚かされた。盲蛇に怖じず——彼は学校の道場で増岡先生と竹刀を合わせた時のような、いや、それよりも何か鋭いものを蒔絵の全身から感じられた。増岡先生は強い、強いがもっと円満な感じだった。

五、六合打ち合った処で、将吉は竹刀を捲落された。ガラガラ道場の床に竹刀が転がっ

た。右手の指が痺れた。

——しまった。

彼は次ぎの瞬間、両手の小手を取つて、蒔絵の面に投げつけ、躍りかかって組付いていた。

「その意気、その意気、原君頑張れ」

勲の感心したような声が聞えたが、もう夢中だった。日頃竹刀を落されたら間髪入れず組め、と、増岡先生に云われていた通り将吉は大柄な蒔絵の赤胴に額をつけた武者振りついたのだ。相手が滅法強いので、女と取組合をする恥ずかしさなど少しも頭になかった。

「まあ、元気がいいのネ、でも原さんの力で私を倒せるかしら？ ホホホホ」

蒔絵は将吉に足絡みを掛けられながら落着いている。

「原君、押せ、押せ」

母の強いのを知っている勲は将吉に声援を惜しまない。将吉は勲の声に何だか篤い友情を感じて、いま一息力を籠めて相撲の外掛けの手を強行する、そうすると、相手が勲の母ではなく、何か西洋の小説に出て来る気味悪い魔女のような、敵愾心がむらむらと湧いて来るのが、吾れながら不思議だった。彼は蒔絵の左足に掛けた右足に愈々力をいれる。



「まだまだ力不足よ、そんなことでは私を負かせなくてよ、それが証拠に、ホラこうしてあげる、えい」

蒔絵が気合をかけると将吉は掛けていた足を逆に強く引返されて仰向けにどっと倒されてしまった。急いで跳ね起きようとする肩を女と思えない強い力で突かれて再び転がされた。その将吉の黒胴の上に飛び掛かった蒔絵は容赦もなく馬乗りになって直ぐに将吉の両手を両膝で制してしまふ。下に押拉がれた将吉の目に蒔絵が本当の魔女みたいに見えた。

「勝負あった、ホホホホ」

将吉の面を無造作に奪いながら蒔絵は笑った。その瞬間、将吉の耳の奥に昔、大風の日、薄暗い家の茶の間から聞えた千恵子という女の笑い声がふっと蘇った。将吉は蒔絵の膝下に組敷かれながら、ぞくぞくと身を顫わせるのだった。

「ちえつ、残念だな、原君、これから二人で一生懸命稽古して何時かきつと母さんを負かしてやろう」

勲が慰めるように将吉に云った。

「そうよ、その意気よ、勉強も大切だけど、体も丈夫にしなけりゃ、勲が初段にでもなったら、お父さん、それこそ草葉の陰でお喜び

よ。原さん勲の剣道の相手になってあげて下さい、お願いよ」

やや紅潮した頬を綻ばせて蒔絵は嬉しそうにこう云うのだった。

☆

勲は仲良しの将吉が剣道の仕合で、母の蒔絵に竹刀を叩き落され、組討になって組敷かれ面を奪われた時、強い母に一種の反感を覚えて二人で剣道修業に励もうと云ったが、もともと嫌いなことなので、その提案は全くの三日坊主に終ってしまった。

勲はバイオリンを弾いたり、ガリ版刷の同人誌に抒情的な詩を発表したりすることが好きで、母に剣道を強いられるのを恐れて、将吉が稽古に行く木曜と土曜の晩、不在のことが多くなった。

「あの子は、文学がやりたいらしいの、新しい同人雑誌をグループで作るんですって、しようがないわ、柔弱で、あんな痩せっぽじゃ軍隊に連れてかれは、心配はなさそうだけど……」

蒔絵は半ば諦めたような口ぶりであった。

「その代り将吉さん、私あなたを鍛えてあげる、いや？ じゃないでしょう、学校の剣道部の大将にしてみせるわ、その心算で私に向

かって来なさい、でも私、学校の増岡先生よりきびしいかも知れなくてよ、何と云っても先生は御年輩でもあるし……私の剣、難剣だって云われたものよ、ホホホ、怖がらなくていいわ、少しまついで……」

面の紐を締めながら蒔絵は将吉の顔を見据えるようにして云う。将吉はうなずいたが、自然と頬が熱くなった。何故なら近頃、彼の心の裏深く疼いてやる、やましい願いが蒔絵と竹刀を合わせる毎に漸く花の種がふくらんで来るように、そして花の芽が出て来るように育っているのを自覚し出していたから。蒔絵は激しく竹刀を打合わせる時、相手の竹刀を絡み落したり、打落したりするのが巧みだった。そうなれば少年非力の将吉でも呆然と立ちすくんで空しく一撃浴びる訳にはいかない。彼は飛込んで蒔絵の竹刀の下をくぐって組付いていかざるを得ない。が、精々力をふりしぼって争ってみても所詮大柄で臂力の強い蒔絵を捻じ伏せることは出来ない。結局道場の床の上に俯せに、あるいは仰向けに倒されどっかり馬乗りに跨がられて藻掻く間もなく面を取られてしまふ。そんな組討が二度、三度重なるうちに何とか一度跳返したい一心で足掻くうちに将吉の胸に萌した暗い望みと



喜び、それは中年の美しい女の大柄な体の下敷きになる、馬乗り組敷かれる喜び、そうされたいと願ひ、期待している自分の闘志を挫くいまいましい気持ちであった。いけない、いけない、彼は唇を噛んで自分のそんな願望や人に言われぬ喜びの思いを八裂きにし跡方も

なくしたいとどんなに苦しみ努めたことだろう。自分の体の中に、あの青いペンキを塗った家の茶の間に見られた光景、あの風の日のどんより曇った午下がり、黄ばんだ電灯の光の下であやしい女の下になって戯れていた父の血が流れている、そう考えると彼は何とも



云えぬ屈辱感に激しい自己嫌悪に沈んだ。彼はもう勲の家へ行くまいと何度も思った。しかし、彼の青い、傷つき易い官能は鋭敏に働いて、彼に時絵の豊かな撓やかな体、年よりずっと若く見える端麗な顔、潤いのある声音など克明に思わせ、また組敷かれた時の時絵の体の重みや、彼の面を取るまでの身のこなしなどを鮮かに感覚的に記憶に生ま生ましく呼戻したからその日が来ると、彼の足はやはり勲の家へ向いてしまうのであった。

島方家の庭は石榴の花が盛りだった。

こふまじきひとをこひをり花石榴

ふと、将吉は父がとっている俳句の雑誌で何時か読んだことのある句が口に出たことにおどろいた。恋——彼は自分の早熟な——と彼は自から断定した——心の動きにどきまぎした。十六才の顔が火のついたように熱くなった。いや、恋とは違う、これは恋とは別な何かだ、と彼の中の冷静な声が諭すように囁いた。朝の目覚めや夜半の床で、彼は美しい女武者姿の時絵と一騎打して組敷かれ、遂に首級を挙げられる少年武者の自分を夢みていた。彼は敦盛のような自分を考えて、自分の首級がその後永く髑髏の酒盃と変えられて、時絵に愛蔵される結末を何度も順を追って空



想して、そのあと、頭に濁った血が昇りきったような頭痛に悩まされるのだった。

「さア、今日はみっちり仕込んであげる」

蒔絵は、将吉のそんな心の動揺など考えても見ない、ばさばした顔である。

「お願いします、お手柔らかに」

「お手柔らかにしてたら何時になっても強くはならないわ、黙みたいに。あの子今夜音楽会へ行ったわ、駄目ねエ」

威勢よく切返しをやってから二人は真剣に立合った。すると、その夜の蒔絵は常よりずっと手厳しかった。既に将吉は蒔絵の剣が前に自分で云ったように難剣であって、それに稽古中に何か底意地の悪い仕方をすることに気付いていた。それは学校の増山老先生の円融無礙と云った風のおおらかな太刀捌きとは全く異なっていた。将吉は蒔絵の美しい容姿に惹かれ、女ばなれした、何か机竜之介を想わせる剣先にも引付けられはしたが、一方では彼の純真な気持が蒔絵のうちにひそむ魔性と云っては大仰かも知れないが、何か底知れぬ妖しい力を恐れ、時にはそれが無性にいとわしかった。

果して蒔絵は激しい乱暴なくらいの突きを入れて、将吉を道場の羽目板に押しやった。

更に横面を打ち、また執拗に突きを加えようとしてじりじり彼を追い詰めた。面の中で目がぎらぎら光っているようだった。——今日はへんだ、怒ってるみたいだ。

そう思うと彼の太刀先は鈍った。何しろ腕が格段に違う恐れの上に豹が仔鹿を襲うような蒔絵の慎重な扱いが気味悪くなった。ひるんだ隙に将吉は、また竹刀を叩き落された。「ほら、しっかり握っていなくちゃ駄目よ、どうするの、参った？」

勝誇ったような蒔絵の声に、将吉の気弱な優しい心の裏側に隠れていた反撓心が俄に突き動かされた。彼は素早く小手を脱いで蒔絵の面に叩きつけた。——くそっ。

彼は我武者羅に蒔絵の赤胴目掛けて頭突きに出た。自分を縛る訳の解らぬ妖しい力を突き破りたい。

「よし、その意気よ、原さん、一度くらい私の面を取ってごらんさいナ」

薄っすら笑みを浮かべているらしい蒔絵の力強い両手が彼の肩を抑えた。彼は真実昂って、その胸の底にしこっている蒔絵に組敷かれることを喜ぶ暗い感情が何処にけし飛んで唯驕慢な年上の大人の女を道場の床に叩きつけられたら……という憎しみの念で一杯だった。

た。体中が炎のように熱くなっていた。

「しっかり、力一杯出さない、ひよっとすると勝てるかも知れなくてよ、ホホホ」

嘲笑うような蒔絵の声が今や益々将吉の手足に力を与えるかのよう。足払い、大外掛、首投げ、足取り、もう無茶苦茶な将吉の攻撃だった。彼は息もつかず攻めながら喘いだ。「フフフ、忙しいのネ、そらどうかナ、私倒されそうよ、ホホホ」

少年の闘争心に油を注ぐ蒔絵のあしらい、女は少年の仕掛ける業の波に足を掬われそうに見せたり、逆に少年を羽交締めにして脅かしたり、それは女と少年の激しい組討のようであり、実際は余裕たっぷりの女が戯れながらじっと少年の疲労するのを待っている狡猾な手段だった。女は倒れそうで倒れない。

やがて、将吉は力尽きて自分から足を纏れさせた。そこを何で蒔絵が見逃そう。でも尚暫く適当に揉み合った末に

「えい」

軽い足払に、脆くも将吉は尻餅をつかされた。すかさず蒔絵は将吉を押倒し、有無を云わさずむんずと馬乗りになり、双の膝頭に少年の両手をきつく敷き込んで、大磐石。

「口惜しい、残念だ」



「ホホホホ、まだまだ私には勝てないわよ、今日は直ぐに面を取らないであげるから、力一杯、暴れてごらんさい。跳ね返してみなさい。上になり下にならなきゃ組討らしくないわ」

「うん、えい、えい、えい」

「ホホホホ、気合だけネ、もっと足を使ったらどう、女の私に馬乗りになられて恥ずかしいの」

云われる迄もなく将吉は懸命に両足で空を蹴り、腰が痛くなる程じたばたしてみた。蒔絵は薄笑いを片頬に浮かべて、膝下に足掻く少年の柔かい体の動きを楽しむようだった。その目には何時か嗜虐的な光がみなぎっていた。

### ◎お断りとお願い◎

最近頃に執筆者や投稿者の住所本名の照会や私信の転送を希望される向きが増えておりますが、度々誌上にてお断りしております通り、住所氏名の公開は一切いたしておりません。私信の転送、文通幹旋なども原則としては行なっておりませんから御諒承願います。すべて「読者通信」欄を御利用下さい。

る。そして両手はしっかりと少年の肩を圧して間違っても跳ね返されぬようにしている。

「昔ネ、戦国時代には女武者が随分活躍したらしいわ、女武者の首を挙げると武運が栄える、縁起がいいと云われて、女武者は狙われたの。けれどそんな男武者たちの中で反対に首を取られた者も多い。女武者の非力を計算に入れて、五、六合打合うと、いざ組まんなんて叫んで大手を広げるのよ、女武者も後には引けない、忽ち組討になるわ、そして当てが外れて妙齡の女武者のお尻の下に敷かれて首を掻かれた艶武者もあったそうよ、ホホホ」

我武者羅な抵抗が次第に衰えて、もう自棄的に足をばたつかせるだけになった将吉を見下して蒔絵は浮き浮きと云った。将吉は次第に蒔絵の体の重みが加わって来るようで、はやこれ以上はあらがっても仕方ないと諦めた。彼は弱々しくなった足掻きを止めた。

「残念だが……もう参った。参りました」

「ホホホホ、到頭音を上げたわネ、頑張ったけどやはり私の面を取れなかったわネ、ではあなたの面を取ってあげる、戦場だったら首級を挙げる訳よ、こんな少年の首取っても手柄にはならないけど、ホホホ、尤も敵を組敷

いてこんな話なんかしてたら後から敵方の者に槍かなんかでやられてしまうわネ、ホホホ、今度あなたに首の掻き方教えたげる、昔の武士の子は早くに教わったものよ、あらあらいどい汗、苦しかったのネ、可哀相なことしちゃったわネ、少しいじめ過ぎた」

将吉が面の下に纏っていた手拭を取って、蒔絵は少年の顔や喉の汗を拭いてやる。

「学校でも、こんな組討を増山先生に挑む子いる？」

「います。遠山なんて先生に向かっていく、でもすぐ組伏せられちゃうんです。先生は肥っているからチビの遠山はおせんべいになりそう、悲鳴をあげる、ひえなんて……」

「ホホホホ、今のあなたも、その遠山さんみたいかしら、重たいでしょ、もう下りてあげる、おせんべいにならないでしょうけど、ホホホ、ああ、何だか私も疲れたようよ、今夜はこれでお稽古は終わらしましょう。ハハハ」

蒔絵は明るく笑った。高い声で。

「お風呂に入ってお帰りなさい」

面を外した時、蒔絵はもう将吉の心にいつ時妖しい影を投げた魔性のひとの気配はなく何時もの優しい勲の母になっていた。

(おわり)



## 〔体験記〕

## 女よ、汝の名は魔性なり

栗 瀬 長

「どう、痛くない？」

「ううん、ちっとも。でも、何んだか変な感じね」

「変とは？ 恐い？ それとも——」

「何んていうかな、恐いなんてことないし、一寸表現出来ないな。貴方と二人っきりで、こんなことしてるの、すごく背德的な、それで一寸スリルもあるわね」

「私をはじめて女性を縛った、それもほんの形ばかりの縛りがこうした結果を齎らそうとは想像も出来なかった。女の魔性というか、軽卒というか、そうしたものを、まざまざと見せつけられたのであった。」

高校から大学を、一応無難なコースを卒え  
ると、私は自動車関係の二流商社の総務課に  
勤務する平凡なサラリーマン生活に入った。

と同時に、父母の下を離れて私は独りアパートに引き移った。それは私自身の希望であると同時に父母の希望でもあった。というのは、母が継母であったから。その若い継母に気兼ねしてではあったが、父はやはり手離すに忍び難かったのかもしれない。可成り贅沢なバス・トイレ付きのアパートを契約すると共に、ダットサンブルーバード一台を買い与えてくれた。高校時代に早くも免許証を手に入

れ、私が欲しがっていたのをよく知っていたからだ。

こうした自由な、ある程度満ち足りた生活を営むようになって、私には女友達がどちらかと言えば少なかった。高校、大学の友人会社のBG達、接する女性は少なくないのだが、元来内気な私は、進んでプレイボーイとなる決断がなかなかつかず、たまにお茶を飲み、映画を見、ボーリングに誘う程度で、それ以上の進行を見るのはまれであった。自分の車でドライブという好餌に託つけて、ガールハントするのは容易であったのだが。

ただ、ここに例外があった。高校時代から



山が好きであった私には、数人の山のグルー  
プがあった。山といっても、今を流行のロッ  
ククライミングや冬山をやるのではない、所  
謂尾根荒しという奴、大菩薩、丹沢、三ツ  
峠、前白根程度で、精々谷川の尾根、アルプ  
ス銀座を縦走するのが関の山といった。それ  
こそ、たわなない山の好きな連中の集りであっ  
た。

高校を出て、夫々大学は異っても、不思議  
と高校時代の結束は固く、誰となく次の山行  
きを誘い掛ければ、同じ顔ぶれが必ず集って  
くるのであった。その中には三人の女性も含  
まれていた。

本名は憚るので、仮りに登喜子、良子、啓  
子としておこう。どちらかというと、近代的  
な登喜子、良子に対して、ひかえ目でおっと  
りした啓子に、私はややひかれていたのかも  
知れない。爪実型の古風な顔と、無口に近い  
寡黙さが、何か誠実さをもっているように思  
われ、この人ならば、心の秘密も打ちあけら  
れるとさえ、何時の間にか独り合点していた  
のである。それがこんな結果を招こうとは。

# 閑話休題――

丁度それは高校二年の夏休みであった。気  
のあった同志二、三人と、ぶらりぶらりと東

海道を西下し京都まで旅をした事があった。  
岐阜は金華山にのぼり、高校生の身で長良川  
の鵜飼いとしやれこむ訳にはゆかないので、  
長良大橋の上で夕涼みがてら、鵜飼舟でもな  
がめようと、夕刻まで岐阜の街をぶらついた  
のであった。

今思えば大垣共立銀行の先であったか、と  
ある古本屋に何気なく足を留めた私達は、御  
多聞にもれず、ひやかすのであった。その時  
店頭、それも道路にこぼれ落ちんばかりに  
積んである所謂ゾッキの一番上に、真白な表  
紙、中央に何か訳の分らぬ墨絵が書いてある  
一風変わった雑誌が眼についた。変な本だとな  
ばかり、ひょっと取り上げて、パラパラとめ  
くった私の眼に入ったのは、蛙腹と浣腸とい  
う文字であった。

今にして思えば、尊敬する羽村京子女史の  
一文が、私の開眼を誘ったのである。

恐らく一般に用いられる筈のない浣腸の文  
字が、それも三号位の大活字で、表題を占め  
ていようとは。こんな本があったのか、以来  
私は奇クの愛読者というよりは、虜となった  
という方が当たっているかも知れない。

秘かに浣腸願望を抱いていた私は、こんな  
馬鹿げた恥づかしい趣味があるうかと、人に

も言えないことだけに、多分に自己の性情に  
自己嫌悪を感じ、抑圧に抑圧を重ねてきたの  
である。子供ながらに、婦人雑誌や家庭医学  
の本から浣腸の記事を切り抜いたり、恥づか  
しさを懸命にこらえながら、家人に言いつけ  
られたかのように装って、イチジク浣腸やグ  
リセリン浣腸器を薬局にて求めたりして、夜  
ひそかに浣腸を楽しんでいたのである。

しかし、世界中に凡そこんな馬鹿げた趣味  
嗜好をもつ者はないだろうと思うと、たまた  
ま自己嫌悪と罪悪感に悩まされ、時には浣  
腸器をたたき割って、もう決してすまいと誓  
うのであった。それが三日もすると、また、  
たまらない誘惑を惹起し、まるで夢遊病者の  
ように薬局に走るのであった。

それが、奇クは何と素晴らしい福音を告げ  
て呉れたことであろう。大先輩諸兄姉の論  
評、体験告白は言うに及ばず、読者通信にみ  
る浣腸愛好者の何と多いことか。私の同志が  
いる、同好のファンがいる。何と素晴らしい  
慰めであったことか。以来、私は憑かれたよ  
うに古本屋の店頭を漁っては、旧号を買い集  
めたことであろう。

そして、浣腸以外はあまり興味のない私は  
片っ端から奇クを解体しては浣腸及びその関



連記事を、——記事の中に、「浣腸」という文字さえあればよい——スクラップにしていた。もうそれが、今では、スクラップ・ブックに二冊、三冊にもなんなんとしているのだ。

では、どうして私が浣腸にとり憑かれるようになったか。今日はそれを詳述するのが目的ではない。ただ幼い頃、病弱であった私はそれひきつけだ、それ発熱だ、腹痛だといった、亡き母によくイチジク浣腸をされた思い出がある。その苦痛と羞恥が何時の間にか私を浣腸の愛好者に仕立てたものと想像される。

ところが、母が、末の妹を産んだ時の産褥熱で他界した後、後添えとして来た私と十五しか違わない継母は、末の妹や、その後出来た自分の子には時々浣腸をしてやっていたらしいが、もう既に中学生となろうとしていた私には、勿論遠慮して、何時如何なる場合でも浣腸の力の字も言うことはなかった。

継母に、「浣腸してあげましょうか」などと言われたら、勿論私は、頑強に拒むばかりか、激怒さえしたであろう。そんな恥づかしめなど受けられる筈がないのだ。と思う一方若く美しい継母に、ただの一度でよいから、

強引に、場合によっては縛りつけてでもよいから浣腸されたいという願望が、想像上の産物として私の脳裡から離れないのだ。

さて、話を前の女友達の方にもどそう。啓子——山科啓子と仮にしておこう。本名は差し障りがあるから。

山のグループの長い付き合いから、私達二人の間には一応善意に満ちた交際がやや深まっていた。或いはこれがそのまま進展すればほのかな恋愛感情も生れたかも知れない。いやそういう事自体、潜在意識としての恋愛感情だと規定出来るのかも知れない。

それはともかく、或る日、私は彼女を奥多摩なる小河内ダムにドライブに誘うことに成功すると同時に、帰途、中野なる私のアパートに寄ってゆくことをすすめた。

男一人の密室についてくる女性とは、一般的にはすぐ淫らなる連想を醸しやすいが、既のべた通り、お互いに信頼し合ってこそ、簡単に話はまとまったのである。

かくあれかしと願っていた私は、出発前予め、奇巧の最近号を一冊、わざと無造作に机の上に投げ出して置いたものである。

ドライブの帰途、立ち寄った彼女は、物珍

らしそうに男やもめの部屋をしげしげとながめていたが、私のすすめに従って椅子に掛けたり、当然と言わんばかりに机上の奇巧に手をのばしたのである。

「何よ、これ？」

グラビアをめくりながら、彼女の顔にさつと一抹の驚きと不安の影が走るのを、インスタントコーヒーを入れながら私は見逃さなかった。

「貴方って、こんな本読むの」

今度は明瞭に詰問と、侮蔑の表情である。

そう来るのは当然すぎる程当り前であるだけに私は前もって用意した言葉を復唱するのであった。

「読むっていうよりは研究さ」

「嘘おっしゃい。下劣ね。見そこなったわ」

「そんなこというもんじゃない、僕も極く最近まで、こんなもの知らなかったんだ、偶々会社の奴からすすめられてね、何ていうかなアブノーマルな世界っていうか。勿論、僕等が、大学で概論として習った精神分析学の立場からいうと、フロイドのリビドーの発展形態っていうかな。人間の心理の底にあるものを、顕在させたにすぎないんだな」

「だってこの写真なによ、いやらしいってあ



りゃしないわ。悪書追放の一番槍にあげるべき性質のものだわ」

「君としたことが、そんな軽卒なこと言っちゃいけないよ。悪書、

悪書っていうが、そりゃ未成年者や、教養のない、興味本位の見方をすりゃ、ヴァンデベルデにしたって、シュテークルにしたって、みんな悪書さ。何も僕だって白昼、こいつを見せびらかして歩いている訳じゃない」

「いい本なら、堂々とやればいいのに」

「冗談言っちゃいけない。社会規範ってものがある。そうでなくてさえ、ややもすれば興味本位にとられ勝ちな異常心理、いや異常という言葉は適切でないな、要するにアブノーマルなんだ」



「アブノーマルって異常じゃないの」

「いや、何が正常、ノーマルで、何が異常、アブなのか、何で規定する？。それは、現在

の所謂社会規範が極めて、いや極めたように見えるにすぎないんで、今ノーマルだと思われていることも、過去、或は未来の社会

ではアブノーマルかも知れないんだぜ。例えば現在の一夫一婦制、勿論僕は絶対にこれに賛成するが、過去には、いや今でも未開地方では一夫多妻が不思議でもなんでもないんだ」

「そんなこと牽強附会だわ。何とか理屈をつけて楽しんでるんじゃない」

こうしたやりとりが延々三十分も続いた頃やっとな彼女も、私が単なる興味本位ではなく、それ相応の理論的根拠によってアブノーマルなる世界を見ているということが、うっすらと分ってきたらしい。いやそのように仕向けたのであるが。

「へー、貴方って真面目



一方の堅物かと思っていたら、案外な面もあるのね」

「冗談じゃない、真面目な探究さ。ところでこんなこと言ったら、一遍に軽蔑され、嫌われて、ハイソレマデヨって所だろうが、こんな世界もあるって所で、一寸縛られてみて呉れないか」

「え、何ですって？」

「そう変な顔するなよ」

「それが今日の目的なのね」

「いやだなあ、変に感ぐるなよ。君と僕の間柄じゃないか。変なこととして見給え、我々だけの問題どころか、我々グループの物笑いの種になるさ」

ここが私の強調したい所であった。決して誰にも言ってもらいたくない。絶対他言無用を、何とか理屈をつけて、彼女に納得させねばならなかった。

ようやく彼女も、理詰めという所で

「何だか分らないけど、この写真みたいな変なことしちゃ嫌よ。まさか洋服を脱げなんていうんじゃないでしょうね」

「馬鹿だな君は、当り前じゃないか、一寸二重程巻いてみるだけさ」

ああ、何というなさけない縛りであろうか

股間縛りなど言うも及ばず、足さえ縛ることは出来ないのであった。

「一寸スリルもあるわね」

その一言で準備に一時間もかけた、はじめての緊縛の真似事は終ってしまった。

ところで、私の本心は言わずとした彼女に浣腸をという事である。

だが、だかどうして、浣腸などということと言えるであろう。私は浣腸マニアだ。緊縛フェチ、レスボス、女斗、切腹といった言葉は平然として口にする事が出来るし、今も彼女に、こうした世界のあることを随分説明もした。しかし、遂に「カンチョウ」という発音をするには、あまりに心理的抵抗が強く、遂に一時間の長きにわたる奇ク談議の中に、浣腸の力の字も言い出すことなく終ったのである。

若し、私がそれとなく浣腸願望の世界があると云ったら、彼女はどんな反応を示したところであろうか。

でも、私はそれを口にしなかったことが、しみじみよかったと思っている。

それは――

或る日、私は夕刻退社して会社の玄関を出た瞬間、卒業以来会ったことのない高校時代

の友人大屋にばったり出合わした。

「よう、しばらく、どうだ」

期せずして、飲み屋へ。飲む程に酔う程に「そういえば、お前、面白い遊びを覚えたってな、俺、尊敬するよ」

「何の事だ」

「まあ、一杯やれよ。山科を縛ったっていうじゃないか。それ、お前とよく山へ行ってたろう、上原の奴が言ってたぜ」

脳天を一発とは正にこのことであろう。あれほど周到にそれとなく口留めもし、口も堅いと信じていた山科啓子が、こともあろうに山グループの上原に口外しようとは。

あれ程親しく付き合ってきた山グループ、ああ私はもうそのグループに親しむ勇気をこの瞬間に失ってしまった。

それにしても、私は浣腸を口にしなかったことが、浣腸を言う勇氣のなかったことを、心から喜んだのである。

私は大屋と分れ、酔いにふらつく足を踏みしめながら、何度もつぶやくのであった。

「女よ、汝の名は魔性なり」と。

(おわり)



# 臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供  
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。  
モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということがいえます。

## 臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付  
三枚一組 四〇〇円  
略号 (にち)

## 診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付  
四枚一組 五〇〇円  
略号 (にし)

## 臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付  
四枚一組 五〇〇円  
略号 (にり)

## 臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付  
三枚一組 四〇〇円  
略号 (にす)

## 柱縛りの妊婦

## 臨月のヌード

大手札印画紙焼付  
二枚一組 三〇〇円  
略号 (にや)

## 妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付  
二枚一組 三〇〇円  
略号 (にた)

## 縛られた妊婦

大手札印画紙焼付  
二枚一組 三〇〇円  
略号 (にる)

## 臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付  
三枚一組 四〇〇円  
略号 (にお)

## 臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付  
三枚一組 四〇〇円  
略号 (にぬ)

## 突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付  
三枚一組 四〇〇円  
略号 (にい)

# 最新Mフォトシリーズ決定版分譲

読者通信をはじめとして、投稿原稿や編集部に対する通信などによって、Mフォト分譲について熱心な要望がありました。もとよりSフォトとは違い、注文の多きは期待してありませんが、少数とはいえ、Mフォトを要望されるファンのために、ここに最新撮影の分譲品を発表いたします。

## 犬男の訓練風景

大手札印画紙焼付  
十枚一組 二〇〇〇円  
略号 (みら)

## 男を刺し殺す美女

大手札印画紙焼付  
十枚一組 二〇〇〇円  
略号 (みむ)

## 男を尻の下に敷く

大手札印画紙焼付  
十枚一組 二〇〇〇円  
略号 (みう)

## 足下にうごめく顔

大手札印画紙焼付  
六枚一組 一四〇〇円  
略号 (みれ)

## 汚物を受ける男

大手札印画紙焼付  
六枚一組 一四〇〇円  
略号 (みわ)

## 男を馬にする女性

大手札印画紙焼付  
五枚一組 二〇〇〇円  
略号 (みか)

## 人間椅子の御褒美

大手札印画紙焼付  
五枚一組 二〇〇〇円  
略号 (みお)

## 飼犬に餌を与える

大手札印画紙焼付  
四枚一組 一〇〇〇円  
略号 (みた)

## 浣腸器で弄ぶ女

大手札印画紙焼付  
三枚一組 八〇〇円  
略号 (みつ)

## 股に絞められる首

大手札印画紙焼付  
三枚一組 八〇〇円  
略号 (みね)

## 芳香を嗅がす尻

大手札印画紙焼付  
二枚一組 六〇〇円  
略号 (みな)



# 青春悲歌

中 康 弘 通

## 一

大日如来が頂きに祀られている小山の、裾は竹藪から池になっていて、その池の堤に立つと、狭い山峡の町は、あらかた一目で見わたせた。晴れわたった空の高みまで届きそうな騒音は、新道に沿った縄工場からで、そこに働いている小野川蓉子の姿を浮かべながらゆっくり浩は堤を下って来た。

「おまささんかね、木村さんたらいう、神戸の学生さんは？」

不意に呼びかけられて何となく不気味さを覚えた彼は、中年の農夫の、陽焼けした、唇のどす黒く厚い顔を見た。  
「ええ、そうですか……」

怯えたような返事に押つかぶせて

「どう云うとらいな、ひろみでは？」

ひろみとは都会を意味する方言である。

「どう、とは？」

「戦争じゃがい」

じれったそうに農夫の頬が歪んだ。

「そりやあ、勝ち抜きますよ。あれだけ焼かれて、皆とても戦意が高まっていますよ」

「ふう、腹が減っても戦は出来るかな。まあええ、わしや思うのじゃが、とにかく、こっきり都会が焼けてしもうて、ピラシヤした奴らが土に帰らにや、この戦は勝てん、なあおまささんも、朝日の出んうちから裸足になって、青草踏んだら、ええ若いもんが病いなん

ざしやせんじや」

底光りのする眼で見据えながら農夫の筋立たぬ理窟に、浩の心は不快な怒りと混ざって絶望感に似たものが渦巻き出していた。

「僕も、夏がすぎたら帰りますよ」

吐き棄てるように云った。

大都会という大都会が焼け滅びることは、近代の日本が営々と築き上げた一切の消滅を意味している。遅ればせながら主な軍需工業が地方に分散するだけなら未だしも、至るところで工場が、機械設備から半製品や資材もろとも爆砕されていた。そこに動員されている工員の大半は住居を失い、時にはその生命すら失っている現状で、どうして戦争に勝て



るのか、というよりむしろ戦争を継続出ることか。たしかに戦争の高まりは空襲の激化と共に目立った。恐怖を克服するためには、眼前に迫った危険を冷静に見つめるよりも、一切の思考を抜きにした反撃に転ずる方が、人間にとって容易な場合もあり得たし、またより一層、野線で目の辺りに戦友が敵弾に倒れたとき、噴きあがるように湧いてくる憤りに似た闘志の燃えあがりもあったからであろう。しかし、それらの精神的な要素だけで此のぎびしい戦争を闘い抜く国力が保てるか何うかは、浩のような一学生の胸奥にさえ兆す疑問であった。

国力や戦力の実体に就ての詳細な資料を知ることの出来ない、ありふれた市井の一学生にすぎない浩の思考でさえが、いわゆる戦勝への希望を持ち続けることを拒もうとしていた。Z旗の伝統を誇る聯合艦隊が今は殆ど無力である、という噂が浮説ではないと誰しもが気付くほど、それほど敵の破壊力は強烈に国土に及び、彼我の戦力の落差が連日の空襲で現実に見せつけられていた。目の辺り、そうした戦争の現実を見る機会のない地方の人々だけが、都会文化の滅びたところに勝利への胎動がある、と信じているようであったが

それには何の裏付けもない。泥土にまみれての激しい労働がকাশし出す都会人への嫉妬と反感が、徒らに空中に描きあげた幻想にすぎないのであった。

不快げな浩の様子を横目に見ながら、ポンと農夫は掌で煙管をはいたが、すぐ、

「疎開の者は町の難儀じや、百姓とて、作りや大方は供出せにやならんが、そこを苦勞して真似ほど残したもんまで、無理無体に通つて去による。手の白い罰当りめが。まアおまさんはお寺さんが附いてなさるでええが、中には生意気なあまっ子も居るでなあ、哀れじや思うて、持って帰れちゆうに断わり云いくさる。あげなやつが、人目にさえ付かにや野荒しも仕兼ねんじや。あそこの縄工場に来た、ちよつとばかし浣皮の剥けた娘よ」

農夫の非難が今度は、浩もその一人である疎開者に向けられた。殊に、縄工場の娘という言葉で、生意気な野荒しも仕兼ねない娘とは蓉子のことだと気付くと、浩に生理的な不快感さえ覚えるほど腹立たしくなつて来ていた。病みあがりの彼にとって、木蔭とは云い条、七月も末の陽光がさんさんと降りそそぐ、野づらの眩しいほどな外光の中では、熱気と光線の圧力が、思ひのほか疲労を強いて

いたし、やり場のない憤りが腹の底からこみ上げてくることも、なおさら彼を疲らせていた。

「まあ一口に疎開者と云つても色んな人がありますがね、親を失ったくらいだから、あれも可哀そうな娘ですよ」

蓉子が戦災で両親を失くしたと、彼も聞いていた。狭い町のことゆえ、現にいま彼に話しかけている農夫でさえ、浩とは顔こそ散歩の途で見知っていても、取立てて今まで何の関わりもなく、始めて口を利くというのに、神戸から来て西雲寺で療養している学生と知っているのだから、蓉子の気の毒な境涯も知れているに極っていたが、何か彼女の持つ都会の雰囲気や農夫の反感を喰うのか、野荒しも仕兼ねまいとは、時節柄あまりにも残酷すぎる非難であった。頻々と起る野荒しの中には耕す土地を持たず農家に手づるものなし、青いものを口にする事の出来ない苦しきから、疎開者の主婦が子供にだけでもと、わずかな菜ッ葉を盗んだ例しもないではなからうし、また、農家の子供から、馬鈴薯の茹でたのや、トマトのように生食出来るものを見せびらかされて、疎開者の子供が畑のものを盗んだ例もあったかも知れぬ。しかし最も



ひどいのは、疎開者の作業に見せかけて、他家の畑のものを盗んで売った農夫の噂を、浩は聞いていた。それはあくまで噂にとどまっていたが、いかに稲の生命を左右するとは云え、田植え時には夜陰に堰を崩してまで水を奪い合うくらいだから、畑のものがまるで札束に見え、自分のものを売り尽くすと他家のものにまで手を出しても不思議でないような、道德感の乏しい人間が一人くらいあっても、当然かも知れなかった。

「わしらとて、娘の婿も跡取りも死んだ、その弟もまた行っとる、それが戦なら仕方なか」

さすがに蓉子の両親が爆死したことを云われると、いささか農夫は罵倒の舌をゆるめた。

「ところで今年の稲の出来は何うです、僕らまるきり判らんが」

この場を逃げ去るために、浩は一応ご機嫌を取り結ぶような気持で云った。

「わからん、まだ植わったばかりじゃ」

そう云い棄てる農夫の持ち田は、他所に比べて苗の揃いが良い。俗に池ノ下と呼ばれるこの一帯で、土地も低すぎず高すぎず、丁度用水池からの水が屈曲して彼の田に流れ込

み、更に一段と落ちて彼の畑の周囲を迂回したのち、少し離れた小川へ注いでいるからだった。

やっと眼を細めながら辺りを見わたした農夫は、ゆっくり立上ると腰に煙管を挿して歩き出した。いかにも頑なな後ろ姿であった。

農家の人々の純朴さというものに期待してはいないまでも、いくらか興味を持っていた浩にとって、この町での日々は全く幻滅であった朝の挨拶が「お天気でやす」夕方会えば「お疲れでやす」、夜は「お晩でやす」、そうした短い言葉を、今まで見知らぬ浩にもかけてゆく農家の人々が、その鄭重な挨拶を口にすると同時に鋭いせんさくを内に秘めたきびしい眼で、浩の全身を観察していることに、彼は次第に気付いていた。

こうした国民相互の背反が、何んなに不必要に銃後の生活を傷め付けているか、弾丸の雨飛する前線でのきびしい生命の在り方とは何のつながりも持たない空転に近かった。まだ地上の戦闘が内地に波及していないにしても、連日連夜の空襲で、全くの非戦闘員の血さえも何処かで流されていることを、少くとも都会の人間は忘れてはいない。そこまで考えたとき、浩は、自分の傍観者的な生活態度

に自己嫌悪を感じ、急に蓉子に会いたいと思った。あくまで国を憂え国を愛する彼の心と、実際には同じ年ごろの青年が前線で血を流している一方で、戦火を避けて病いを養う身を恥ずる彼の現実との、矛盾する苦しみを忘れるためであった。しかし、彼女の働く製縄工場の方へ足は簡単には運ばず、

「今日あたり、きっと来る」

そう呟いた浩は、のろのろと歩みを寺の方へ返した。寺の石段を上りながら振り向いたとき、真昼近い日光の下にガラガラと陽炎の燃える青さの中で、水田を搔く人影が幾つかあり、先刻の農夫もその一人であった。戦争が何処に起っているかと思うほど、平常に変わらぬ風景であった。

## 二

寺では浩は「離れのお客人」であった。梵妻が母方の縁辺という関係で、少しは荷物も預けてあったし、疎開学童を各町町の会所に収容した関係で、この土地では寺の離れがまだ空いていた。取り敢えず八月一杯の約束で浩は貸して貰っていたのである。配給通帳と身の廻り品だけを携げて彼がやって来たのは、沖繩の戦闘が激化した四月の半ばであった。神戸市街の大半が焼け崩れた三月の空襲



で、彼は家を失った。病気で休んでいても学籍があるので、神戸を離れようとは思ひもよらなかったが、防空壕での生活はひどく体にこたえ、痰に血がまじった。貸間を辛うじて探し当てたものの、四畳半一と間では、彼のように一日の半ばは寝たり起きたりという半病人を相手にしてくれない。生活物資が極度に逼迫し、配給の主食も麦米や砕いた豆の混ざった、とても、病人の口にするものではなかった。浩は口の奢った方ではないから、平気で咽喉を通したが、たちまち弱った胃腸を更に害ねた。こうした生活の変化だけでなく、彼のような一人前に防空活動の出来ぬものは「街におけぬ」と町内会長からお達しさえあって、浩は両親と別れ、この町へやって来た。来た甲斐はあって、緑の野山、青い空、さわやかな空気と、焼け爛れた神戸に比べて今では別天地の感さえ



あるこの町で、ぐんぐん彼は恢復期に入った。条件の悪い梅雨どき執拗な微熱も取れ、少しは肥って来たが、ただ顔色だけは相変らずの生白さであった。

蓉子を知ったのは、彼女が働いている縄工場で、極く小規模な機械で製粉もやっている、そこへ彼がたまたま住職の留守で、梵妻に頼まれて若干の糯米を挽いて貰いに行ったからであった。そのときも、西雲寺から来たと聞くなり、工場の女あるじが

「あんさんどっか、神戸のお人……この子も神戸の焼け出されどっせ」

そう引き合わせたのが、手拭いを姉さんかぶりで、ブラウスにモンペという奇妙な恰好を照れてかまちまち頬を染めた蓉子であった。全体に大がらで女学校を出たばかりというから、未だ十九とは云え大人びて見えた。

この六月、年老いた両親を住居もろとも空襲で失った蓉子は、た

またま京都にある女専の寮にいて助かったものの、学業を続ける見込みもなく、悲報で田舎から出てくれた叔母と二人で両親の葬らいをすますと、そのまま叔母の家へ引き取られた。たった一人の兄は航空隊に在り、統制のため永年の商家を閉じて両親が暮らしていた住居も焼け、残されたものは保険金と株券だけとあって、彼女は田舎で兄の帰還を待ち再興を計るはかばかしくなかった。焼け跡の貧しい立札に

「小野川広に告ぐ」

と叔母の住所まで記したのち、彼女は神戸を離れたのである。

機械を止めた中休みの茶のみ話に、煎豆を摘みながら浩は、戦災には遭っても、今のところ両親の健在な己れの幸せを思い、同時に、いつまた自分も彼女の運命に陥ちるかも知れぬ恐れも感じていた。国文志望だったのに本を焼いたのが残念だという彼女に「また寺へも寄って下さい、本も少しはありますよ」

そう云ったものの、蓉子の顔をはっきり覚えたとのは、彼女が本を借りにやって来たときだったほどであった。

二、三日して、遅い日昏れの寺の石段を彼

女が登って来たとき、西陽に少し眩しい顔付きの彼女を遠くから見えていて、蓉子とは気付かなかった。まさか直ぐやって来るとは思わなかったかも知れないが、彼には、そういう心理の盲点が、女性とのつながりの上でよくあるのだった。「おじやまかしら？」と縁側近くまで来てから、にっこり笑いかける蓉子に、ふと、随分ながく会わない、恐らくも会うことのない山崎信子を感じ出したのも、そうした心理の綾がさせたことで彼は

「あッ」と呼びかけ、はっと気付いて

「やア、上がって下さい」

「おおきに、涼しいし、ここで」

彼女は縁先に腰をおろした。

「本たって、こんなものしかない」

戦力増強版と銘打って特別に増頁された娯楽雑誌と、是も戦力増強版の文庫本を二つ三つ、本棚がわりの木箱から取り出した。その箱に並んでいるドイツ語のコンサイス辞典や医語辞典に目をとめた蓉子が

「木村さんは医学？、文学？」

専攻をたずねた。医学と知ると

「よろしいわねえ、兄なんか独文やったから

……」

ふっくらした蓉子の頬に悲しげな翳が射し

た。理科系統の学問に携わっているから、是だけ激しい総力戦のさ中でまだ学窓にとどまって居れる浩に、何か自責に似たものを感じさせるような暗い翳であった。無言の浩に構わずパラパラ繰っていた娯楽雑誌を蓉子が不意に閉じ

「いややわ、腹を切れ、なんて……女じゃ仕様がないわ」

浩を見上げた眼の周りが赦らんでいた。およそ娯楽雑誌に適わしくなさそうな、しかし戦時なればこそその読物は、逃げ降らず腹を切れ」と題して、あれこれと史上の壮烈な切腹の相を記し、大東亜戦への戦意を昂めようとしたものであった。次の瞬間、深い連想があつて、浩は不意に激しく信子への思慕の情を掻き立てられ、眼まいするような惑乱を覚えた。

「僕の知っていた娘だけど、戦争に若し敗けたら、腹を切る、なんて云ってたがね……」

「まア、その人、どんな方？」

「見習看護婦だったよ、そのころは。今じゃ日赤へ入っているはずだ……」

信子の倅を追いながら口にした言葉を、蓉子は噛みしめるような表情で肯ずいたが

「そして、その方が初恋の人というわけ？」



女って、みんな同じような口の利き方をす

るもんだな、そう思いつつ蓉子の瞳を見ると濡れ濡れと光る黒瞳が、口調の軽さに似ず笑ってはいない。よく見れば化粧の気もないがいかにも皮膚の薄い、つやつやとした肌が白く、目鼻立ちもキリッと整っていた。会うこともあるまい信子との今の距離の遠さを思い浩は内心に潜んでいる、漠然とした女性への思慕が、急に形を整えてくるような気がし、それを振り切るように云った。

「そう、あれが初恋で、おしまいの恋か知れんなあ。僕ら、そう長く生きれると思えんものね、気のきつい娘だったっけ」

### 三

「昨日のあれは何なの、お前なんか見たこともない、いう顔だったわ」

窓口から顔だけ出した見習看護婦の信子は軽く睨むような眼差しを向けた。晩秋の夜の待合室には小学生が二人、雑誌を読んでいるばかりである。

「昨日……ああ、ちよっと考えごと、してたもんだから」

手招かれて受付へ近づきながら口ごもる浩に少し声を低めて

「何を考えてたの、誰のこと？」

少女に悪戯ッぱい笑顔になった。

「誰って……」

扁桃腺炎から腎臓を患ったあと微熱が続いて、浩は、卒業間近い中学も出たり休んだり医科を志してはいたが自信を無くし、心に大きな穴が明いた思いで、その空虚に明るくあどけない信子の面影が食い込んでいた。

昨日は通院しない日で、坂の多い神戸のこゝとて、秋晴れの邸町を当てもなく上り下りする内に歩き疲れ、やっと家近くまで帰って来たとき、思いがけず信子が、めずらしくセーターにスカートという装いで小走りに来た。

看護望姿を見馴れているせいで、すれ違ひざまに声をかけられるまで、彼は気付かなかった。今日は会えない、と思い込んでいたから無意識に見すごしたのかも知れなかった。

少女というより少年の凛々しさ活潑さを見せる信子の後姿を、むしろ羨やむ思いで浩は見送ったのであった……

口ごもったままの浩に、畳みかけて、

「どんな人が好き？」

胸を衝く信子の言葉に「貴女が……」と云ってしまいうで、いつてはならなかった。

激しい戦争のさ中に若くして空しく病む身

の、きびしい世の中の動きから置き忘れられたような哀しみが、いつも彼の心に澱となつて、一つ年下ながら早くから他人の中で働いているだけにずいぶん世間馴れた信子の、軽くほぐれる口調には随いて行けず、我ながら頬の火熱るのが判った。

その顔を赧らめて眼を逸らす浩の気配に、信子もまたふッと眼を逸らした。恐る恐る返した浩の瞳が次の瞬間に信子の瞳と遭い、

「バカねえ」

口の中で呟いた信子は、見る見る色白の頬から豊かな耳朶まで、紅を溶いて流したような染まり方であった。その見ごとさに、浩はまた気圧されるような怯えすら感じないではおれなかった。ハタと受付の窓が閉じられ、よく糊の利いた看護服がサワサワと揺れ遠のく気配がわかった。怒ったのか……浩はギクツとするほど胸の奥に疼みを覚える。

長椅子に小学生の一人が、おかっぱの髪の毛垂れるのを、さも煩わしそうに揺ると、チラと浩を見てからまた雑誌に熱中し出した。

その瞳の色に何か惻れみに似たものが浮かんでいるようにも見え、居たたまれない気になっていたが、そのとき電話が鳴った。

「はい、あ、先生、ええ、いまですか？、三

人、木村さんと、ええ浩さん、……」

いつもと変らぬ信子の澄んだ声が院長に自分の名を伝えているのを聞くと、浩はまた落着きを失ない、立上って窓から月あかりの道を見た。青い、水のような光りに、暗い家並がひっそりと続いている。

「木村さん」

診察室のドアが開き信子であった。あわて振り向いた浩に軽く肯ずいて見せ、笑いもしなかった。

「先生お帰り遅いんですって、ビタミンだけ射っときますわね」

つややかで円い桜いろの頬が急に取りすまして見える信子に浩は、胸苦しいまでの思慕を不意に感じた。

「山崎さん」

思わず息の詰った声になると、信子の顔が一層引きしまった。

「痛いわよ」

短かく云うと、浩の腕の清拭された上膊に注射針が刺さっていた。ビタミン特有の疼痛が、むしろ浩には快よかった。いい気味だ、学生の分際で女のことなんか考えてるから痛い目を見るんだ、そう自嘲を覚えながら、「どうせ僕はバカだから嫌われたって惚れち

やうんだ」

「浩さん」

信子も息づまるような声になった。上気した頬の上で、瞳が素直にうるんでいた。

「ご免ね」

思わず口から出ていた。幼な児のよう首を振りながら、信子の眼がもう微笑っていた。

学生服の上衣に手を通す浩に

「今度どこお受けになるの？」

「医科だけど、自信ないんだ」

「じれったい人ねえ、来週、准看のお免状貰えるし、静注も出来るわ、いつ来て下さってもいいのよ」

「そう、おめでとう、えらいなァ」

この娘は働きながら検定試験に合格したのだ、と、みずからを顧りみてふと淋しさを感じたが、彼女の明るさに合やすように「痛うても辛抱しますから、よろしく」軽く下げた頭を上げると、

「またそんなこと、いやねえ」

信子は肩を軽く揺すって、拗ねる素振りになった。

木犀の匂う門を出て、信子も好意を持ってくれていると知った浩は、勇気を持て、恋をしたっていい、誰にも恥じない人間になった

らしい、胸を張って歩いた。蹺音に、彼の前を歩いていた子供がいぶかしそうに振り仰ぐのも気付かず、彼は朴鹵の下駄を鳴らして歩いた。

「戦争、どうなるのかしら」

いつものように注射のあと、診察用のベッドに並んで腰かけた信子が、ふと、そんな話題を持ち出したのは、丁度受験も真近く迫った冬の最中で、互に好意を感じはじめてから三月ほど経っていた。

「僕はね、本当を云うと悲觀的なんだ」

注射のしこりを揉みほぐしながら、ゆっくり云った。

「まあいかんわ、人に聞えたらどうすんの」眼を丸くして信子が声を低めた。

「僕はね、単純だけどあの十二月八日に思った。太平洋は広い、アジアもアメリカも広い、日本の兵力が占領し尽くせるとは思えない、逆に日本は狭い。とすれば……」

「いやッ、そんなことないわ、あんた非国民よ、日本人じゃないわ」

浩の言葉を打ち切るような激しい信子の権幕である。

「僕だっていやだ、日本は神州なんだ、不滅の国だ、王師の向うところ戦えば必ず勝つ。」



ただ、だのに何故ガダルカナルから転進しな  
きやならなかったんだろう」

「あれは作戦よ」

真剣に云って、昂奮した信子は、一と重睨  
ながら円らな眼を瞬ったが、直ぐ涙ぐんだよ  
うな眼付きになった。

「勝たなきゃならない、僕だって君と同じに  
国を愛し国を憂えているよ」

「勝つわよ、若し、若しもよ、負けたら妾」

彼女は咽んで声を切った。

「妾……切腹するわ」

低いけれど力の籠った声で思い切ったよう  
に云い、何か含羞んだような眼付きになっ  
た。

「信ちゃん」

胸に迫る浩の声も聞えぬげに、俯向いた信  
子の左掌は看護服の上から、娘らしい丸いふ  
くらみを見せる腹部をゆっくり撫でていた。  
母屋から、信子さーんと呼ぶ声が聞えた。  
跳び立ちながら

「奥さんだわ……いまのこと、人に云っちゃ  
駄目よ、さよなら」

彼女は小走りに去った。

若し日本が敗けたら、信子が腹を切るのか  
寒風の町へ出て浩は思い切り小石を蹴った。

俺は信子の最期を見届けてやりたい、それ  
からなら死んでも悔いはない。若し戦局が差  
し迫って義勇隊が編成され、上陸した連合国  
軍を迎撃するなら、俺は玉碎に先立って信子  
を心しずかに死なせてやりたい。そんな白昼  
夢に似た想念が浩の心をよぎった。空が白く  
冴え、下駄の音が堅くひびく、冷たい舗道で  
あった。

幾日か経ち、いくらか春めいた暖かさを覚  
える夜、おそく床に就いた浩は、信子を夢に  
見た。看護服の信子が浩に取りすがった。

「妾、もう今のうちに切腹するわ」

なだらかな青草のスロープに坐って振り仰  
いだ双眸に光る涙が、豊かな頬をすべり落ち  
た。

「待て、短気を起しちや駄目だ」

「だって、この傷では……」

彼女は見る見る蒼ざめて行った。

「ね、見届けて頂戴」

砲声がまた轟いた。彼女が喘いだ。硬ばる  
手で胸を開き、傍においた短刀を執る彼女を  
制めようとして、眼が覚めた。

砲声と思ったのは時ならぬ春雷で暗闇に眼  
を凝らす浩の全身は、汗で濡れていた……覚  
めて思えば、傷付いていたはずの信子が純白

の看護服で居たことも、夢の他愛なさでもあ  
った。

間もなく浩は医学校に進み、いつとはなく  
医院に通わなくなった。一と月余り会う機  
無かった信子が、最初で最後の短かい便りを  
浩に宛てたのは、丁度アッツ島の玉碎が伝え  
られたころであった。

日赤に忠願しました。孤児の妾には何の  
思い残りありませんし、いつかお話し  
したように、覚悟も出来ています。立派な  
お医者さまになって、お国のために尽くし  
て下さい。

居所を何処とも書いてないので、それきり  
連絡の取ようもなく、浩は現実に信子と会う  
機会を失ったかわり、夜の寝ねぎわなど、彼  
が眼を閉じさえすれば、睨の裏で信子は、ふ  
くよかな微笑を彼に投げかけているのであっ  
た。

#### 四

「そうやったの」

蓉子がホッと息を吐いて俯向いた。信子の  
思い出を語り終えたときである。

「信子さんて、きれいな人やったんでしやう  
ね、うちみたいなお多福と違うて……」

「さあ、美人か何うか、勝気な顔立ちじやあ

ったけど」

ポッソと云い切って、そろそろ夕暮の色の漂いはじめた部屋内から縁側に立ち浩は蓉子と並んだ。

「信子さん、本当に貴女が好きやったのよ、何でも無い人に、女の身で死ぬことを真剣には告げられへんもの。うちかて、負けん気の方やよって、死なんならんようになったら、どうせ死ぬからはなまぬるい死に方しとうはない、男やったら、兄みたいに航空隊へ行ったか知れんわ」

半ば独りごとのように云うと、もう雲が薄赤く染まっている空の遠くを見あげる蓉子の横顔は、きびしいものと淋しいものとの入りまじった、何かに憑かれたような美しさの漂よう表情になっていた。小さい唇もとが結ばれ、黒瞳に艶のある眼に睫毛が煙るような影を落し、何方かと云えば面長ながらか円味おびた頬が、娘らしさをたたえていた。

「そやけど、木村さん何う思うてですの、戦争」

「僕は容易で無いと思う、殊にB29の航続距離から見て、産業の破壊はサイパンが陥ちたときから当然考えられたことだし、今じや沖縄まで失ったんだものね、でも日本は亡びな

い、日本人は亡びない、それだけを理窟でなしに僕は信じている。」

「うちは、もう、どないしたらええか判らん、兄が帰って来たら力を協せて何とか小野川の家を起さんならん思てるけど」

話が現実に触れたとき、淋しい顔になって先刻まで蓉子の浮かべていた常ならぬ美しさが遠のいた感じで、彼女の急に色あせた頬が二十という年令より、老けたものを感じさせた。

急速に庭が暗くなつて来た。満月に近い大きな丸さの月が東の山の上にポツカリ出て、蓉子を驚かせた。本を二、三冊抱えて帰って行く彼女の白いブラウスが、夜の中へ消えて行くのを浩は見守っていた。

こうして二、三度往き来するうち、蓉子は浩の乏しい蔵書を読み尽くそうとしていた。

池ノ下の農夫から不快な話を聞かされた浩は、それが澁となっていた。蓉子を待っていてもその夜は来ず、翌る日から散歩も大儀なほど暑い日が続いて八月に入った。

沖縄での凄惨な死闘が一と月も前に終ってしまひ、もう連合国軍が本州のどこに取り付くかが、時間の問題と見えていた。ただ頼みとするのはそのときこそ、空から、また水中

から必死必殺の特攻隊が、密集した連合軍の艦船に跳みかかって行く一瞬の、云わば狂瀾を既倒に回すがとき奇蹟であつた。特攻はすなわち死を意味するけれども、今や死は誰れにも既定の事実であつて、いずれ直接戦闘に携わっていない者もまた、沖縄の人々のように戦わねばならなくなる日が目の前に来ているように思えた。緊迫感が、こんな田舎町の上空をすら毎日毎夜と往き来する来襲機の爆音からも感じられねばならなかつた。ただそれが、何れほどの現実性を以て迫つて来るかは、浩や蓉子のような体験者と、この町にのみ暮して、目の辺り惨烈な空襲の実相を見たことのない人間とでは、大きな差があるようであつた。

八日の朝刊各紙は奇妙な記事を載せた。六日の朝広島に新型爆弾が投下され、市街に相当の損害があつた、というのである。損害について、軽微と若干との差が現実は何んなものか、経験に教えられていたから、相当な損害と云えば、広島が殆んど灰燼に帰したものと浩は思った。しかも少数機の来襲だつたというのだから何発落ちたか判らぬが、極めて破壊力の強烈な爆弾に違ひなかつた。そして二日おいて同じ爆弾が長崎にも落ち、ま



た相当の損害があった。

この暑いさ中にも防空心得が、成るべく全身を被覆するように、という表現に改められたことも、戦局の新しい展開を示している。

と同時に、連合国の一つが北方からも攻撃を開始していた。

「この米が獲れるまで生きていられるだろうか？」

浩は、眼に見えて精気のない稲のそよぐ田を池の堤から見おろしては、そう思った。浩の在学する学校からは、八月末で一年の休学期限が終り、休学を更新するか復学するか、何れを執るかを照会して来ていたが、浩は一日延ばしに返事を怠っていた。余裕はもう半月しか残されていないが、連日大となく小となく空襲を受けている神戸に帰ることを、心の底で拒む何かがあった。国が敗戦に瀕しようとしているのに、と傍観者の怯懦を省みみる反面には納得の行く死に方なら、という考え方も何処かにあった。今でも目の前に信子が現われ、死のうと云えば一緒に死ぬかも知れない、そんな感傷が、わずかに残されたものとして彼の胸の奥に残っていた。

やがて、八月十五日の朝は、その前日と、前々日とも全く変りなく明けた。正午、浩は

寺の家族と共にラヂオの前に端座していた。

重大放送すなわち一億特攻の命令が下るものと覚悟して、浩は坐っていた、納得の行く行かぬもない、いよいよ死ぬときだ、その他に何も考えなかった。ラヂオの雑音が激しくて聞き取りにくいうち、ポツダム宣言受諾を告げるアナウンサーの沈痛な声が耳朶を搏った。瞬間、今日こそ必死の誓いを新たにしようと考えていた浩は、激しいショックに涙も出なかった。戦争は終わった。日本は敗れた。

そう気付いたのは、ひとり離れへ戻って、ガラガラと光る太陽の下、夏山を遠く眺めたときであった。涙が盛りあがって頬を伝いながら、嗚咽は声にならなかった。

その涙と共に、浩はこの、今すぎ去ろうとしている戦争というものが、一体何を自分に遺して行くのかを考えていた。

戦争は三年半前の、よく晴れて冷えがきびしい朝、宣戦の大詔と共に始まった。殆んど世界の強大な国家群を相手に始められた戦争の重大さを、浩は少年ながらに感じとり深い感動を覚えた。それは世界史の未来図を大きく書き変えて行くに違いない大きな戦争に、どんなに小さくても一つの役割を果たすという自覚が生んだ感動であった。けれどもま

た、戦争が日本をどう変えて行こうと、戦時体制の要求する方向に彼自身を向けることが正しい、とする信念は彼には未だ生れてはいなかった。宣戦の大詔が命ずる限り、彼は戦わねばならないのだ、と考えていた。死もまた一つの必然と考えていた。

それは是非善悪を判断するだけの余裕を許さない絶対であった。ただ一つ許される彼の私心は、納得の行く死を如何にして迎えるかであった。

何故、君は戦うのか？、若し人あって彼に質ねたならば、大詔のもと戦わねばならないのだ、というほかに浩は、答えるすべを知らなかったであろう。

浩の脳裡はすぎ去った戦時生活の一こまこまを急速に断片的に逆転させて行った。

ある暑い真昼には、草いきれの烈しい演習場で、彼は銃口を低め草むから草むらへと野鼠のように移動していた。湯のように熱した汗が学帽から頬へ伝い流れていた。ある寒い朝の厚い射撃場で、実包の竈っている銃身から伝わる冷氣に掌を痺らせながら、彼は標的に向って片眼を閉じていた。銃口の彼方に黒点を認めたとき、肩に発射の衝撃が快よかった。

そうした戦うための学生という身分に相応した日常がむしろなつかしく思い出され、戦争そのものの惨苦よりも、戦争がかもし出す雰囲気のみが、彼には、遠い、然し必ずしも苦味ばかりでない記憶になって行くようであった。信子との、また蓉子との、恋というには余りにも静かな、控え目な接渉もまた、戦時下の青春ゆえかと、彼は思った。彼にとつて、戦争は大詔と共にしまった。そして今日、終戦を宣らす詔勅を謹しみ承ったとき、戦争は彼から去って行くべきであった。

もはや戦争は過去のものであり、何も彼に遺されてはならないのであつた。勿論、破れ去った国に生きて学ぼうとする限り、生活の困難や道德の崩壊がもたらす障害は予想出来た。それらには第一次大戦に破れたドイツの先例があつた。然し日本には革命は起らないであろうし、ただ生きて行くことさえ考えればよいのであつた。

その夜、燈火管制の解かれた明るさの部屋で、彼は医学校の生徒主事に宛てて、復学の意志を告げる手紙を書いた。充実した死をどう納得して死ぬか、そればかり考え、無意味な死というものに恐怖して来た今朝までの人生観が、今度は不意に、充実した生き方をど

う生きるか、に向き変えられていた。とに角無我夢中で勉強したい、そう思っていた。少くとも、夙くに戦死した友の誰彼を思い出し、生き残っただけのことをしたい、それだけしか頭になかった。一年の空白が残した空白をどう埋めるかも、今は差し迫った問題だった。

あれを思い是れを考えていると直ぐ時が経ち、信子は何うしたろう、あの言葉どおり終戦と同時に死を選んだであろうか、と考えたのはそれから二、三日して、蓉子が訪ねて来た瞬間であつた。

日暮れの石段を蓉子は足もとを見つめながら上って来た。夕食を早く済ました浩が、もうあと何日ここに居れるかと思いつつ、遠い青田に動く人影を眼で追っていたときであつた。彼は下駄を突っかけて庭に立った。ずいぶん近寄ってから始めて顔を挙げた蓉子が、「あッ」と驚きの声を立てた。

「いややわ、黙って……おどかさつもり？」  
上目使いに見あげた彼女の切れ長な眼尻が少し赤みを帯びていた。

「まさか……長いこと来なかったね」  
「ええ……お話したいこともあったけど……兄が戦死しました」

浩はハッと息を呑んだ。眼尻の赧らんでいるのも泣き腫らしたせいであつた。また一人ここに身近かな殉難者があつた、と思うと、戦争が終つたことを單純に生への指標と見ている自分に対し、深く責める氣持があつた。  
「折角待っていたのにね、敗戦で、死んだ人も残った者も辛いなあ」

「ええ……」

涙を含んで、彼女の眼がしらがふくらんで来ていた。小野川広は沖縄作戦の特別攻撃隊員として戦死した。公報は一旦もとの住所に届けられ、そこで遺族の移転先を追つてこの町まで転送されて来たのが、丁度八月十五日夕刻であつた。暗然となり慰めの言葉にも窮している浩に

「是から何うしてんですの？」

蓉子が尋ねた。

「僕？ 僕、復学の手続きを取った。月ずえまでには神戸へ帰るつもりだ」

一瞬、息を呑んで蓉子は眼を見張ったが  
「ええわねえ、うちはもう帰るあてもない」  
しみじみと云った。俯向いたのでうなじが白く、震えているように見えた。

「けど、足からも田舎の方がいいんじゃないかなあ、食糧事情もだし、街には進駐軍が入



って来るしね」

浩は昨日読んだ週刊誌の記事を思い浮かべていた。婦女子が進駐兵に接するときの心がまえを説いた条りには、羞恥とも屈辱とも云いようのない感情が渦巻くようであった。

「そうだ、思い出した」

もうすぐ会えなくなる蓉子を、せめて一度は抱きしめてみたい、突然の衝動と戦いながら、浩は是から先、彼女に注意させるために池ノ下の農夫の言ったことを掻いつまんで話した。

「まア、そんなひどいことを……池の下で中年の農家の人に云えば、ああ知ってる、いやな奴、うちへ来ても変なことばかし云うの、食いものさえやりや都会の女なんか何でもない、とか……あの人の野小屋じゃ、泣かされた女の人があるか知れんのよ、それをまた自慢にしてるんやもの、うちにかて、ひろみの女に似合わん腰が厚い、だの何だの、口惜しいったら……」

唇を噛んで彼女は内心の憤りに耐えている風だった。眼が遠い山を見ていた。横顔が激しい苦悩を必死に耐えているような、きびしい線になっていた。言葉の継ぎ穂を失って浩も無言でいると、不意に彼女は

「浩さん」

低い声で呼びかけた。浩に向けた顔の半面が暗く、くつきり透った鼻筋がなおさら素直に見える。白粉も紅も付けず髪は引つつめていても、こんなに美しい娘だったか、とやや広く知的な感じのする額や、しっとりと滑らかな頬の線を彼は見つめた。

「いつ、いつ帰っての？」

「大体二十六日と決めている。復学の準備に一週間くらい見ておかないと」

「そう、じゃもう六日しかないのね……ね、浩さん、二十六日、朝の間にうちのところへ来てくれない？見てほしいものもあるし」

否と云わせないほど強い語気であった。その真剣な眼差しに浩は気圧されながら「勿論帰るまでに会いたいと思ってたんだ。きつと行くよ」

「来てね、それもその日の朝よ」

振り仰ぐように近づけて来た蓉子の顔の、眼尻にある小さい黒子が濡れているように見え、幾分は勝気さの表われている眼鼻立ちにはかなげな風情が漂っていた。

「じゃ、きつとね」

身をひるがえすように彼女は、そこだけが白い石段を、かけ下りて行った。

## 五

山峡の町だけに、旧盆をすぎると急に朝霧が深くなる。寺の石段から見おろす盆地は一面に、しろじろとした霧におおわれている。

町の家並みを出外れ大日山に登れば、霧の上ッ面が金色に輝いて見えるほど陽が射しているのに、町は水底に沈んだような姿なのが常であった。霧が深いと風も消えてしまうけれども、よくしたもので水滴の保つ冷氣が涼しく身にしみる畦道を、足を濡らしながら浩は歩いて行った。板張りにトタン屋根だけの崩れかけたバラックのような作業場と隣り合って蓉子が独り寝起きする小屋がある。一応板戸もあって錠前がかかるようになり、このごろの都会なら、もつと不自由な壕舎生活の人たちさえある時節だから、とにかく雨露をしのげる小屋とあれば、あながち惨めな暮らしとは云えないかも知れなかった。

「黙って去んでしまわはったら、怨み死にするか知れんわ」

冗談めかしながら、しかしハツとするほど凄艶だった先日の蓉子の瞳を思い出しながら、開いたままの戸口から覗き込むと、踏み込みが土間で、直ぐに低い床が板敷きになっていた。その上りがまさにボンヤリと蓉子の

叔母が坐っていた。  
「小野川君、いますか」



「ああ、お寺の学生さん、蓉子が……」  
咽喉を塞がれたように絶句すると、蒼ざめ

た顔がクシヤッと歪んだ。

「どうしました……蓉子さんが何か」

応えずに一通の封書が突き出された。紙質の悪い封筒にインクの滲む宛名が自分のものと判るまでに少し間があった。

「いま検屍が済んで……早まったことを……」  
封を切るのも忘れたように

「では……」

自殺か、と口には出さなかったが叔母は大きく肯ずいた。

「鎌腹を切って……」

驚きと同時に哀しみが込み上げ、浩は封書を驚づかみにするなり

「何故、何故そんなことを……」

唇を噛んだ。

「それ、読んでやっておくれやす、あてにはただ、野荒しやとまで云われて、生きていられん、とだけどした。警察への書きおきにも都会の女を米で釣っていやらしいことしたばかりか、自慢にもした男に、己れの悪事を棚に上げて盗人呼ばわりされた口惜しさ……」

「……」

「あんまりや、可哀そうに……」

叔母は鼻をつまらせた。



その朝早く遺書を載せた文机の前で蓉子は蒲団を二つ折りにした上に鎌を把って端坐した。柄に日本手拭を巻き付けると、一度膝の前においた。晴れ着に選んだ女学生時代の制服を思い切りよく脱ぐと、スカートのホックを外し、突き上げるように盛り上がった胸乳の上まで肌シャツを引き上げた。厚みのある胸乳から臍の辺りへかけてのトルソに似た体が剥き出され、静脈が青く透けて見えるほど淡いクリーム色の肌を露わすと、彼女は握り直した鎌の刃先を左の脇腹に押し当てた。

小さく緊まった唇もとの心もち厚い下唇を噛みしめたとき、円くなった腹を刃がグッと押した。さすがに手が震え弾力の肌が刃先を撓め返すように細かく揺れたが、それも一瞬で、ウムと声を押えた蓉子はズブリと刃を突き立ててしまっていた。と同時に彼女は前に上体を倒した。低く呻きながら体を起しつつ力一杯右へ引いて行く彼女の右手の動きにつれて、臍のすぐ下を鎌の刃先が真一文字に掻き切って行く。最初は真っ白に血の気の引いた切り口から、束の間に血が潑ねあがって溢れた。もう蓉子に苦痛の眼を宙に据え、額に冷汗を滲ませて憑かれたように刃を運ぶ。切り口を抑える左手が真っ赤に染まり、白

い腰のものも吸い込んだ血を滴らせていた。「ああッ」と呻いてホッと息を吐いたとき、浅いようではあったが一寸ほどの深さで、左から右へ腰骨の上ぎわの一番広いところを彼女はかき切ってしまった。喘ぎながら揃えた両膝の上で鎌の柄を横たえ、切先を立てると体を一旦反らすように起して、そのまま左の乳に当てがうように切先の上から全身の重みをかけた。血が、みるみる白い蒲団の上に拡がり、滲んで行った。

その血の臭いが立ちこめる部屋へ叔母が訪れたとき、もう蓉子の息は絶えていた。三通の遺書のうち警察に宛てたのを机上に残し、叔母は直ぐ警察へ電話したのであった。それから二時間して浩が尋ねて来たのである。

「おそかった」

浩は呻いた。彼女に注意を与えたことが、結果に於て彼女を殺すことになったのか、と浩は息づまるほどの悔いと憤りと哀しみの渦巻きに胸が痛んだ。

そのとき幼女が呼びに来て、叔母は「御免やしておくれやす、あんさんも、体、いとうておくれやすや」

会釈して立ち去った。無人の小屋をあとに浩は青田の中を池の堤へ途を取った。

いつ何うやって死なねばならぬにしても、納得の行く死に方を、と考え続けて来た浩が終戦と同時に更めて生きる途を考えはじめたのに、兄と共に家を立て直したいと希って来た蓉子が、にわかにみずからを亡ぼして行った。八月十五日を境に、生と死が入れ代った思いであった。

先ほど封を切ろうとして、読めば、人前で涙を流さずには居られまいと自制して来た遺書を浩は堤に上りつくなり披いた。紙の間からバラリと草の上に一葉の写真が落ちた。髪を美しく束ねた夏のセーラー服姿の少女像があった。豊かな微笑を知性的な表情に浮かべ年令よりは大人びて見えるその遺影は、急に深い感動を誘った。嘘のように少女は生き生きと微笑んでいる。この少女が今は亡い、それも身みずからを刃に伏して……

浩さん

兄さえ還って来たら……そう思って生きて来ました。その兄は夙くに死んでいたそれもこんな負け戦ならまるまるの無駄両親も兄も可哀そうでなりません。野荒しも仕兼ねん女やて悪態吐かれてここで死んで行く妾も、ずいぶんと可哀そうですけれど……。浩さんの居られなくなっ

たこの町に、居たくない、といって、何処へも動けません。働いたら女一人の口ぐらいぬらせても、住む部屋もない……そんなことなら、よし体はいま亡びても浩さんの心の中にいつまでも生きていたい、信子さんのように——。刃ものは嫌しかない、それを研いで貰うのに米を持って行きました。今の日本では、米がなければ死ぬことも出来ないですね。

くり返し読む文字が、浩の熱ばんだ眼にかすんで見えた。叔母や警察への遺書に残した無実の疑いへの抗議は、ここには見えなかった。そしてそこにこそ痛烈な反語に終る彼女の本心が書かれていると思えた。

彼女が死を決意したのは日本が敗けたからというのではない。信子が若し、日本が敗けたら腹を切ると云ったことを実行していたとしたら、蓉子と形の上では同じであってもその考え方が根本から違っている。信子は単純に、日本が敗けたら生きていくべきでないと割り切ったにすぎない。だから彼女が何処に居ようと、敗戦と知るなり腹を切っているかも知れない。然し蓉子はそうではなかった。生きられる限り生きて、日本が敗けようと敗けまいと、戦が終れば兄と共に小野川家を興

すことが目的であった。彼女の戦いはむしろ生活をその日まで維持することであった。やがて、彼女の生き甲斐に寛との交渉が加わった。神戸に居たことのあった二人の、他郷での偶然な出会いが共感と呼んだ。いつとなく彼女の心に思いがけない浩への親近感が生れていても、不思議ではなかった。それは程度の差こそあれ、浩にも同じく持たれた感情であった。ただ彼女には、終戦、兄の死と重なったショックに、浩がこの町を去るというところがまた更にショックを加えた。今や生きる希望となるものは何もないと思えた。

浩に遇いさえしなかったならば知らずに済んだであろう孤独感が、彼女の心の中で急速に影を拡げて行った。孤独の思いが死の誘惑に結び付くのは容易である。見たこともない信子という娘への意識されるほどではない嫉妬が、そこに心の影を増した。いくら浩が信子の倂を思っている、彼女の死の姿を見届けることは出来ないであろうけれど、蓉子自身はそれが可能なのだ。浩の精神を聞かされたとき、驚きと迷いの瞬間を経て彼女は、与う限り哀しく美しい死の相を遣いたいと考えていた。それが、言葉では表現の躊躇られる愛の告白を意味するのだということまでの計

算は、彼女にはなかった。誰にも理解されず窮死するよりは、浩の胸に刻み込まれたい、そう願ってさえいた。

彼女はとって、死は生の断絶にすぎないのではなく、浩の胸中に影像となって生きて行くことであった。それが、共感も理解もない人々の中に生活しているよりも、はるかに意味のあるように思えるのであった。こうした蓉子の心の動きが短かい遺書に伝えられる真実として浩の胸を搏った。

かつて信子の言葉を口にしたとき蓉子は、「信子さんて、浩さんが好きやったのね、何でもない、好きでもない男の人に、女の身で死ぬことを真剣には告げられへんもの」と云った、その言葉が浩の胸にマザマザと蘇って来た。

永い戦争の間に生業を奪われ父母を失い家を焼かれ、兄を亡くし、今またみずから命を断って行った彼女の心情を思いやり、一方、すぎ去って行った彼女の残像のあえかさに、浩は胸を絞め付けられるような苦しさ、辛さ哀しさを、心の底ふかく味わっていた。

熱涙にくもろうとする眼をしばたたくと、空も、水も青い、稲田も青い、生き生きと青かった。生命溢れるこの青さを、もう蓉子は



見ることが出来ないのだと、今更に蓉子の死を思うと、浩は膝を折りガバと上体を青草の茂みに投げた。草いきれに咽んだかのように咽喉がつまり、耐えた涙が溢れて来た。この暑さ、この光り、この青草を、ずっと遠い記憶から呼び起しているような、幻想に似た感覚の中で、あの蓉子の住居を取り巻く稲田の白いそよぎと淡いクリーム色の蓉子の素肌、そして、豊かに脂肪を堪えた彼女の腹を彼女自身が掻き切つて行く槍ましい光景と、それが彼の脳裏で現実と幻影の交錯となって動き続けた。

蓉子が、何故腹を切らねばならぬかは他にもっと有るんだ、浩は心の中で叫んだ。  
池ノ下の農夫の顔が浮かび、彼を神戸から追い出した町内会長の顔が浮かんだ。力一杯国のためと信じて戦った人々はい、しかし戦争を利用して同じ日本人を不当に虐げた人間たちの顔が、白昼夢のような幻の中で憎々しく嘲笑っていた。蓉子蓉子のバカ、信子信子のバカ、俺の、俺のバカ、本当に国を静かに愛していた愚かさを、然し愚かしいだけにその純粹さを彼は噛みしめた。俺は死なないぞ、浩は呻いた。

亡びない、美しい、清らかな国のイメージが今は崩れ去っても、またやがて新しい形で生れて来る。それまで俺は生きる。学生として医師として、そうすれば俺の生きる限り、俺の胸の中に、いつまでも蓉子も信子も生きてるんだ。二人の少女の倂を幻影の中に浮かべながら、浩の涙が慟哭に深まって行ったとき、陽は真上からこの山すその池の堤に照っていた。彼の背後に広がる野づらは、過ぎて行った大きな戦いの影も射さない、晩夏の浮い青に静まり返っていた。

(終)

# 「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

A1	五十組五十枚	四、〇〇〇〇円
A2	四十組四十枚	三、〇〇〇〇円
A3	三十組三十枚	二、五〇〇〇円
A4	二十組二十枚	一、七〇〇〇円
	十組十枚	九〇〇〇円
	五組五枚	五〇〇〇円
	一組一枚	一五〇〇円

A5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A10	全裸後手高小手	(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし	(長野)
A12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A13	うねる緊縛裸身	(長野)
A14	色禪の開股しほり	(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A17	正面アグラしほり	(長野)
A18	正面大の字開股縛	(長野)
A19	遅ましき裸しほり	(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A23	両手膝下しほり	(関谷)
A24	疼れんする裸身像	(関谷)
A25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢	(梨花)
A28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A29	投げ出し全裸縛	(長野)
A30	捕らわれの全裸縛	(梨花)
A31	羞らわいの全裸縛	(梨花)
A32	猿轡の両股縛	(大塚)
A33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A34	盛り上る乳房縄目	(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A40	くさり乳房責め	(長野)
A41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A44	手吊りパンティ落	(梨花)
A45	白バンド後手吊り	(東浦)
A46	豆絞り高小手呻	(梨花)
A47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A49	亀甲本縄股間縛	(桜井)
A50	立木縛竹棒責め	(桜井)

## 妖異女斗美八景

佐藤健児

## 第六景 新編笠松峠

## 配役

鬼神のお松……嵯峨三智子  
 稲妻のお竹……中尾 ミエ  
 風のお梅……高石かつ枝  
 照 葉……鰐淵 晴子

「女首領、たいへんなことを聞きましたよ」  
 今や情夫の黒尻峠の山賊、雲井隼人と酒宴の真最中の鬼神のお松のそばにすり寄ったのは、彼女の片腕の風のお梅、女賊とは思えぬ眉目美わしい少女である。

「何よ、お前としたことが、あわてくさって役人でもおし寄せたのかい？」  
 そういうお松も噂にまさる絶世の美人。酒

に酔ってポツとした上気した目のふちが、その美貌を一層なまめかしくしている。

「はい、それならまだようございですが、おかしらを仇と狙う小僧っ子が、麓の荒屋に立ちよったそうです」

「え、妾を仇と？」

「わっははは……これは近頃勇ましい。鬼神のお松を仇と狙ってのり込んでくるものがあるとはな」

盃をかたむけながら大笑する隼人。

「笑いごとではありませんよ。人のことと思つて——こちらはこの首に関することですよ」と後れ毛のまつわっている白く長い頸すじにさわって見せて

「そりゃあ、わたしもたくさんの仇持ちだろ

うがね。実際に仇呼ばわりされちゃいい気持でない。わたしもこれで、お父さんの仇を討ったんだからね。で……何という名前かお聞きでないかい？」

「それが何か、夏目とか」

「えっ、夏目——」

物に驚かぬお松が、ハッと顔色を変えたのである。

「何だ、その小僧、お前知っているのか」

「いいえ、だが、あの夏目に子供があつたのかしら」

と今度は襟のなかに顎を深くうめて考え込むお松。やがてつぶやくように

「とすると、時雨丸を奪い返しに」

「なに、し、時雨丸だど？」



隼人の方が大声を出してキツとなった。

「そうだよ、お前さん、お前にあげたあの時雨丸、あれは夏目から奪ったもののさ」

「フーム、するてえと、その小僧は、お前の親の仇の夏目三郎四郎の小せがれだということだな」

「夏目に子供があるとすれば、妾の首と時雨丸をとりにくるのも当然ともいえるねえ」

「な、なにをのんきなことを——。いや、おれは金輪際時雨丸は渡せねえ。それにもまして大事なお前を殺されてたまるもんか。すぐにも小僧を見つけだして、叩き斬ってくれるわ」

「有難うよ。わたしだって首と胴との泣き別れは御免だよ。やっと苦勞がみのって親の仇を討ち、あんたという人が出来て楽になった所だもの」

「それなら早く手配してやつつけよう」

「お待ちよ。それにしても変だねえ、この音に聞えた山寨に一人でやってくるなんて余程の腕自慢なのかしら」

「えーい、じれっつい、仇討ちの小僧っ子のこと、お前はいやに仏心や浮気心を出していけねえ。ぐずぐずしていると、それこそとり返しがつかねえ。向うもここまで来るに

や、それだけの用意があらあ。おれが手配するから、お前はここに落ち着いている。野郎ども、小僧探しに出発だ——」

「合点」

バラバラと立ち上る子分ども。

「お待ち！」

途端に凜としたお松の声がとんで

「はばかりながらここは笠松峠、鬼神のお松の縄張りだよ。お前さん達の手を借りるにしても、采配は妾にふらしておくれ」

「うーん、さすがは鬼神のお松、こりゃあ参った。しかしあの時雨丸はおれの命、めっからないでくれよ」

「ホホホ、細工粒々、お前さんに心配はかけませんよ。お梅、一寸耳を——」

お梅を呼んで何やらささやくお松。

彼女の父は安達太郎といって、この安達太郎山一帯の山賊の首領、もともとは白河藩の武士であったのだが、落度があつて切腹になるところを脱走して安達太郎山の奥深く隠れた。白河藩は何度もここに追手をつかわしたが、安達太郎は山賊を部下にしてここにたてこもり、そのたびに追手を撃退した。

しかし遂に奇襲を用いて山寨を攻略し、安達太郎の首を挙げたのが夏目三郎四郎であつ

たのだ。その時乳母とともに逃げのびたお松は十才の幼女であつたが、父の恨を忘れがたく、人について剣を学び、夏目三郎四郎をつけ狙うこと十年、望みかなくて所も同じ笠松峠で、三郎四郎の通行中をだまして道ずれとなり、不意打に殺して仇を討ったのはつい去年のことであつた。しかし、その時衣類もろとも奪った刀がたまたま、安達太郎を討った褒美に主君からの拝領の名刀であつたことから、これをとり返さねばお家断絶とあつて、その子仙太郎が仇討の旅に出たことは知らなかったのである。

その翌日の夕刻、笠松峠の上り口の松の根方に腰かけている旅姿の前髪若衆があつた。と、下から急ぎ足に登ってきた、これも同年輩の美少女一人。若衆の姿に気づいて、しばらくいぶかしげに眺めていたが、やがてなまめかしい風情で近づくと、玉をころばすような声で、

「もしお武家さま。あなたさまはこれからこの峠をおこしになるのでございますか？」

と言う。少年武士も落ち着いた態度で、

「いかにも、今夜のうちに越えるつもり」

「さようでございますか。まことにぶしつけながら、妾も急用でこの峠を越えねばなりま

せぬ。しかし女一人の夜道、心細く思つて居りましたところ、どうぞお連れになつていただけませんか？」

「それはお困りのこと、差しつかえなくば同道致そう」

スックと立ち上った武士は

「有難うござります」

と頭を下げる少女に向つていきなり、腰の大刀を抜く手も見せず斬りつけた。

「な、なにおなさいます」

いいつつも、見事に飛びすざつて、少女はキッと懐の懐剣の柄に手を掛ける。

「ハ、語らずとも知れるその心得ある構え、汝こそ噂に高い女賊鬼神のお松であろう。察するにそのようなだまし言葉で、わが父三郎四郎を刃にかけたのであろうが、この仙太郎はそうはいかぬ。いざ親の仇、その首申しうける故、覚悟致せ！」

言われてその美少女は驚くと思ひのほか

「ホホホ、血迷うたか夏目仙太郎、口ばしの黄色い小僧っ子の分際で、仇討ばかりは片腹いたい。所も同じ笠松峠で、父同様、返り討ちにしてくれるから覚悟しや」

キラリ引き抜いた懐剣を頭上にかざす。

「おのれ、父の仇！」

斬り込む仙太郎。深山の名月を背景に珍らしい美少年と美少女の一騎打が展開された。

しかしさすがに復讐の意気に燃える仙太郎の鋭い切先に斬り立てられた少女は、隙を見て身をひるがえして逃げ走りながら、ピーッと吹く合図の笛。と松の木蔭からバラバラと現われたのは、いずれも屈竟な男ども。

「小僧！逃げるなッ」

四方から襲いかかる。仙太郎もそのくらいは覚悟していたと見え、恐るる色もなく斬り廻る。その手並は少年と思えぬ程。四人、五人と斬り倒した勢に、残るものが思わず身を退く間にまた少女目がけて駆けよる。その時

「待ちや、夏目仙太郎！」

凜とした声音とともに、先の少女をかばうようにその前に立ちはだかったのは、年も一つか二つは上と見えるが、背丈もスラリと高く、天女と紛うような年若の美少女。しかもたっつけばかまという凛々しい男装に、それと察してハッとした仙太郎

「ムッ、計ったな、汝こそまことの鬼神のお松であろう」

いわれて妖艶な笑をたたえた、ほんもののお松は

「いかにも御推察通り、妾が鬼神のお松、こ

の可愛い女は妾の子分のお梅というもの。そなたをおびき出すために妾の身代りになつてもらつたのさ」

「うーん、聞きしにまさる悪才に長けたやつしかしその方も名の聞えた女賊、小ざかしきまねをせず。尋常に勝負致せ」

「それはしれたことと言いたいところだが、妾はもともと石橋を叩いてわたる主義。刀で打ち合うのも面倒だから、お気の毒だが、これをくらつて往生なさい」

キラリ、ふところから取り出したのは何と舶来のピストル。

ハッと驚いてとびすぎる仙太郎。

「ホホホ、そこは泥棒さまの有難さ、武器はなんでもあるのさ。今日はこの長崎ものの性能調べに、お前が的になつておくれ」

「おのれ、卑怯だぞ。それほどまでに、この仙太郎がこわいのか。鬼神のお松の名がすたろう」

言いつつジリジリと間をつめて飛びかかるうとする仙太郎。お松はあざ笑つて

「猪口才、お言いでない。何であろうと、この山寨をくつがえそうとするものには容赦しないのさ。覚悟おし」

裏然と放つ一発！ パッと地に伏せた仙太



郎、すぐさま斬りかかろうとしたが、つづく二発目に左肩をかすめられてよろよろとよろめく。つづいて三発目、身をひるがえした仙太郎が崖から飛び降りようとしたが、時すでにおそく、弓なりに反った彼の身体が苦鳴とともにどーっと谷底に転落していった。

「お見事！」

どっと上る手下どもの歓声。お松は崖際によって下をのぞきこんだが、

「チエッ、とどめをさし損なった」

と舌打ちする。

「しかし、お首領、この深さでは万が一にも助かりませんよ」

と稲妻のお竹が云えば、凧のお梅も

「そうですとも」

と合槌を打つ。それでお松も安心したが、部下に勝鬨をあげて引き上げさせると、その夜は雲井の隼人を招いて、勝利の祝酒に酔いしれるのであった。

——〇——〇——

だが何ぞ知らん。夏目仙太郎は死んでいなかった。天運孝子に味方したのか、途中木の枝にひっかかって谷底に落ちるのを免れ、薦にすがって必死に崖を登りつつあったところを、運よく国元から彼を追って来た姉の照葉

主従に救われたのである。

照葉は昨年他国へ嫁いでいたが、父の非業な最期を聞いて帰国し、弟仙太郎が仇討の旅に出たことを知り、改めて夫の許しを得て屈竟な侍三人をつけてもらい、弟の助太刀にかけつけてきたのである。

手をとり合って喜ぶ姉弟。仙太郎は左肩にかすり傷を受けていたが、幸い軽傷で、手当てがすむと、加勢を得て元気づき、

「姉上、お松は私が死んだと思って油断しているし、今宵はきつと勝利の酒に酔いしれているでしょう。これこそ絶好の機会、すぐに山寨に斬り込みましょう」

と弟の身を案ずる姉をばげまし、山寨深く忍び入ったのを、神ならぬ身のお松は知るよしもなかったのである。

「お松に、ピストルを持たせては危険ですから、不意をついて使わせないようにしなければ」

仙太郎は一人山寨の内外を探って戻ってくると姉や男達を集めて

「もう男共は酔いつぶれていますし、お松は浴身ゆあみに出てピストルは持っていない様子、天の与えた機会です。私どもは山寨に斬り入ってお松の情夫雲井隼人をうちとり、ピストルを

奪いますから、姉上はお松に当たっていただきたいのですが、大丈夫ですか？」

「それは覚悟の前、仇のお松は妾が相討ちになっても倒します。お前は時雨丸を奪い返しておくれ。」

「もとより松村殿をおつけしますし、無理をせずに山寨に入れないようにしていただければ、そのうち私共がかけつけます」

「では首尾よう目的を——」

姉弟は互いに励まし合ってから二手に分れる。照葉は武士一人と山寨の裏手にまわって湯殿に近ずいてゆく。

それは谷川の流れをそのまま引きこんで沸かした露天堀りに近いつくり、一応の羽目板と屋根はあるが、立てば女でも乳のあたりから丸見えである。

それで稲妻のお竹を張番に立たせて、お松は湯槽の中に深々とその身を沈ませていた。

蒼白い月光が白い裸身をなめるように濡して、彫りの深い目鼻立ちの陰翳がこの世のものとも思えぬほど美しい。

「あーあ、今夜からほんとに枕を高くして寝られる。夏目のことは何か気になっていたのだけれど、これで片がついたし」

彼女はのびるだけのばしたおのれの女体の

非のうちどころのない美しくしさに満足しながら伸々と手足をのばす。

「これから準人との楽しい毎日が続くばかり、まだ妾は若いんだから」

むちちりと張った両の乳房を両手でかかえるようにしながら、うっとりとして両の目を閉じていた。

その時である。突如外にあたって、けたたましいお竹の声が彼女の耳にひびいてきた。

「おかしら！ 敵！ 早く用意を！」

同時に早くもチャリンと刃を合す音に、ハッ和我に返ったお松。そこは心得のある女として、女豹のように身をひるがえすと、衣類をひっかけ、くるくると帯をまいていったが、

「チッ、ピストルも刀も——」

酔った不覚から護身の武器を忘れた不運に唇をかみしめてあたりを見廻したが、開け放たれた戸口に、幸い鎖鎌が置かれてあるのをみてそれを手にとった。それはお竹の得物であったのだが、どうしたのか考える暇もなかった。飛び出した外にもう待ち構えていた敵があったからである。見ると月光を浴びて立っているのは、何とこれも月の化身かと疑われるような楚々たる美女、お松は何か夢を見ている気もして、頭を一つふって

「何者じゃ、そちは？」

と咎める。と相手の花唇が動いて

「そなたが鬼神のお松であろう。妾は夏目三郎四郎の娘照葉、無念の最期を遂げた父の仇を討ちにまいった。尋常に勝負おし」

帯の間にたばさんだ一刀をキラリと引き抜く。しかしその鋭い切尖以上に夏目という言葉

葉にグサリと胸をさされたお松は愕然と、

「な、夏目、というと、あの仙太郎の姉弟——」

「そうです。弟と一緒にのりこんで来た姉の照葉です」

「フン」

自分の気持をしずめるように鼻の先で笑ったお松は

「可哀想に、その弟は同じ妾の手にかかって谷底で死体になっているのも知らずに——そなたまで殺されに来ようとは」

と嘲ってみたが、動じもせぬ照葉から

「そなたが撃ったと思った弟は生きています。今頃は雲井準人を討ちとって時雨丸を奪い返しているはず。昔から悪事の栄えたためしはない。そなたもはや観念なさい」

と言いつ返されて

「な、なんと……」

脳天を一撃されたような衝撃に、さしもの鬼神のお松も足元をふらつかせたのである。

しかし次の瞬間には悪鬼の形相と変って

「もともと夏目の家と妾の家は仇同士。今度こそこの手で姉弟ともに討ちとって、禍根を絶てくれるから覚悟おし」

キッと鎖鎌の構えをとって、右手の分銅をブンブンとふり廻す。これに対する照葉も武芸の心得はあるから、小太刀をピタリと八重垣流に構えたが、もとより鎖鎌と対するのは初めてのことだから、その勝手わるさは心許ない。

松村という武士はと見ると、かなり離れた彼方で懐剣をかまえた稲妻のお竹と戦の最中で、助け寄る余裕はない。

「ヤッ、ヤッ、ヤヤーッ」

小太刀にとびこまれては危険だから、お松は遮二無二息もつかせず、分銅を打ちとばす。照葉も鍛えられた身体とて、はじめのうちには巧みに交していたが、死物狂いのお松の攻撃に反撃の隙を見だせず、後へ後へと退るばかり、全身早くも汗びっしょりの様子。一方浴衣をひっかけただけで素肌にとろろお松は躍動するたびに、両の太腿まであらわになって、何ともなまめかしい光景だが、今



はそんなことに構ってもいられない。

その時山寨の方に当ってさわがしい足音がしたと思うと、パンパンとピストルを放つ音がした。それは残っていた束のお梅がピストルを預っていたわけだが、お松に渡そうと隙を見て逃げ出したところを、夏目方の武士達

に見咎められ、それに向って発砲したのである。その音はお松の気も引いたが、その方に背を向けていた照葉は思わず後をむく。

その隙——すかさずビューンと投げつけたお松の分銅を、かわしかねてつい刀で払ったからたまらない。たちまちがらと刀身に

からみつく鎖鎌。

「不覚！」

と唇をかむ照葉、刀をひき抜こうとしたがもうおそい。ピーンと張った鎖のために右にも左にも動かず、ズルズルと前にひかれるだけ。ひかれまいとして渾身の力をこめて耐えようとするが、お松の力がそうさせない。

(しめた！)

ほくそ笑むお松の方は、左手で鎖を手繰りながら、右手の鋭い鎌を掲げてキリキリと相手のたおやかな首すじに狙いをつける。

まさに女郎蜘蛛の張った巣にかかった胡蝶の如く、身動きも出来ない照葉の運命は風前のともしびに似て、その細首をお松の鎖で掻き落されるのは時間の問題と見えた。

しかし、はじめから相討も覚悟の照葉は、この危急の場合にも、相手の動きをうかがう冷静さを失わなかった。

(そうだ、身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ)

何と思ったか両手に力をこめてぐいと刀を引く。やや心弛んだ虚をつかれて、タッタツと思わず前に引かれたお松があわてて、両足をふんばって引き戻そうとするその瞬間をパツと照葉が両手を放したからたまらない。

「アッ」

鬼神のお松

浴身すゝお松



悲鳴もろとも、力あまってダダーッと後ずさって尻持をつくとともに、ドシンと風呂場の羽目板に強く背を打ちつけてしまった。

そこへ飛鳥の如く飛びこんだ照葉がいつの間にか抜いたか懐剣を両手に握って、お松の胸板めがけ、おのれの身体ごとぶつつけるように突き込んだのである。

「ギヤーン」

この強襲に、さしも鬼神のお松もよけも交わすも出来ず、そのあらわになった雪の膚のみぞおちのあたりを、グサリと柄元まで十二分に刺し貫ぬかれて、絶叫とともに上体をのけ反らして虚空をつかんだが、やがてガックリと白い面を伏せて崩れ折れた。

「ア、ア、ア、ッ、おかしらが」

お松にピストルを渡すべく走り寄ろうとした冨のお梅は、この有様に一瞬立ちすくんだが、動揺したと見えてピストルを撃つのも忘れ、流れへ向って逃げ出した。だが。

「待てっ、女賊！」

その後へ追いつがったのは仙太郎で、先刻たばかられた恨みもあってか、容赦もせず一跳躍しながら、サッと横に払った烈剣があらやまたず、その勾うような首筋に当たったからたまらない。

「アッ」

と声にならない声を残して、見事に切断された愛らしい乙女の首は宙にとんで、胴体だけがドドッとおびただしい血を流出させながら五、六間も走って、ザブッと流れの中へ倒れこんだ。河原に落ちたその首を武士の一人がとり上げる。時を同じくして稲妻のお竹も遂に運つきたか、松村に組伏せられて、首を掻き落されていた。

「姉上、お見事です。よくも一人で鬼神のお松といわれた女を討たれましたね」

血刀を提げて走り寄った仙太郎にそうほめられて、流石にはじめて人を刺した興奮に呆然としていた照葉は、我に返って、お松の胸からグイと懐剣を引き抜く。流れ出る血汐とともに、お松は一旦前につつ伏したが、気丈にも懸命に両手に力をこめて起き上ろうとする。

その黒髪を掴んでからグイと仰向かした仙太郎は、右手の刀をかざして

「父の仇、鬼神のお松覚悟致せ」

その咽喉へ止めを刺そうとする。お松はその刃を右手で防ぎながら、苦しい息づきで「待って、待って、とどめは待って——」

「今さら未練な、その手で通れようとて今度

は許さぬぞ。」

「わたしも鬼神のお松、今更じたばたしないが、ただ一言、雲井の隼人は？」

「この通り首に致した」

後から武士の一人がさし出す隼人の生首

「では、時雨丸も」

「もとより、奪い返したわ」

「そう、それでは完全なこちらの負け。仇のお前達に討たれるのは口惜しいけれど、妾までこの通り小娘に殺られたのは運のつき。いさぎよくこの首はくれて上げますさ。その前に隼人や子分達とお別れをさせておくれ」

流石にお松、悪びれたさまも見せないの「仙太郎、最後の望みかなえておあげ」

照葉の言葉にやがてお竹とお梅の二つの首もお松の前に並べられた。生きたまま首を刎わられたお梅の方は、両方の目も口もポカンとあけたままのあどけない表情。これに反してお竹の首は無念そうに後れ毛をかみしめている。

「変り果てた姿におなりだねえ。多くの人を殺やめたむくいだろうけれども」

三つの首の前に合掌するお松の眼からスーッと涙が流れる。しかしすぐに首を振って涙を払うと



「さ、これで思い残すことはない。スッパリやっておくれ」

傷の痛みをこらえながら、浴衣の襟をおしひろげて首をさしのべる。こういさぎよくされてみると、いまさらながら、その凄艶な美しさに、仙太郎も心鈍ったが、長く苦しませてと刀を提げて後へ廻る。その顔を振り仰いでお松は

「お情けついでにもう一つ。妾はあの時雨丸とはよくよくの悪縁。あの刀で引導渡して下さいな」

仙太郎はまたも躊躇したが、姉の目くばせに、武士から時雨丸をうけとって

「望みに任せよう」

キラリと抜き放った刀身をお松の前につきつける。目を細めてその美しい鈍に見入ったお松はニッコリ笑って

「こんな名刀の錆になるなら本望、いざ」

と合掌して首を垂れる。その後へ廻り、時雨丸をふりかぶった仙太郎は、黒髪の生え際からなだらかな両肩にかけて形良くのびている白いうなじにキラリと狙いをつけて

「エイッ」

気合もろとも一颯ノ ヒューッ和白刃がくびれの深い美女の顎の下を擦りぬけたと見え、次の瞬間、端坐しているお松の身体にはも

う首がなかった。腕の冴えと刀の斬れ味が相

まってか、ほとんど音もなくその首は大輪の花が落ちるよう大地に転がって胴体はしばらくそのままの姿勢でいてから、やがてゆっくりと前に倒れ、河原一面を血潮で染めた。

鬼神のお松にふさわしい最期といえよう。

照葉の白い手で拾い上げられて、高く掲げられ、月光に照されたその死顔も、覚悟して討たれたためか、お竹やお梅のそれとは違って、涼気を払ったような美しくさだった。

「おめでとうござります」

「それにしても、流石名刀の斬れ味、おどろき入りました」

口々に祝福を述べる武士の言葉をうけて

「細い女の首といいながら、おそろしいほど軽い手応えであった。なるほど名刀は違うもの、これで斬られることを望んだお松の気持ちもわかる。地下の父上にも喜んでいただけたうし、永く家宝とせねばなるまい」

としみじみ美女の血を吸った時雨丸に見入る仙太郎であった。

かくて笠松峠の仇討はめでたく終り、雲井隼人とお竹とお梅の首は峠に曝され、姉弟はお松の首のみを携えて故郷へと戻っていったのである。

(第六話終り)

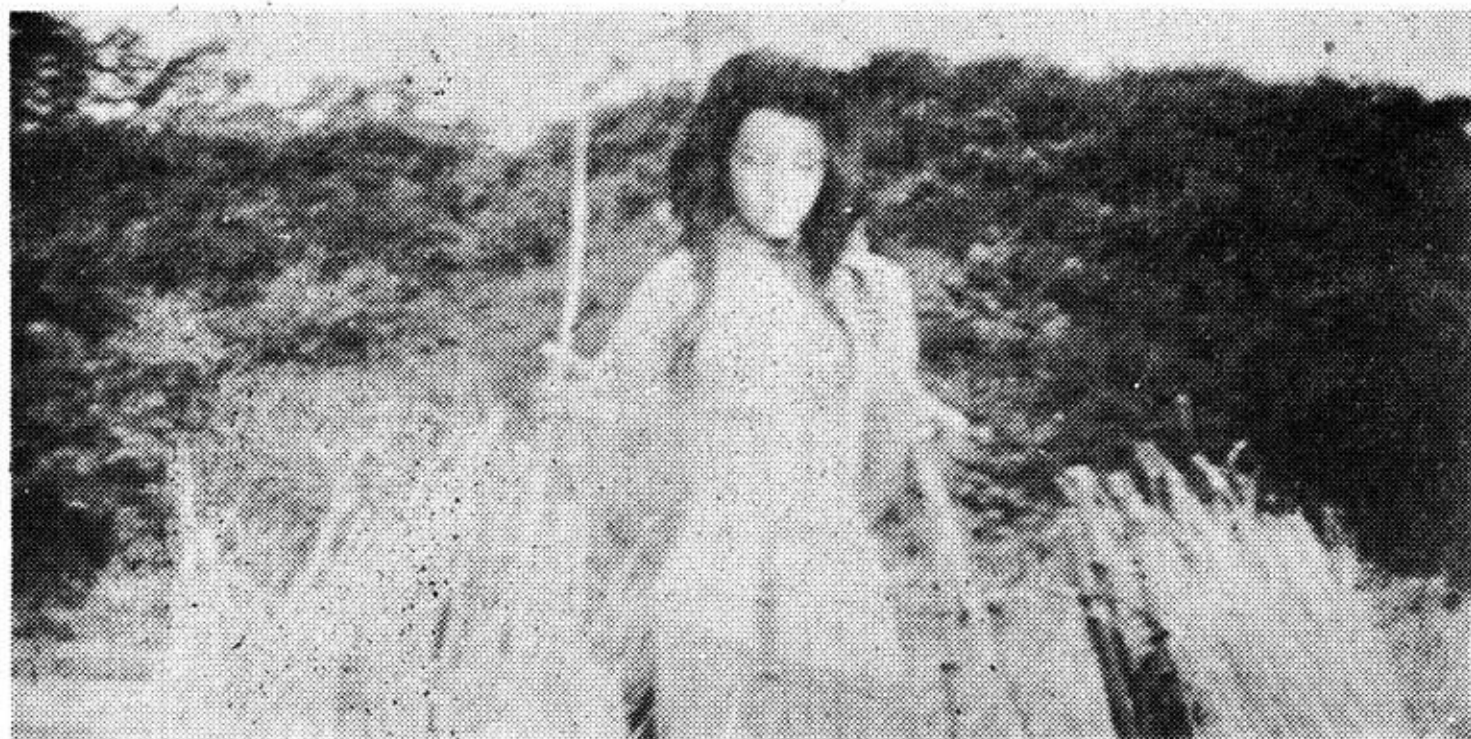
## 緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

### 臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を 定価一部五〇〇円(送共) 略号(文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女体切腹、女体浣腸、フェチ、女斗美、女相撲、とあらゆる趣向を網羅した本特集号は、今後二度と発表できない特殊文献を集録しました。◎文字通り「文献誌」としての真価を発揮しました本特集号は、発売以来マニヤの方

々の座右の宝典として非常な人気で書店の店頭から姿を消してしまいました。特に直接申込用として発行所に確保しました分がございしますから、未見の方は何卒この際略号(文献)とお書きの上、お申込下さい。一部定価五〇〇円(送共)です。



## 『拷問映画を観る』

牧 高 志 文・画

昔からの言葉によく「本書の前にかかる出版本無く、また本書の後にまた出版されることなし」とか千載一遇空前のチャンスなどと甚だオーバーな物の云い方で人心を攪乱するキャッチフレーズが結構世間に、はびこっているが、つい先頃封切られた拷問映画「日本拷問刑罰史」はどうやらその部類に入りそうな映画である。

開幕のタイトルが消えると矢庭に武将の串刺の処刑が映し出され、最後は幕末勤王の志士や芸妓の首を斬り落として漸く「完」となる文字通り阿鼻叫喚の、それこそ輪をかけた話し振りをするなら、男性もさることながらすべて女、女、女のこれでもかこれでもかと責め折檻される苦悶の声に押しつぶされて、観る方の耳がジーンと痛くなる壮感さであ

る。

実は私は、それを幸か不幸か（事もあるうちに）前後左右をもらもろの女性に囲まれてこの映画を観た挙句、観終って、いや早や何とも批評の出来なかった者の一人であるが、それというのも映画の常套であるストーリーが全然織り込まれていないこと。全巻を通じ熱演した俳優諸兄が一流の映画会社の如き美男美女の群でなく、失礼な云い方かも知れないがセリフ、扮装のすべてがドサ回りの田舎芝居そっくりであったこと。台本となったその道の権威者である名和弓雄氏の考証は真実誠であろうとも小森白（元新東宝監督）氏の監督振りが必らずしも微に入り細に入ってものは参らず、勿論、氏は映画そのものを残酷に描くというよりは寧ろ当時の役人の阿呆



らしさを誇張してみたいと云っているが……  
 そのためでもあるまいが、早い話が木馬責めに使う重しの石が張りボテの石であったり、キリシタンの逆さ海中責めが一部人形であったり、駿河責めの女が赤い湯文字の間から白いパンティをチラチラのぞかせたりする不手際が観客の前に映写されたのである。

しかし私は、昔日本で行われたという書物上の史実を何んら憶することなく敢然と現代の今日に映画化したというその敢闘精神に対しては何んとも頭が下るし、高く買わるべき映画だと思う。云うべくして一朝一夕仲々為し遂げられる業ではない。またそれだけにもう少し慎重に演出して貰いたかった処も今思うと多いのだ。

兎まれ、席を同じくし一緒に観覧の栄を得た女性側によも山話を聴いてみることにする……。

「どう？ 一国一城のあるじが、落ち目になるとその腰元達までが森の中で敵の雑兵どもに強かんされるというシーンは？」

「ウフン、仕方ないでしょ、女ですもの……」

「許して下さい、痛い……なんてセリフを吐いたネ」

「大かた逃げる時にスネ坊主でもすりむいた

ンでしょう」

「殿さまと奥方と幼い息子の三人が砂の中に埋められて巨大なノコギリで首をもがれる処は寧ろグロかな？」

「皆んな笑ったわ、オーバーよ」

「じゃ、蛇責めのシーンは？ あの無名の女優さんは真に迫っていたじゃないか」

「嫌らい、エロよ。女の人の両手を一文字に竹ざおで縛っておいて、お腹や脚に蛇をはわすな……」

「まあ、しょうがないさ、蛇責めは昔からそういうことになっているんだから。それじゃ今でも物好きな人が秘かに作っているという木馬の責めは？」

「天井から女の人が吊るされて次第に三角馬の上へ降ろされてくるでしょう、そして木馬に乗った瞬間、まず悲鳴を一声あげて次に両足に重しを吊られてまた二度目の悲鳴をあげるところ、一寸頂けそう」

「初めて感心したネ、だけど場面は少々暗かったし、肝心の女の表情もよく見えなかったぜ、ここで親切心を出すなら木馬責めのあと、ずっとそうなんだが登場の女はすべて厚手の腰巻をすべきだったネ、薄手だからすぐ悲鳴をあげるんだよ」

「江戸時代にネルみたいな厚手の湯文字があったかしら？ 無理だわ。」

「どうも結論を出さずに、このあたりでそう云っちゃ悪いけどさ、こん度的場合折檻と拷問の場面は、まるで初めから約束でもしたように女は湯文字一枚姿が多かった。それは甚だいいんだがあの湯文字がぐっと近代的なんだから面白い。つまり白い腰布に紐付なんだ。美学のバランスから云うと日本の女性の肌色は黄白色なことから白い腰布でまずコントラストをつけて紐でキリリと締め、その下部に真紅の布がもえるといった配色の妙は、歌麿の絵には無い筈だよ。してみるとわざと衣裳係の人が考証抜きに女優さんに巻かせたのかなア？ こんなミスは寧ろ嬉しいネ。」

処で、この映画のアクセントをつけるのに大きな役割を果たしたのは、いわゆる『語り手』によって奏でられた名調子……仲々重く正しいが非常に印象的なものがあったネ。

それはあの火あぶりにされるシーンさ。大した火事でもないのに火付けの罪人にされ真の放火人であるお嬢に代って、拷問また拷問石抱き責めの挙句、意識が一段と朦朧となつた処でお前が火をつけたんだネ、そうだなアウム、お上にもお慈悲がある。で自白が明瞭





となり、許される処か逆に白の肌着に赤いお腰巻をしめた姿で荒縄で後手に縛られ裸馬で原っぱの刑場へ――。

「拷問のすえ、本人の知らぬ間に火付けの罪人とされ、裸の馬に乗せられて、泣く泣く渡る涙橋……」

このシーンはまず圧巻だったネ  
「お好きネ、それ程でもないでしょうに。本当に火をつけたなら、あたしだって火焙りになるワよ。」

「馬鹿をいっちゃいけない。何故ならいくらアフレコだって山のように積まれた薬や薪にパッと火をつけられて絶叫する女の悲鳴で、君達のうち誰かが反射的にワァーといったじゃないか。まァいいや、映画だからまけておきましょう。」

「強盗夫婦が捕まって番所で折檻され、駿河責めっていうの？ それを受けて最後に丘の上で磔にされる処一寸残酷ネ」

「女を槍で刺すあたりはまァ無難なんだが流れてくる血潮を腰の藁束で拭く処で観客席で、ひとときわ笑声が

上った。あまり史実に照らしてもっともらしく演出すると逆効果になる証拠だ。戦後のお客さんはこの点一寸手強いかも知れない。」  
「さて、そのあとは何んでしたっけ？」

「どうもこう盛沢山だと思ひ出すだけでも骨が折れそうだ。三段斬りという奴があった。

「淫婦め……」といったから本当に淫婦なのだろうが若い女がやはり白の肌着に赤い湯文字をしめたまま松の木に吊るされ二、三回ゆっくりと回転しているうちに頃合いをみてエイッ……とばかり胸から下を斬り棄て反動で首が下に向いて吊り下がった処を今度は首を斬り落とす、このあたり人形を使ってうまくトリックが演じられていた。

この女優さんも後手のまま吊るされて御苦労な話だったが、この映画の締めくくりは、つまり山場は何んといっても一等お終いの打首のシーンだろうと思う。芸妓になった女優？ さんのフェイスが頂けないなら私はあのポツテリした肉体の方を買うよ。ポチャポリヤッとした身体を鼠色？ の囚衣で包み荒縄で両手を後手に縛りあげられ、また首にも縄をかけられて乱暴に非人の手でコズキ廻わされて首の座に曳き出されてくる。この場合は打首になる女よりもポロポロの着物をまとい



たアバタ面の非人の役が非常にむづかしいんだ。

名和氏の文献によると藁でくくった半紙の目かくしをした女を血溜穴の前に敷いた藁の上に坐らせると手伝い人足の非人が腰の小刀を抜いて首にかかった縄を切り棄てる。別の非人の手で女の着物を襟のところから剥いで肩と上膊までを露出させると同時に首を前に差し伸べさせるために女の両足のおや指を強く後方に引く……と女の身体は血溜穴の方へ

のめるように傾くとある。このあたりはよく出来ていたネ

「何んだか一寸怖いみたい……」

「そこを山田浅右衛門がヤァッ……と」

「びっくりした、もうよしてよ、背筋が寒くなっちゃった」

——というような訳でこの映画は無事終っちゃったンだけ、さて一体あとに何が残るだろう、有形的なものが無ければ無形的なものとなるのだが、もともと筋が無い映画であると

断つてある以上、イメージだけじゃつまらない。

「教えてあげましょうか、男性の方は耳の穴をかつぽじってよく聴いて頂戴。あのネ、あたし達あんな風に縛られて殺されて見たいのよ。江戸時代ってよき時代だったわ。ホホホんとの話——御免なさい。」

——ご紹介まで

(おわり)

臨時増刊号……愈々残部僅少……

## 悦虐小説と悦虐写真特集号

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての「悦虐小説」の傑作をすべて網羅して、本特集号の第一集から第五集（但し第一集、第五集は残念ながら売切れしました）までの五冊に収録いたしました。従って、「悦特」の五集によって、当時の代表的なS小説をごらんになることが出来ます。更にグラビヤ口絵としては、華麗な緊縛女体を、ふんだんに掲載しました。未入手の方は是非この際お求め下さるようお待ちいたします。

第一集「女体緊縛特集」（売切）

第二集「悦姿態特集」定価三〇〇円 略号「悦二」

第三集「嵐を慕う蝶」定価三〇〇円 略号「悦三」

第四集「拘束美態特集」定価三〇〇円 略号「悦四」  
第五集「緊縛風景一二〇態」（売切）

### 最近刊行本誌特集号限定版案内

○臨時増刊「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号（文献）

○臨時増刊「花と蛇」小説、絵画、写真、特集号

定価 五〇〇円 略号（花）

○限定版「美しき縛しめ」第三集

頒価一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版【豊満と清楚】写真集

頒価一〇〇〇円 略号「限二」

隆  
● ●  
● ●  
● ●

「ハハ、今頃になってそれが分つたのかネ。



ボクなんか、それで今迄どれだけ莫迦莫迦しい眼にあっただかしれやしない。編集で猫の手も借りた様な時、どうして知ったのか、突然何の前触れもなく訪ねて来てね。坐り込みだよ。散々ねばって、あれこれ見せてくれ、話してくれ、紹介してくれと頑張っただけ、夕飯まで喰わせて、ハイ、さよならだ。あとで礼状一枚来ない。まあ、それはそれ、これはこれだ。どう、行くのかい行かないのかい」

「久し振りだ。勿論行くがね」

私は心にもなく一寸渋って見せたいが、その実、竹野ひろ子には、逢って見たい気持ちしきりだった。

箕田氏と別れ、私は分厚い手紙の束をバッグに入れ、その足ですぐ公衆電話に歩いた。

午後五時からなら、いいという彼女——時間は午後四時に少し前だった。彼女より連絡のあったダイヤルを廻す。交換手が出て、すぐに竹野ひろ子の勤務する課へつないでくれた。

「もしもし竹野ですけど……」

稍ハスキーな声。忘れもしない彼女だ。

「辻村ですよ。久し振りだね」

「えッ？ 誰方？」

よくききとれなかったらしい。

「ツ・ジ・ム・ラ。分った？」

「あっ、辻村さん、突然で誰かと思いましたわ」

「出て来られる？」

「え——、ええ、何処へ？」

「何処でも……、君の都合いい処でいいよ」

「じゃあ、ミナミの松竹座の向いの、喫茶Uで——五時半——」

「いいよ、ではその時——」

私はそれで切る。社内交換手のいる会社では、努めて余計なことは喋ってはいけない。彼女達は、電話の主が男性で、社内の女性にかかってきたとなると、軽いジェラシーから、得てして盗聴し勝ちだから……。

何か甘い期待と昂奮が私の胸をよぎった。

けれど今日の私は手ぶらである。私の公用書類と、彼女への手紙以外は——。

× × ×

大阪一の雑踏の此処は、暮れてネオンも赤く、どよめいていた。私は喫茶の奥まったボックスで、余りうまくないコーヒーを啜り乍ら、竹野ひろ子の追憶に耽る——。

三十六年の十一月号の読者通信で、彼女は初めて登場し、しかもいきなり私に呼び掛けてきた。

（辻村様——、是非私を一度責めて下さいませんか……。二十三才、洋装店勤務）

十二月号で私は『おしめカバーガール』として竹野ひろ子の緊縛記を載せた。続いて翌三十七年の一月号に『続緊縛記』掲載し、古川裕子に陶酔する彼女のイメージを、私なりに書いてきた。そして彼女はそれきり姿を消し、再三の呼び掛けの便りにもかかわらず、ついに返事はなく、あきらめかけた頃、ミナミの大劇の前で、見知らぬ青年と肩を並べて歩く彼女を発見し、声をかけたが、最早ひろ子は路傍の人になりすぎたのである。

空白の二年——、そしてひろ子は、何の前触れもなくいきなり茲に登場しようとしている。私は彼女の嗜好を充分に満してはやらなかった。私自身サジストであれば、所詮、緊縛に走り、彼女の望む、おしめカバーやレインコートの、あのヌメヌメした飲びにひたすら事は出来なかったように思う。恐らく二年前、彼女は幾分の不満と、充たされぬ思いで私の前から姿を消したに違いない。若し再び私に機会が与えられるならば、今度こそは心ゆくまで彼女の嗜好を満たしてやらねばなるまい。それが仮に私の好みに合わないとしても——。

私は彼女の投稿からにじみ出る、その行間の、そこはかなき願望を反芻していた。ぼんやりと物思いに耽る私の視界に、華やかな色彩が揺れソフトな匂いがただよった。ハッと私はさめる。

「お待ちになった？、実にお久しぶりね」

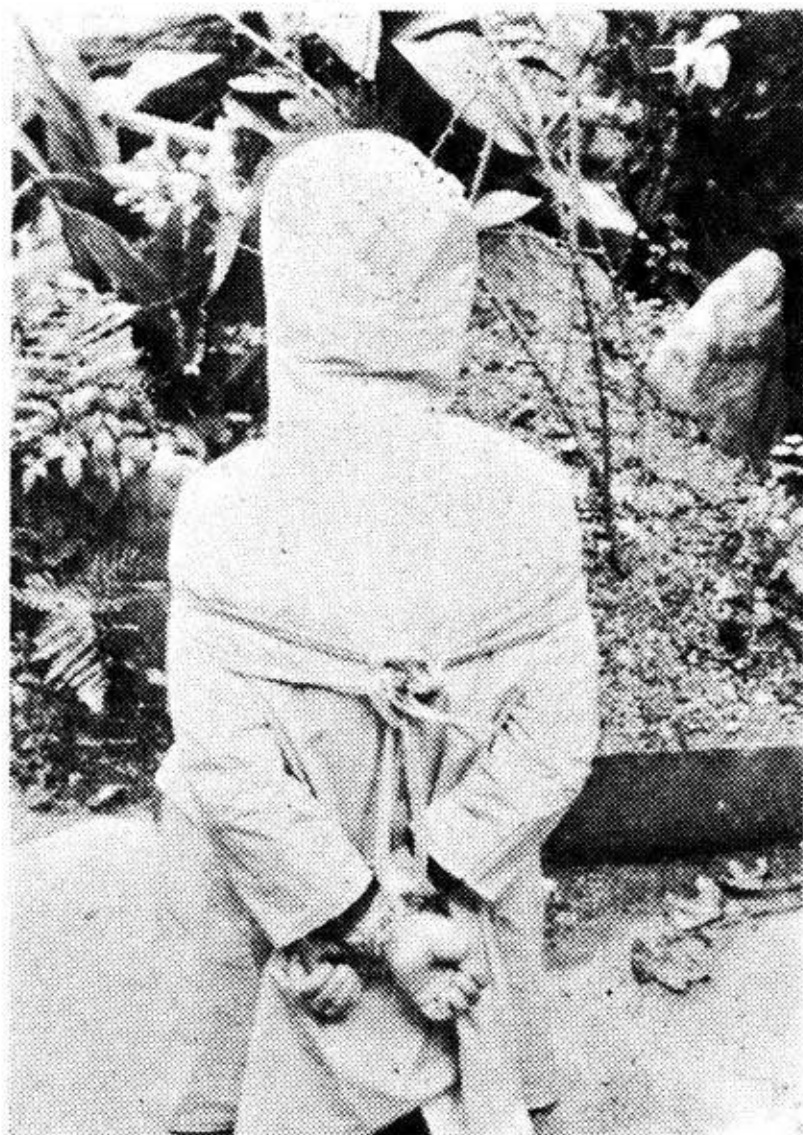
ハリのある、ハスキー乍らしみ通る綺麗な声だった。切長の眼、稍理智的にはった顎広ひたい——。そして更に洗練された美容——。あるかなきかの眼限。二年経って、彼女は更に美しさに磨きがかかっていた。

「何から喋べろうか。言いたいことだらけだが、まあよう。君の投稿の反応の大きさがこれだよ。まあ読んで見給えよ。君が悪戯っ

気を出して、あんな文を書くもんだから、善良なる奇クの紳士諸君は、本気で君を求めているよ。一体どうするんだい」

私は冒頭から、稍なじる口調になった。

「まあまあ、そう仰有らないで、私だって、本当にいろいろの事があつたんです。あれ（



本を指す）に書けないことがもっと——。けれど、近頃かえって気分がラクになったわ。クヨクヨしていたのが莫迦見たい。まあ読ませていただくわ。随分あるのネ。これ皆私に——」

そう云って、竹野ひろ子は、かなり早いテンポで、次々と読み出し、封筒の裏書の差出人を見ては、遠いわね——とか、一寸怖いわ——とか、まあ結婚してくれだって——とか独りつぶやいては、結構愉しそうに読み進んでいた。

「もらっていいの、この手紙——」  
「君宛だからいいけど、気に入ったのがあるの——」

「さあ、突然で、思考力空廻り——。ゆっくり寝床に入って、もう一度読み直して考えることにするわ。で、辻村さんの用事ってこれだけ……」

竹野ひろ子は、何かを期待していたのか、茶化すように私に聞いた。

「それだけといたいたいが、君の顔を見たら、唯で済まなくなった。何か当てにしてもいいの？」

「フフフ……」

ひろ子は小さく笑うと、意味ありげにコーヒースプーンで掻き交ぜた。この謎めいた微笑は何だろう。

「あのネ、辻村さんは縛るだけでしょう。もっと、私の気持わかってほしいの。本当は誰より一番話し易いのだから。」

「気持——？ ていうと？」

「書いてたでしょう。例えば、ええ、例えばの話よ。私がおしめカバーして、辻村さんと一緒に心ブラする。どこかで御食事して、私はビールをのむのよ。それでおトイレへはゆかない——、いやッ。みんな言わしてしまう



んだもの……」

「面白い着想だ。私は君を縛る事を一寸忘れよう。その着想に邁進するよ。」

「大層ねえ——マイシンだなんて……」

竹野ひろ子は頬を染めて明るく笑った。私にフト或る計画が浮んだ。

「君、おしめカバーもっていないの、今日」「羞かしいけど、もっているわ。ちゃんと。」

どう準備いいでしょう。この中よ。」

竹野ひろ子は少々大きい目のハンドバッグを叩いて見せた。

「よし、じゃあ早速実行だ。メシを喰いに行こう。いいことがある。」

腹をきめると、湧然と、或る種の興味が私に湧いて来た。

連れ立って、人混みを避け、社用でいきつけの料亭Fに私達は急いだ。歩いて也十分足らず。御堂筋を渡って、湊町駅近くのFに私達は靴をぬぐ。

一品料理とビールで、お互いの健康を祝して乾盃した。ひろ子は女でも、少しはイケる方だったが、のみっぷりが鮮やかだ。大分訓練をつんだらしい。

仲居に遠慮してもらうと、私は切出した。「さあ、お約束通り、おしめカバーをつけて

見たらどう。ここでもいいが照れ臭かったらトイレでどうぞ。さあ早く……」

一瞬、ひろ子は思いとまどった様だったが、頬を染めて、私を凝視すると、

「本当なのね、いいのね。じゃあはいてくるわ。」

バッグをあけて、塵紙を数枚握ると共に、フランネルのおしめをまるで魔法のようにバッグからとり出し折りたたんで、ビニール袋に納めたおしめカバーを、そっと隠し持って立っていった。

トイレの中でパンティを脱ぎおしめをあてがい、おしめカバーをつけるひろ子の妖しい姿態が、否応なく私の脳裡に浮んだ。

長く待ったように思ったが、五分そこそこだったろう。ひろ子は上気した顔付で戻ってきてペタリと私と向い合って坐ると、黙って私の顔を見た。万事O・Kとの無言の合図。

「はいて来たの？」

「ええ、……」

「見せてくれよ。」

「だって……」

「いいからさ。おまじないするんだよ。でないと意味がなくなるんだ。さあ」

「何をするの？」

それでも彼女は立上り、一旦はいたパンティをスカートの下からそっと脱いだ。

「スカートをあげて御覧」

「疑ぐり深いね、よう」

薄桃色のナイロンのオシメカバーが、正しく、ぴったりとひろ子の腰を蔽っていた。緑の鳩目ホックが数個、左右に整然と並び、股からかけて前部で三個のホックが艶々と色っぽく私の眼を射た。ヒップが多少膨らんでいる。

「私がいいと云う迄おしめカバー外さないでいられるかね」

「さあ、日数にもよるけど……」

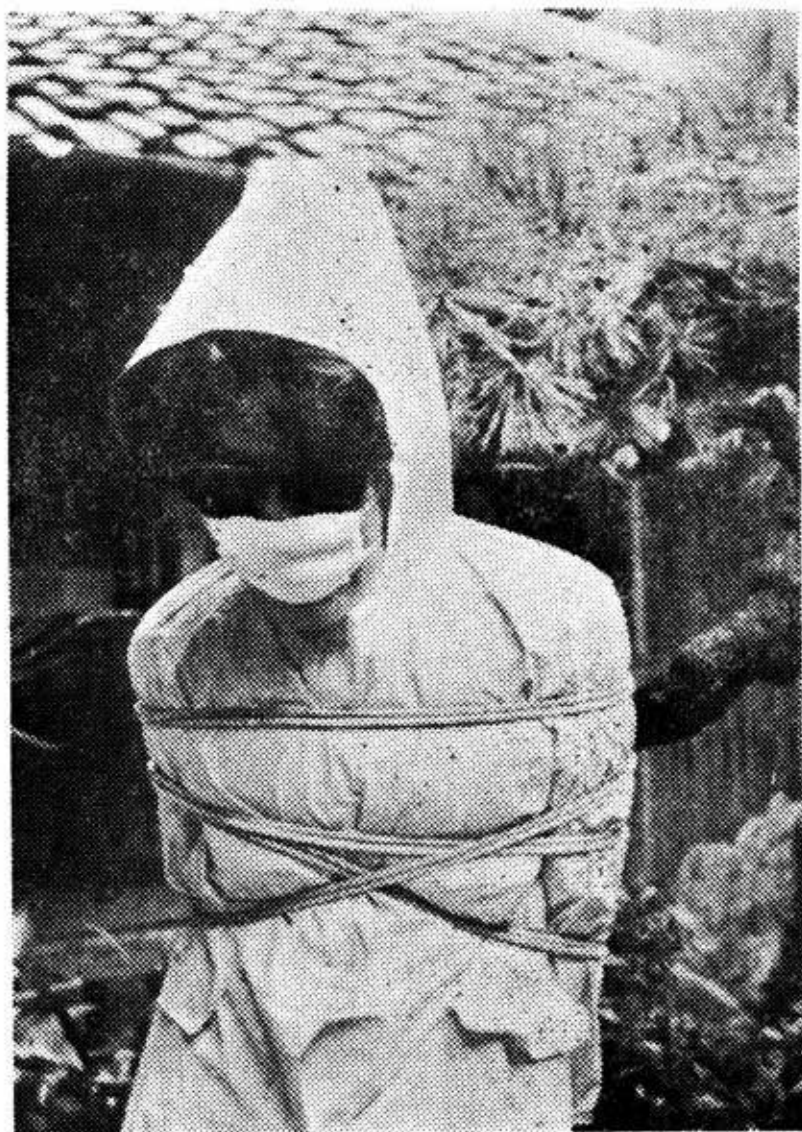
「明日の午前十時まで——」

「なら、いいわ。」

「よしッ、じゃあ約束した。私がおしめカバーに封印するから、それを破ったら罰則だ」

「まあ、怖いね」

一向に怖くない顔付で、ひろ子はいそいそとしていた。彼女の最も好む処なのだろう。私は、書類入れを開いて、あり合わせの紙を細く千切り、携帯用のスーパーパー糊のキャップをとって粘液を押し出し、腰廻り、横開き、それに前ホックにと、ベタベタと紙をはりつけて、勿体らしく、捺印した。



「で、私がこれをつけている事をどうして確かめるの？」

「明日は文化の日で休みだろう、会社——」

「あッ、そうか、辻村さんと歌山まで出張してくれるの？」

「そのつもりだよ」

「なら、私の家へいらっしやい。一寸辺りだけど、いい具合に、兄夫婦が子供づれで、朝からみさき公園へ行って、大阪へ出るから留守番頼まれてたの。私一人よ、勿怪の幸いだわ。」

「へえ、そいつは都合いい。ついて来たね」  
「ホテル代が浮いたでしょ」

「その分、明日の昼飯うんとゴージャスでいこう」

私は彼女に地図を書いてもらった。南海の和歌山市駅から、更に加太線にのりかえて四ツ目の駅、M駅。彼女の住居は、元住友の住宅だったという。そう

いえばあの辺り、住友金属で押えている。

「ちょっと歩こうか。さあ、もっと飲んだ飲んで」

私は故意にビールをすすめ、彼女も期する処あるのか、もう駄目駄目といい乍ら相当にコップの数を重ねた。

もつれる様に私達は料亭Fを出る。

「のどがかわいた。喫茶店でジュースでものむか——」

「未だ？、さては魂胆ね。」

意味あり気に笑い、彼女は強いてさからわ

ず私に従がった。

「一寸失礼——トイレだ。」

ジュースをのみ終り、私はわざとトイレへ立った。誘導である。人がすると、何がなし自分もしたくなるものだ。

「ああ、すっとした。」

私はハンカチで手をふきふき悠然と戻る。

ひろ子もじもじする。

「出るのじゃないかい？」

「らしいわ」

「おしめカバーいよいよ効用を発揮するよ。」

さあやっちゃえ。」

ひろ子は凝然と私を見つめ、心持ち、椅子から尻を浮かしていた。静かな『ブルーベの恋人』のテーマ音楽が流れ、暗いルームに、ひろ子の真剣な表情が白々と浮き上っていた。

真剣な面持が続き、机上の両手が拳となつて、一つにしっかりと握りしめられ、やがて表情がくずれて、ぐったりとした様に、左右の手が離れた。

「終わったね——」

「……………」

ひろ子は無言でかすかにうなづいた。彼女のおしめの下は、湿潤し、ほのぼのとした鼻をくすぐる香気、生温かく、その辺りをじ



めじめと蔽っているに違いない。

「出ましよう。」

じんわりと腰を上げ、彼女はそっと、スカートの上から腰の辺りを手でまさぐった。

フト妖しい笑みが彼女の頬にただよい。私と眼があつてそれは消えた。幼ない頃の安堵感か……。充ちたりた微笑みか……。

戎橋をナンバに向つて歩く私達。雑踏は大分うすれ、腕時計の時間は午後九時半を指していた。

「明日、雨ならいいのにね。」

ポツリとひろ子は呟やいた。文化の日に雨……。とんでもない。気象台の予報は上天気だ。そこでハッと私はある事に思い当る。彼女のもう一つの秘めたる願い……。レインコート。晴れた日には着られもしない。

「そう、雨ならね」

私は相槌をうつ。二人だけに分る言葉。

月は見えねど、空を仰げば一面の星屑。

私達は南海電車の難波の改札口に分れた。

南街の劇場の辺りから、坂本九ちゃんの歌が夜空に響いている。まるで私の心の様に――

「あしたがある、あしたがある、あしたがあるさ……」

× × ×

文化の日は生憎の上天気だった。地図を頼りに私は南海和歌山市駅から、更に加太線に

乗換え、目指すM駅で降りて、竹野ひろ子を訪れた。約束の午前十時を三十五分ばかり過ぎていた。標札は彼女の兄貴の名になっていた。表構えは可成り草臥れているが、家の内

部は次々と改装したのか、新建材を使って、洒落た便利な調度にしつらえてある。

ひろ子はヘヤーネットをかぶり、白粉気のない普段着姿で現われた。

「こんな姿で御免なさい。休みのもんだからお洗濯したり、片附けていたら、身なりととのえる時間がなくなったの。散らかしてあるけど上って頂戴。誰もいないから……」

私はノコノコと彼女について、茶の間、座敷を横切り、奥の四帖半に案内された。ここが彼女の居間である。日当りのよい庭に面して、絶え間なく車の走る道路とは、ブロックの塀で遮ぎられている。

「封印を確かめようか」

私はニヤニヤして云った。

「その俤よ。だけど随分ぬれている筈よ」

彼女はスラックスをずりさげた。パンティはつけていなかった。ふんわりとかすかなアンモニアの匂いがただよった。おしめカバー

の封印はねじれ、千切れそうになってはいたが、確かにその俤だった。

「おしめをとりかえてあげようか。」

「まあ、待って。お茶でもいれて、ゆっくりしてからでもいいじゃないの。せっかちな」

「そりゃ、君さえ、よけりゃね」

私はスラックスをあげて茶の間に立つて彼女の腰の辺りを眼で追っていた。辺りにそこはかとなく、ゴムのむれた異臭とネクターの放つ匂いがミックスした女体の香気がただよっている様に思われた。

香り高いコーヒーを漉れ乍ら、彼女は自分にいいきかせるように――

「やはり降らなかったわね。大体文化の日って、統計的にはお天気の日が多いんだって」

「レインコートをきて、黒眼鏡の白マスク、そして縛ってこの庭でさ、ホースで頭から君に水をぶっかけてやるよ。それで我慢し給えよ」

「……………」

ひろ子は笑って黙認した。

「ひる飯は外へ出てとろうよ。奢るつもりだから、それまでに昼飯前に一仕事――、おしめカバーの交換だ。さあ、いい子、いい子、始めよう。」

勿論それはひろ子の期する処だったのだろ  
う。彼女は整理ダンスの抽出しから、新らし  
いおしめを一組とり出した。私はバッグを開  
き二条の縄をとり出し、無言で彼女の背に近  
づいて左右の手を後にねじ上げた。抵抗はな  
い。私の縛るが尽に凝然と立ちすくんでい  
る。黒いセーターの服の上から後手に縛り上  
げ、ぐいと引き上げて縄を首に通して前でよ  
じり、胸をしめる。いたわって定石的な一典  
型の縛りに過ぎないが、今日は緊縛が本旨で  
はない。しかしともかく縛らないと私にはピ  
ンと実感が湧かない。

ストロボをカメラにとりつけ、三脚に据え  
て、六米のリモコン・レリーズをとりつけ  
る。準備は出来た。私はひろ子を抱きかかえ  
る様に、畳にねかした。ストラックスをと  
り、いよいよおしめの交換である。じんめり  
した封印はわけもなく次々剥がれ、カバーの  
鳩目ホックを一つ一つ外して行く。ずくずく  
に濡れた異様な触感に、思わず私の手は硬ば  
り力が入る。おしめカバーの内部はすっかり  
濡れそぼれていた。ずしりと重く感じる生温  
かいおしめを私は二本の指で摘み、傍の新聞  
紙の上においた。ポツリと黒く、小さな固型  
が一つ混じっていた。ひろ子はその間、私の

されるが尽になっていた。真新しいネルのお  
しめを腰から押し込み、私は日本手拭で、彼  
女の両肢をよく拭いて、素早く巻いていっ  
た。そしてカバーでピッシリとそれをしめて  
押えた。交換が終って、ホッとした時、私は  
大きなミスに気付いた。その行為に夢中にな  
っていた私は、肝腎のカメラの方をすっかり  
忘れていたのである。しまったと思ったが、  
この場合再現はむづかしい。私はおしめカバ  
ーをつけ、後手でたたみに転がる彼女の肢態  
に、パチパチと左右と俯瞰の角度から数枚カ  
メラに納めた。

暗黙のうちに私達は次の行動に移ってい  
た。私が縄をとくと、彼女は愛用の鼠色のレ  
インコートを黒のセーターの上から羽織り、  
マラックスをはいた。黒眼鏡、白マスク――  
それは、ひろ子がいつも懂れていた、古川裕  
子のスタイルである。その姿の彼女を私は後  
手に縛り上げて庭につれ出した。風呂場の蛇  
口にホースをつけ、ホースを引張って庭先に  
出し、そのホースの先に、更にシャワー用の  
ゴムホースを連結させた。蛇口をひねると、  
シャワーとなって水は散って勢いよく放射を  
始めた。灯籠の横の積んだ石に彼女は座り、  
その水を頭から受けた。水の飛沫はレインコ

ートにはねかえり、ストラックスに伝って流れ  
た。私はホースの先を握ってかけていたが、  
これではカメラが扱えない。それで、一旦水  
をとめて、ホースに紐を結び、庭先の松の小  
枝の先につないでホースのシャワー口がうま  
く下をむく様に仕向け、彼女をそっとその下  
につれて来て、再び蛇口をひねった。サンサ  
ンと水沫をあげ、レインコートをひたひたと  
ぬらし、したたり落ちる水滴の中で、ひろ子  
は陶醉していた。暖かい太陽の陽ざしがひろ  
子にそそぎ、空間に小さい蛇口がアーチを描  
いていた。

私はカメラを構え、ホースの口をカットし  
てカメラに納める。

濡れそぼち、ストラックスに伝う水の冷めた  
さも気にならぬのか、彼女は三昧境に浸って  
いるかに見えた。

「私の構図をひとつ、きいてくれるかい。」  
「いいわ」

ひろ子は易々として応える。裏手へ廻って  
屋根裏に押しあげてある梯子をおろすと、そ  
れを裏の納屋の戸に立てかけ、ひろ子を梯子  
に追いあげ、両手で、梯子の上段をしっかりと  
と握らせて、縄をかけ、それで両足を梯子か  
ら外し、私は孤を描く放射の瞬間を考えたの



だった。

おしめカバーを外させると、ひろ子を予定の行動に追った。

シャッターチャンスは、まさにぶっつけ本番——。撮り直しはきかない。梯子にぶら下った彼女はじわじわと両足を一度外して吊り下り、大丈夫と見ると、両足をウルトラC式に左右に開いていった。そして前触れもなく激しい勢いで、空間に弧を描いて、放射し始めた。飛沫が、コンクリートにしぶきをあげてはねかえり、それは長々とつづいた。

私のカメラはそれを追って、十数枚もフィルムが流れていった。

× × ×

おしめカバーをつけた彼女と私は、市内へ出てぶらくり町で豪華な昼食をとり終り、満ち足りた顔で向い合っていた。筋向いの映画館で、松竹系『コレラの城』の、鰐淵晴子の水車小屋の逆吊りシーンのスチールがデカデカと貼り出されてある。

「映画でも見るか、縛りがあるらしいよ」

「そうね、それもいいわ。だけど余り家もあけていられないけど……」

時間がうまく合えば入るつもりで、私達は映画館の前に来て、時間割を見た。あと十分

許りで、もう一本の『男の影』というのが終り『コレラの城』が始まるうとしている。

祭日だというのに映画館は空いていて、六分位のいりだった。私達は恋人の様に、闇に手を探ぐり合い、握り合った後、女の緊縛シーンや、凌辱シーンをスクリーンに追っていた。鰐淵晴子が水車小屋で見せる全裸に近いシーンで固唾をのんだが、あとで、あれは鰐淵自身でなく、大部屋の彼女に似たスターのスタンドインだと知った時はガッカリしたがその日は勿論それは知る由もない。

映画館を出ると、日は未だ高かった。

「これからどうする？」

「留守番を頼まれているから、やはり帰らなくちゃ。でも今日は愉しかったわ。じゃあ辻村さん、これから別れましょうか」

「おしめカバーを交換出来なくて残念だよ」

「もういいでしょう。それに今の処未だ綺麗でサバサバしているわ。大阪で——」

「じゃあ又、電話するよ」

私は大阪でもう一本見たい映画（日本拷問刑罰史）があつたので、思い切りよく電車の停留所辺りで別れた。車を拾ってのりこむ迄彼女は立っていた。そして走り出した私の車に手を振るのが見えた。

× × ×

これは蛇足かも知れない。しかし、彼女に手紙を出された沢山の方の為、言い難いが一寸補足させて戴こう。

大阪府下、富田林市のF氏が、竹野ひろ子の選んだ相手である。その事は双方から連絡があつた。F氏は紳士的な方で、わざわざ二度も、そのことで、編集部と私に了解を求められた。中小企業だが、会社経営の社長さんで、奥さんは亡くなられて今は子供さんとのやもめ暮りで、五十一才（少し年令的に峠をこしておられるが——）。

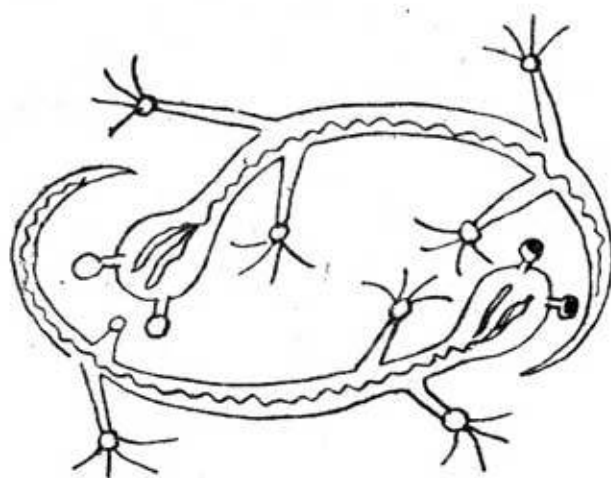
竹野ひろ子を月収四万円で雇われたのだが仕事はなし。個人秘書の資格で、会社へは出ない——といえば、プレイがその月収に当るわけだが、それ以上はプライバシーの問題である。週に一、二回逢う約束らしい。又、今後どうなるか分らない彼女だが、今の処、それで満足らしい。F氏フォトはやらないのだが、私は是非フォトを撮って戴くよう、それだけお願いしておいた。いずれ、ひろ子とのプレイのことなど、箕田氏からF氏へ、サロンへ寄稿するよう依頼されたそうだから、遠からずF氏の名前で、サロンに、ひろ子とF氏とのプレイの様子など知る事が出来るだろ

う。  
多分に浮気っぽい彼女の事だから、そうはいっても、編集部へ来た手紙はすべて、私が預って彼女に渡してあるから、どんな事で、

手紙を出された人々にヒョッコリ連絡あるかもしれないが、期待はせず気長にお待ち願いたいと思います。  
私が預った手紙以降で、紹介を頼んで来ら

れた手紙六通は、箕田氏から竹野ひろ子へじかに直送したと聞いています。

(了)



## 「想 う こ と」

西 条 操

さりとは面白い。いや、感服した。  
しかし、残念ながら、それには詩と  
ロマンがない。

—— ツルゲネフ ——

誌上を借りて、当誌と読者の方々とに、些  
か苦言を呈したい。

近頃の当誌には、おおむね『詩とロマン』  
(ロマンスではない) が欠如している様に思

われる。写真やグラビアや挿絵は、大概、女性  
性があられない状態で縛られているものであるし、  
文章の場合は支配者がアウトロー  
(外角低目球のことではない) であるのが殆ど  
である。そして、如何に小道具や背景を按  
配したところで、つまるところ、非合法で暴  
行的なセックスを思わせてしまうのである。  
勿論、無法者が登場しない場合もある。す  
なわち、納得ずくで行われる遊戯に類した記

述描写であり、また、いわゆる不潔な物質に  
関する事柄などである。そのほか、同性愛と  
か、女装趣味などの分野もある。しかし、こ  
こでは、一応、いわゆるSとMの分野につい  
て、近頃流行の悪書談義とからんで申し述べ  
たい。

無法者がその暴威をたくましくしている写  
真、絵画、もしくは叙述に対し、世の品性清  
らけき人々が眉ひそめるのはむべなるかな、  
である。しかも、それらが漂わせるニュア  
スがセックスに最短距離で直結し、セックス  
エリアを終始強調するものである場合、人々  
は、それを攻撃するに好個の武器を見出すの  
である。つまりこうだ。人間というものは、  
如何なることによって自分が性的感興を刺戟  
されるかを、他人に知られることを恥じる。  
少くとも、いわゆる文化人は、特に御婦人方  
は、恥じるポーズを取らねばならぬことを知  
っておられる。そして、人類というものは、  
多かれ少なかれ、SMの傾向を有していて、  
その自覚を押え切れない連中が当誌を愛読す



る、という次第なのだ。そこで、高邁なるエリート達は、隠微な興味を感じつつも、それを押し隠し、その抹殺を叫ぶことによって、自己の高潔さを再確認し合いたい衝動に駆られるのである。それらの誌面には、万人が否定すべき公然たる性的感興が溢れているではないか。

——そりゃねえ、こういった世界があることは心理学で教わりましたわ。また、表現の自由、文書刊行の権利も認めますわ。でもねえ、これは行き過ぎです。テレビや映画は一瞬の刺戟ですけど、御本はいつでも見れますもの。それに、うちの子は読書が好きなんですのよ——

人類の指導に熱心な人々はこう云い合い、(芥川竜之介ではないが)如何に安らげき熟睡を豚の如くむさぼったであろうか。

そこで、私は提案したい。当誌上より、直截的なセックスを一掃することを提案したいのである。特に、如何に理屈つけたとて、一目見るなり排斥の絶好目標たらざるを得ないグラビヤと挿絵とをである。

思うに、活字を一字づつ読み取るという知的作業を経て内容をおのが胸裡に咀嚼し、展開される想像の世界に感興を高ぶらせる、というのが真の読者であり、描く其の世界がSとMであるのが真のサジストでありマゾヒストであって、語るに足る同志でもあろう。

近來の社会に於ては、感覚官能に直接訴えるからくりが余りにも発達してしまつて、思索する余地を人々から奪っている様に見受けられる。ズバリのグラビヤ頁が姿を消せば、青少年の殆どは、おそらく当誌には目もくれないことであらう。先刻、真のサジスト、マゾヒストと申し上げた。彼等は、セックスに関連した頁がなくても当誌を支持するであらう。女性の裸が荒縄で括られて(縛られて、ではない)いる生々しい姿態にのみ鼻ふくらませて眺め入るのは、極言すれば、ミイハーフ族である。彼等はSMの世界の入口でうろろしているあどけなき連中なのである。彼等のうちの選ばれた者のみが、真のSMの次元に入り得るだろうし、それ以外の連中の手を無理に引張つてやつて、此の罪深き世界(これは勿論反語と申すものである)に引摺りに込むことはなからうと思うのである。

さて、はじめに、詩とロマン云々と申し上げた。無法者が美女に対して凌辱をほしきままにし、虜けた佳人が縄目に屈伏してヨヨと泣く。たしかに面白いし、刺戟もされる。しかし、つまりはSM場面の羅列に過ぎないし詩とロマンが存在しないという所以もそこにあるのだ。支配者が個人、または複数の個人達である場合は、どうしてもそうならざるを得ないのである。なまぬいプレー物には、必然的にきびしさが存在しない。反対される

向きも多いとは思ふが、それは井戸端会議に過ぎない。隣りの娘は未だ処女かどうか、といった類いの、大衆の好愛する好奇的ヒソヒソ話に過ぎないのではなからうか。

莊麗なSMの世界に於ては、支配者は社会であり、国家であり、法であり、社会制度に於けるしがらみであり、究まるところ、人類そのものでなくてはならない。支配者が個人の領域を超えて、より絶対的なものとなった場合、その描くSM世界には詩とロマンが生れ出るのである。そうなれば、たとえ血が流され、佳人が呻き、暴力がもてはやされようとも、良識ある人士は当誌を支持してくれるであらう。

突飛な話の様だが、先日、私は新幹線に乗った。東海道新幹線の功罪について、世論の一部はあれこれとことあげしている。強引に完成せしめた此の巨大な施設には、それに関係した人々の泣き笑いが、こめられていることだろう。

あれを思いこれを想つて、其の鉄路の響きに『詩とロマン』を感じた。人里離れた新横浜駅、そして、田んぼのまん中の岐阜羽島駅そのホームに立てば、そこには叙事詩すらがある。惜しむらくは、それに、奴隷達や囚人達の血と汗と涙が籠められて居ないことであつた。

## 孤独な遊戯

吉村英子さんに就いて

## 読者通信の一女性

芳野眉美

A

下腹に鉛をぶちこまれたような鈍痛が続いていた。便秘はすでに一週間を越えていた。放っておくと、また二十日以上も便通が起らないかもしれない。月に一度か二度しか排便出来ないという苦しみが健康な人に理解出来ることだろうか。

浴室の鏡に腹部のふくらみをうつして、妊婦のように張った腹部にそっと触れてみる。

勤めを休んで診察を受けることにした。

その足が病院の前で止った。

ブラウスとスカートを脱ぎ、腹部を露出して診察用のベッドに寝なければならぬ。大学を出たばかりらしい若い医師の指が、容赦

なく妊婦のようにふくらんだ腹部を撫でまわし圧したりする。

「直腸をみますから、パンティを脱いで下さい」

羞恥で顔をおおうひまもない。棒状の直腸鏡があっさりと挿入される。

「ひどい便秘ですね。浣腸をしましょう」

消毒薬の強い臭いが漂う処置室、スクリーンにさえぎられているベッド。下腹部に敷かれるビニール、懸架にかけられた一〇〇〇Cのイルリガートル、挿入を待つ嘴管。

「右枕に臥て、左膝を曲げて下さい」

注腸五〇〇CC。下腹部の膨満感は限度を越える。内臓が突き上げられるようだ。眉をひそめる。声はたてられない。

「どう、便意がありますか」  
黙って首を横にふる。

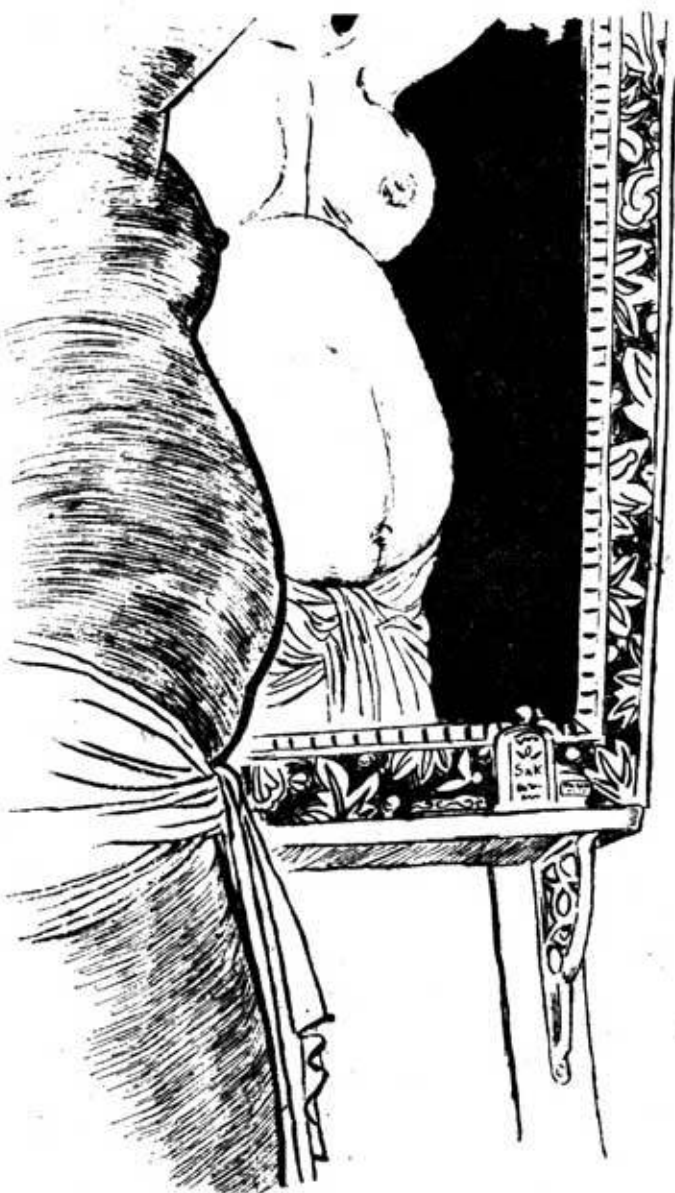
嘴管がはずされ、かわって太いゴム管が挿し込まれる。体内の石鹼液は再びベッドの下ガラス容器に流れていく。

五〇〇CC毎に注腸と排出を繰り返す。

遂に三本目のイルリガートルが架けられ、最後の注入が始まる。五〇〇CCを越え、一〇〇〇CC全部を腹部に注入する。下腹部に耐えがたい圧迫感がおしよせ、上陸した暴風は激しい雨をとまって狂い廻る。断続的におしよせる激しい便意、耐えても耐えても少しづつ体外に洩れ始める。

お尻をおさえていた脱脂綿のかわりにオムツで流出をふせぐ。看護婦の左手が腹部をマ





ッサージ始めた。

お尻の下に便器を挿入される。絶叫。

踊んでお尻をつきだした姿で若い見習看護婦に熱いタオルで清拭される。身体ふるえはなかなか止まらない。

——浣腸しましても、どのような強いお薬も大量の注腸も液だけ出てしまい効果がありません。排便時間が早すぎるのかと思い、洩らしてもいいようにオシメを当て、オシメカバーをして三十分位がまんしましてもだめでした。——

——はずかしいことですが、腹部マッサージ

の後で、看護婦さんに肛門へ指を入れて掻き出して頂くのですが、如何に職業とはいえ同性の手でそのような処置をうけますのは死ぬより辛いことだと思います。——

——誰方かよい浣腸の方法薬品をお教え下さい。この様な薬は恥ずかしくて親にも知人にも相談できず悩んでおります——

豊橋の吉村英子さんの通信は、

「ひどい便秘になやむBGでございます」

で始まっている。昭和三十八年十一月号読者通信。

B

吉村英子さんより  
小林薫氏あて。

昭和三十九年四月  
号読者通信。

「小林薫様、誌上  
でのお教えまことに有難うございました。早速五〇〇CCを注入して、オシメを重ね、オシメカバーを当て

まして横臥しましたまま、このお手紙を書いております」

名文です。

「とてもお目にかかります勇気がご座居ませんので、申し訳ありませんが悪しからずお許し下さいませ」

とあり

「お会いして一緒にプレーできましたらと思いますと気も狂わんばかりでございます」

「いつか上京の機会がございましたら、その時こそ、お会いしまして存分に私を責めて下さいませ」

となやましく

「小林様は先日の方法で責めてさしあげましょう」

とある。その「先日の方法」がよくわからない。

東京の小林薫氏の通信は昭和三十九年一月号が初回、続いて三月号に見受けられる。

「体温に温めたゴマ油五〇瓦／二〇〇瓦を、就寝前四つ這いになって肛門を高くした姿勢で注腸する。注入後一時間位そのまま、膝を折りまげてジツとして居る。その後静かに一晩我慢して眠ると、翌日から二、三日間は快

便がある。またつまって来たら繰り返す。週二回位づつ根気よく一月も続ければ、頑固な便秘でも快方に向う」(一月号)

「最も無難で有効でしかも手軽に出来るのは生理的食塩水注腸であります。○・九%の食塩水を体温で温め、これを五〇〇瓦程用意します。病人を横臥させて両足をまげ、肛門部よりゴム製カテーテルを深く挿入し薬液を注入するので。終ったら仰向けにして両足をのばし、半時間でも一時間でも出来るだけ我慢させます。二度三度と行くと目的を達します。この方法は決して癖にならず、結局は自然便が出る様になります」(三月号)

と医薬書を紹介している。

吉村英子さんが注入したのはゴマ油か食塩水か、私は知らない。

小林氏は二十七才、アクチブなクリスタ・マニアのよし

「もしかすると、貴方もA感覚にめざめて、それを楽しんでいらっしゃるのではありませんか」

とあり

「もし僕が貴方に、そんな処置(註、指で掘りだすという病院での手当のこと)が出来たらと思うと、気が遠くなる程昂奮させられます」

す」

「マニヤにとっては、便秘の女性は大変な魅力で、特に排便に苦しんで居る姿を知りたい願いが強いのです」(以上一月号)

「貴女の生理は理想通りなので、一緒になれたら素敵だろうと考えたりしました。もしプレイして頂けるなら、いつでも豊橋まで参ります。決してご迷惑はおかけしません」(三月号)

この返書が四月号の吉村英子さんの通信と思われる。

小林氏の通信によると、二回程私的な手紙を吉村英子さんから頂戴しているそうだから「先日の方法」はその手紙の中にあるのかもしれない。

一月号の通信では小林氏は局止めを指定している。私信であっても吉村英子さんからの通信は一方交通であつたらしい。

四月号の吉村さんの手紙にもどろう。

「病院で例の処置をうけましてまだ二日目なのに、いまでもお腹が苦しくなりました。

きつと、お薬が利いてきたのでございました。今夜はこのままオシメします。そして汚れたオシメのまま明朝まで赤ちゃんのように休みます」

オシメをした吉村英子さんを空想しても失礼ではないでしょう。

「ああ、もし、明日の朝、私のオシメカバーを外し、汚れたお尻をきれいに拭いて下さるのが貴方様の御手であつたら、どんなに素晴らしいでしょうね」

名文です。

「私も小林様に浣腸してオシメカバーを当てて差し上げたいのです。そしてお腹をゆっくりとマッサージしてあげます。やがてベトベトに汚してしまった貴方のお尻を熱いタオルで優しく拭いてねに拭いてあげましょう」

「浣腸という孤独な遊戯に溺れる私に、貴方様のような優しいお友達が出来ましたことを英子とても嬉しく思います」

このラブレターは、

「いま排泄がはじまりました。ひざががくがく、英子いまでも幸福です」

で終わっている。

C

英子が排便を禁じられてから十日になる。

英子は皮の貞操帯をつけられ、後手も高小手に縛られて自由を奪われていた。鎖のついた犬の首輪をはめられ化粧室に軟禁されて



いた。

貞操帯といっても、アーヌスの当る部分にごく短い太い栓がついているだけの奇妙なものである。英子の腰にぴったりと締められた貞操帯は、アーヌスに栓をして排便を禁じてしまうのだ。

妊婦のようにふくらんだ腹部を露出したまま、英子は二間続きの座敷きに引き据えられていた。

一間につめた観客の眼が光った。

英子は不思議な貞操帯をとられて、グリセリン原液を五〇〇CCを注入される。高く上げさせられたお尻に観客の焼けつくような視線を感じる。

ワセリンをたっぷり塗ったピンポン球を押しこまれて英子は呻めいた。

奇妙な皮の貞操帯の固い栓がピンポン球を圧迫して固定された。

英子は強烈な排泄感の苦痛と羞恥にのたうちまわる。

静子夫人に挿入したカテーテルの端が、英子にくわえさせられた。

英子は『花と蛇』を読みすぎたらしい。こんな夢を見た。

昭和三十九年五月号読者通信より。

(吉村英子さんにカテーテルをつないで飲んでみたいと思うのは私だけではない)

# D

昭和三十九年七月号、九月号では小林氏に強力なライバル(失礼)が出現している。

吉村英子さんより岐阜の赤井茂氏あて。

「赤井様、おたより拝見しました。ドナンは使用したことがございますが、刺激が強烈すぎて私の場合液だけ出てしまい、排便の目的を達することができませんでした」とあり

「でも、いつかあのようにして責められたいと存じます」(七月号)

この「あのようにして責められたい」というのは、昭和三十九年六月号の赤井氏の通信の中に

「私が若し一緒にプレーをする機会がありましたら」

というわけで

「柔いフトンの上で、ヌメヌメした粘着タッチ十分の総ゴム製のオシメカバーに、赤ちゃんと同じあの魅力的な柄雪花絞りのオシメをセットして」

名文です。

「ドンナ浣腸液を五〇〇CC一〇〇〇CC注入します。あなたはオシメカバー姿で美しく悶える事でしょう。ピッチリ嵌めた総ゴム製のオシメカバーのゴムをきしませて」

終って

「熱いタオルでキレイにお尻を拭いて、サッパリした新しいオシメとオシメカバーを換えて上げたい」

七月号の吉村さんの返書にもどります。

「オシメカバーは表がトリコット、内側はビニール張りの大人用を愛用しております。色は淡いブルー、両脇ボタン止です」

とあり

「オシメは普通ですが、肌にふれる方は紙オシメを用いますとお洗濯がずっと楽です」

(吉村さんの洗濯前のオシメをいただきたいと思うのも、私ばかりではないだろう)

「他にチェリー印産後バンドがありますが、これは前開きでふつうの生理バンドよりも、お尻のゴム引の部分がずっと広いので簡易カバーとして愛用しております。日常パンティ代りに着用してゴムの感触を楽しむこともできます」

赤井氏より吉村英子さんあて、昭和三十九年八月号読者通信。

「浣腸の持つ挿入、注入、強い腸の刺激、これをたえる排泄抑制感には魅力的です。そして、汚れや失敗を防ぐためにピッチリと嵌めるオシメとオシメカバー。苦痛と羞恥は、矢張り浣腸とオシメの持つ魅力ではないかと存じます」

通信によると、赤井氏は、実際に病院のベッドで経験して来たらしい。

「赤ん坊の恰好よろしく一五〇〇CC注入され、ヌメヌメしたゴムのオシメカバーをピッチリとはめられ、ベッドから降りる事が出来るまでオシメの世話になったのです」(六月号読者通信)

手術して三日目のことであった。

「ベッドで赤ん坊の様に一人に両脚を支えられ、大きなオシメをしめ込まれて、一人が液を一杯吸引した浣腸管を見せつける様に手にして、施術された時は、羞恥と苦痛におのいたものです」(八月号)

と書いています。

九月号の吉村英子さんの返書は、

「赤井様、中日紙上で御連絡の方法がありましたらなお教え下さい。当地は三河版です」とある。

八月号には小林氏の通信もある。

「期待に胸躍らせて封を切りましたが、ご連絡先の記載がなく少し失望しました。ご信用頂けなければ止むを得ませんけれど」とあり

「できたら一方交通から抜け出したいものです。貴女からの意志表示がない限り、文通以外何物も求めないことを誓いますから」

九月号の吉村英子さんの返書

「一方交通——決して信用云々の問題ではなく、歯がゆい思いは私とても同じでございですが、勇気がありませんので失礼を重ねております。お許し下さい」

未婚の若い女性ならば理解出来ないこともありません。

結婚問題は一生を支配するかもしれないのだから、自分の性傾向を捨てるか、理解してくれる男性を夫に選ぶかむづかしいでしょうね。

結婚までの男性との交際は注意しすぎてもおくびようということはないと思います。

体質的な便秘ならば、結婚してから夫を強引に導入してもいいわけですけどね。病気になるだから。そのうち、浣腸は、吉村さんの云うような、

「孤独な遊戯」(四月号)

ではなくなるでしょう。

ともあれ、吉村英子さんと小林氏、赤井氏の浣腸通信をこれからも読者通信誌上で拝見したいものである。

E

今日も——

英子にはエネマシリンジのゴム球を圧してどんどん空気を送りこむ。

腹部がポンポンに張った頃、シリンジの端をグリセリン液の容器に浸し、五〇〇CC——〇〇CCのグリセリンを注入、嘴管を外して、脱脂綿で強く押える。

空気浣腸とグリセリン浣腸の二重の苦痛、排便と排気ガスの二重の羞恥を味わいながら思わず英子はまっ赤になる。

誰でもいい、英子を二重浣腸で責めて下さる方はいかしら。(四月号より)

そして、今日も——

部屋に床をのべ、挿入便器と尿器、オシメとオシメカバーをととのえる。英子は患者であり医者であり、看護婦なのだから、あらゆる角度から観察できるようにしなければならぬ。そのために鏡を用意する。

腰の下に花柄のビニール布が敷かれ、英子



の寝衣の裾がひらかれて、硝子の尿器が密着する。ひややかな感触。やさしいせせらぎの音。

体温計がお尻に入れられた。十分間、英子はみじろぎもせずに目を閉じている。

英子は考える。

グリセリンにしようかしら、ドナンにしようかしら。

グリセリンにきめた。一度に大量に入れると、刺激が強すぎて液だけ排出されてしまう。まず三〇〇CCを注入しよう。

洩れたグリセリンが、銀色の糸のように一筋白い半球にすべりおちた。すかさず五〇CC注入。

カテーテルを抜き去り、しっかりオムツをあてておさえる。身をかがめてこらえる。

四十分後、突然狂ったように便意が殺到した。

あきらめて手をはなし鏡の中をみつめる。

鏡の中の英子のはげしくあえぎ、間歇的に奔流する溶岩群に埋もれていた。(昭和三十

九年九月号「羞恥の記録」より)

吉村英子さん

これを書きながら、私はこんな空想をしていました。私の空想を書いて、この小品の結

びにしたいと思います。

肛門カテーテルで英子さんを洗腸します。すっかり英子さんの腸内を綺麗にしてしまいます。

それから、特級酒でも浣腸しましょうか。

日本酒を大量に注入しましょう。

脱脂綿をあて、その上から痔バンドでしっかり締めあげます。

英子さんを熱いお風呂に入れます。

私の空想していることがわかりですか。

英子さんをおちょうしの代りにしようというのです。英子さんのやわらかな女体を使ってお酒のおかんをしているのです。

英子さんは三十分位、がまんできますものね。

ゴージャズな薄いネグリジコをまとった英子さんを寝室に運びましょう。

うつぶせに、足を開いて寝て下さい。

さあ、栓をぬきましょう。

私は英子さんのふくよかな女体でぬくもったお酒を飲みます。

一〇〇CC用ピストンがぴったり合うビニールパイプに、お味噌をつめ、ピストンで英子さんの直腸に押し込みます。液体と違った量感は何なものでしょう。

パイプを抜き、注入したものが落ちつくまでがまんしていただきます。

さて、おつまみもできました。

そうそう胡瓜がありました。モロ胡にしましょう。

お酒をすっかり飲み終ったら、再び肛門カテーテルで綺麗に洗腸します。

英子さんの美しい菊の花びらに、香水をふりかけましょう。香水は東洋調の「夜の衣裳」がいいでしょう。

最後の仕上げを忘れてはいけません。

グリセリン三〇〇CCほど注入し、オシメをつけ、オシメカバーをします。オシメをしていないと、英子さんは寝られないのですものね。おやすみなさい、英子さん。

英子さんの直腸で牛乳と卵黄とシュガーシロップでミルクセーキをつくってもいいし、ウィスキーとプレッソーダでハイボールをつくっても面白いし、ウオッカとオレンジジュースでスクリュードライバーをカクテルするのも楽しいでしょう。

英子さんのバースデイに、こんなカクテルパーティーでもしようではありませんか。

『備考』 三十八年十一月号より三十九年十月号まで一年間の読者通信と、三十九年九月号「羞恥の記録」を参考にしました。

## “三恵の生活と幻想”



かわかみ・けい

土曜日の勤めは昼までだったので、三恵は退けるとすぐK市へ行った。その日はデイトの約束もなかったので、三恵は全くの自由だった。三恵は前から考えていたことを、今日果そうと思ったのだ。思っただけで、心が浮き浮きしてきそうで、また何か重苦しいものを覚えた。電車を降ると、三恵は目指すデパートのガラス戸を押した。

三恵がオシメカバーを買おうと思ったのは一年も前である。勤め先の近所の薬局で先ずきいてみた。姉の子が小学校六年生もなっておねしょをするから、大人用のオシメカバーはないかしらときくと眼鏡をかけた薬店の主人は、子供用のしかないですが、夜尿症だったら、内服薬のいいのがありますから、取りよせて上げましょうかという。三恵は、姉に相談しますからと、早々に引上げた。

三恵は二十三才になるBGである、ボーイフレンドもいるし、女の友達の間でも明朗で楽天的な性格として好感をもたれている。そういう三恵の内面には、表面の明るさの影がある。悲しい、辛いこと、恥かしい、いやらしいことを求めている。三恵は毎月場末の本屋で、拷問の話や女の縛られた写真ののっている、KKとか裏窓とかを購う。その中で



美人のモデルがオシメカバーをさせられて、股間しぼりをされている写真があった。三恵の胸は、その写真にショックを受けた。ぬめぬめしたゴムのカバーをさせられて縛られ、皆のさらし者になる、三恵は羞恥にもだえ、やがて耐えきれぬ尿意に……。

三恵はすでに浣腸プレイになじんでいたが、浣腸の直腸という局部における短時間の遊戯が、ヒップ全体に対する長い時間の感覚作用への嗜好へ移行していった。

三恵はクリーニング屋が、スカートやブラウスを包んでくるビニール袋を利用した。袋の底の両角を鋏で切って、足を入れる穴を作った。三恵は寝室で、その手製のオシメカバーを穿いた。腰を包んだビニールは体を動かす度に、かさかさ音を立たてた。夜具にくるまっていると、汗ばんで来てヒップにぴたりとまとわりついた。でも何か物足りなかった。三恵はビニールをつけたまま起きて台所に行った。母のいる茶の間を通るときも、ビニールはかさかさとした小さな音をたてた、それが三恵に羞恥を呼び起した。三恵は台所で塩水をつくり、五六滴ビニールの中へたらした。ひんやりした水滴が、新鮮な歓びを与えた。濃い塩水は、三恵の肌に、むずがゆさを

加えた。温度の起す陶酔感が彼女を包んでいた。

三恵はビニールの袋に満足できなくなって本物のオシメカバーを求めることにした。でも若い女性にとって、それを口にするこゝろがえ恥しい。薬店で買うことに失敗してから高校の先輩の勤めている衣料品会社に行った。そこは、衣料雑貨の卸を手広くやっていた。三恵は親戚から頼まれたことにしてきた。松永という先輩は、えっ大人用って、変な表情で三恵を見た、三恵の頬は火照ったことだろう。松永さんは、ここにはないがK市のMデパートにあるそうよと教えてくれた。

土曜のMデパートは混雑していた。三恵は大人用のオシメカバーが何処に売っているか見当がつかなかった。店内案内表を見て、三階のベビー用品の売場と、一階の薬品売場をたずねることにした。薬品売場はいちばん奥にあった。Mデパートだけあって、十分のスペースがとってあった。薬品の瓶の列がきれいで、医者しか用がなさそうな器具が並べてあった。三恵はそれらも、ゆっくり眺めたかったが、羞恥が胸いっぱいに拡って、どきどきしていた。アンネナプキンの積んである側にあった。

「あのこのオシメカバー大きいのですか」

三恵は中年の女店員にきいた。

「はい、これは病人用です」

「ひとつ下さい」

三恵の声はふるえていた。女店員は、白い上衣の男の店員をよんだ。男の店員は、ビニールの袋にはいった水色のオシメカバーを商品ケースの上に置いた。店員は袋を開けて、オシメカバーをだすと、表のボタンのついた方を見せて、裏返して見せてから、また表にして、両脇に四つついたボタンを外すと、中を拡げてみせた。前当ての部分は拡げると、商品ケースから下へ垂れた。飴色のヌメヌメした内側の色彩が、かっと三恵の眼に飛込んで、血が頭に上ってくるのが分った。

「この大ききでよろしうございますか？」

店員の眼が自分のヒップを見ているように三恵は、はいと小さな声でやっと応えた。

買物が包装される間、三恵は消入りたい思っていた。視線を落したケースに浣腸器が置いてあった。二十CCのほか、ひときわ大きい五十CCもある。日頃から買いたかったと思っていた五十CCだが、とても今は心の余裕がなかった。三恵は、お待たせしましたという店員の声もうわの空で、細長く丸めた包み

を受けとると、売場を離れた。

三恵はデパートのトイレにいつて、早速身につけたかったけれど、追われるように店内をでた。人通りの多い繁華街を歩きながら、気もそぞろだった。三恵は映画を見ることにした。前から見ようと思っていた。「悪徳の栄え」と「エヴァの匂い」の上映館に入った。

観客のまばらな館内の右側に席をとった。

「エヴァの匂い」が始ったばかりのようだった。三恵は一寸映画の進行をみてからトイレに入った。入口から二つめのトイレに入った。奥の方がかえって人が利用する割合が多いからである。トイレの下の方が二十センチほど開いているのが気になった。三恵はハンドバッグから、包みをだし、包装をといた。

やっと思いがかかった三恵は酒に酔ったように、ビニールの袋から、オシメカバーを取りだした。カバーの両脇のボタンの並んだ部分と上側のふちどりは白い布が使ってあって、ボタンも白かった。腰を締める紐は白い布テープで、股を締めるゴム紐は、青色のナイロンで、押えてあった。全体は薄い水色のナイロンだった。病人用と書いた札と製造元を書いた札を、三恵は取りのけて、ボタンを外し

た。飴色の内側は、ゴムではなかったが、良質のビニールで、十分ゴムの感触を思わせた。三恵は内側のビニールに顔を押しあて、化学製品の異様な匂いをかいだ。

三恵は、スカートを上にめくって、パンティをおろし、オシメカバーをヒップに当てた。ひんやりした感触。前当ての部分を股に通して、おなかに当て、右下のボタンをポツンとはめた。股を締めるゴム紐が少し弱い感じだが、ボタン全部はめて、腰の紐をしめると、ぴったり三恵の腰を包んでしまった。ああ、私は大きな赤ちゃんだわ。

三恵は場内の席にもどった、冷房の利いている場内でも、温度の行き場のない、カバーの中のヒップは汗ばんだ。三恵は映画のシーンも上の空で、陶醉に身をまかせ、空想にひたりはじめた。

三恵はオシメカバーの包みを受け取ると、売場を離れ、デパートのトイレに入った。三恵はトイレの中で、それを身につけると、うっとりした気分で、出口の方へ歩いて行った。股のゴムがきゅっと締めつけるので、歩きにくくて、その様子を人から見られているような気がして恥しかった。もしもと三恵は声をかけられたのも気づかず歩いている

と、肩を叩かれた。

「恐れ入りますが」

三恵が振り向くと、中年の男が、

「お買物は何をされましたでしょうか」

三恵が黙っていると

「お手数ですが、事務室まで来て頂けませんか。お暇はとらせませんか」

男の態度は、丁寧だが有無をいわせないものがあつた。

三恵はデパートの事務室に連れられていった。彼女は万引の疑いをかけられているのを知った。

「お答えして頂けませんか。品物か、領収証のチケットを見せて頂けませんか」

「領収証は落しました、品物は身につけています」

「ああそうですか、何処で何を、お買いなられましたか、それをおっしゃって頂けませんか」

「薬品売場で買物しました」

「そうですか。ではすみませんが薬品売場で御足労願えませんか」

三恵は薬品売場までついて行つたが、彼女の買物を証言してくれる店員はいなくて、他の店員は知らないという。



三恵は再び事務室に戻され、保安係の男と代って、女の店員が入ってきた。

その店員は、高校の時の意地の悪い先輝の吉田松子だった。

「川崎さんね。何をしたの」

と三恵の姓を呼んで、冷い目でみすえた。

三恵のバッグが調べられたが、領収証はでてこなかった。

「川崎さん、こっちにいらっしゃい」

三恵は部屋の隅のカーテンで仕切った場所に立たされた。

「服を脱いで頂きます」

「いやっ」

「さあ、あなたの潔白を証明するためですから——」

三恵は羽根を抜かれた鳥のように、スリッパ一枚で立たされていた。

「さあ、恥かしがらないで」

松子はスリッパの紐に手をかけた。

スリッパが下に輪になって落ちると、三恵は手で胸をおおった。

「もう、かんにして」

「だめです。疑われてもいいのですか」

三恵は涙ぐんで、ブラジャーを外した、処女のぶっくりした乳房がのぞいた。

「それもです」

三恵は、かぶりを振ったが、松子はパンティに手をかけて、引きおろした。

パンティの下には、ぴったり腰を包んだオシメカバーが現われた。三恵は顔に手を当てて、すすり泣いた。うなじから足の爪先まで羞恥に染まっている。あまりの恥辱とショックに、三恵は失禁してしまった。

三恵は映画館の席で胸をおどらせていた。

オシメカバーの中が、汗でぬらぬらと濡れて腰を動かすとずるっとするのが分かる。私は公衆の集る場所にオシメカバーをつけて、知らぬ顔して坐っているのだ。後の席の二人連のBGも、斜め前の女子高校生も、そんなことは知りはない。三恵は、皆さん私はオシメカバーをはいてるのよ、これを見て！と叫びながら、スカートをめくって示したいような気狂じみた衝動を覚えた。

三恵は落着いて映画もみていられず、トイレに行きかかると、内面のビニールは汗で濡れて、しわの起伏が光って見える。三恵は股下のゴムを調節して、よく締まるようにして長く丸めてバッグに入れた。長くてバッグの口からはみでたが、そのままにした。「エヴァの匂い」が終って電気がつく、三

恵はまたオシメカバーを身につけたくなくて、でも休憩時間にトイレに行くのは恥しいので我慢した。通路をへだてた横の席の若い女性たちが、こちらを見ているような気がした。三恵は自分の服装に視線を落した。バッグから丸めたオシメカバーがのぞいていて止めボタンや腰の締紐、水色と鉛色の対象的な色彩が見える。三恵の顔は赤らんだ、あわてて無理にバッグの中に押しこんで蓋をした。

ニュースが始ると三恵は、トイレの中でオシメカバーをはいた。股のゴムの締め具合もよく、前の湿りが残っていて、しっとりまとわりつく感じがした。「悪徳の栄え」の導入部は引きつけるものがあるが、中ごろからだれた感じだった。サジストのために徴用された女奴隷の古風なドレス、幅広いベルトに、奴隷番号の金属札のコスチュームはよかった。懲罰とか免役とかさましい言葉の割に、場面として刺激する処は少なかった。懲罰で城の壁に女奴隷が両手を吊られる場面、免役の女囚が拷問室に追い込まれ、中では女が拷問台に寝かされているシーン。終りごろ拷問室から血を流しながら女奴隷が、よろめきでてくるところなど短いカットなので物足りな

かった。もし三恵が、映画監督で自由な製作がゆるされたら、女奴隷たちは薄い透きとおる生地の上からスカートで、全員が花模様の柄のオシメカバーをはかされる。毎朝女囚は濡れたオシメを男たちや同僚たちの見ている前で、冷酷な女監視員の手によって、取りかえさせられる。オシメが濡れてない女は、導尿のためカテーテルが使用される。濡れたオシメが取り去られた後は、グリセリン浣腸が施される。その後、定められた時間排泄が禁じられる。耐えられなかった女囚は拷問室に送られ、乳房責め、鞭打ち、水責め、浣腸責に会う。女奴隷は一日中尾錠のついたオシメカバーをはかされたままで、夜の就寝時以外は外すことができないのである。

映画館をでてH市に帰り、行きつけの喫茶店によってから帰宅した。簡単に夕食をすまして三恵は寝室に入った。スリッパ一枚になるとパンティを脱いで、オシメカバーに包まれた自分の腰や股の様子に眺めた。色白の肌に水色のカバーがよく似合う。オシメカバーの裾がまわって鉛色のビニールが見えているのもチャームングだった。

三恵はしばらく読書をしていたが、一つの実験を試みたくて、茶の間に行き番茶を三杯

立てつづけに飲んだ。それでも、映画館を出てからトイレにいった三恵は尿意を感じていた。三恵は雑巾用にといた古浴衣の残り布を用意した。オシメカバーをしてベッドに寝ていると、新しい感覚の欲びが萌してくるようだ。じりじりした尿意が高まってくる。三恵はオシメを当てがいオシメカバーをしめなおした。すでに下腹の方はぷっくりふくらんでいる。それから二十分耐えた。三恵の体内で水位は、高まってあふれそうになっていく。膝を曲げて足を立てると少し我慢できた。太腿を足首まで、けいれんが走ってぶるんと震えた。次は背筋を戦慄が襲って肩が、がくがくとした。潮の高まりは寄せては引き、引いては寄せて、少しずつ激しさを加えた。歯ががちがち鳴った。三恵はあとうめいて口を開けた俥にした。もう限度を越していた。膀胱はマリのようにふくらんでいることだろう。下腹は禁圧感から、疼痛に変っていた。三恵は自分を開放した、それは甘い快感を伴った、ちろちろと迸りがあって、熱いものがお尻を伝った。オシメカバー内にする違和感が、自然に迸りを止めさせた。

体に掛けた夏毛布の中から新鮮な尿の匂いが立ち上って三恵の鼻をおおった。

三恵はしばらく、ぐったりして動かなかった。濡れたオシメの不快感が、じんわりと胸にしみこむよう伝わってくる。それは、いやらしさと嬉しさを混ぜあわせた色彩で、三恵の情感をいろどった。濡れた布は体温を失いつつあったが、まだ温ったかく、たっぷり水分を吸っている。仰臥しているの、お尻の下オシメの方が、濡れようがひどかった。腰を浮かすと、オシメの吸収しきれない水分が、カバーにたまっていた。

その夜、三恵は、濡れたオシメは外してしまったが、オシメカバーをしたまま寝て、とうとう眠入ってしまった。夏の朝の明るい光に、熟睡した彼女は満ちたりた気分で見覚めた。暑かったので、ふとんをぬいで、あられない恰好の寝姿だった。ネグリジェがめくられて、昨日買ったオシメカバーが、そっくり見えているのに、三恵はあわててしまった。真っ赤になって急いで外して、パンティにはきかえた。母が三恵を起しにきて、見られたら、どんな変な顔をするか、思っただけで胸がどきどきした。

三恵は会社の勤務中にも、洋服タンスのなかに入れた、あの鉛色のぬめぬめしたオシメカバーの感触や、かわいいボタンなどを空想



しているのだった。

三恵がMデパートで始めてオシメカバーを買ってから、一年半近くなる。いま三恵は三枚のオシメカバーをもっている。最初買ったのは股ゴムの処がはつれてしまった。次に市中の薬局でエネマシリンジと一緒に買ったのは少し小さい目で、内側のビニールが白に近いブルーで、薄い膜がしっとりまとわりつくようにやわらかである。外側はブルーのナイロンで三ツボタンで、ボタンには、兎にまたがったミッキーマウスがついている。三枚目は最近やはりMデパートで買った。

朝日新聞の買物らんに病人用のオシメカバーの紹介がでていて、ビニール製とゴム製の二通りをMデパートで売っていると書いてあったので、三恵は誘惑にまけて出かけてしまった。それが薬品売場に売っていることは知っていたが、遠廻りをしてそこに行った。

覚悟していたのだけど、顔があからんだ。「病人用のオシメカバーありますか」といった。中年の女店員が、壁側に積んである商品棚から、ビニールの包を出して、商品ケースの上においた。「あのう、ゴム製のありませんか」女店員は同僚の若い女店員を呼んだ。

「ゴムのオシメカバーある？」「あったかしら、少しお待ちになって下さい」若い女店員は、もう一人の女店員を呼んで、三人掛りで探し始めた。三恵の顔に、ずきんずきんと血が上っていくのが分かった。「これしかありませんけど、ゴムのはお尻にくっつくから、こっちの方がいいのじゃありません」中年の女店員は、包から出したオシメカバーの、ボタンを外して、内側のビニールを手でなぞながらいった。「さっきの方も、これを買って行かれましたよ」と若い方が口をそえた。

三恵は逃げだしたい気持ちでいっぱい、「じゃ、これの一つ下さい」

「大きさは、これでよろしいでしょうか」

「もう少し大きい方を下さい」

三恵は包みを受けとると、早々にエレベーターで屋上に上った。

三つ目のオシメカバーの商品札が手元にあるハイクラス病人用おしめカバーと書いてあって下に、赤ちゃんにはオークラのおしめカバーと印刷してある。裏側にはサイズL五十五Kg以上の方、大倉産業株式会社、大阪市東区高麗橋一丁目十七と記してある。オシメカバーには『子宝』と名称のかいた小札がついており、内側は白のビニール、外は浅黄色、

股ゴムの押えには白いネル布、両脇のボタンの処はゴムテープで補強してあって、全体が丁寧に造られている。腰を締める紐がついていないのが、前からもっているのとは違っていた。

素肌の腰に着けた感じでは、内張りのビニールが分厚いせいか、がばがばしているが、それでいて、つるりとした感触が一番強かった。

三恵の今の遊びは、二番目、一番目の順にオシメカバーをし、更に最も大きな三つ目のカバーを着つける三重着用遊びと、もう一つは、一つのオシメカバーを他の一つでくんで細長い形にして、これをオシメに見立てて当てがい、上から浅黄のオシメカバーをする、さらにその上から股間縛りをする遊びである。まるめられたビニールが密着して、甘い感覚に三恵を誘いこむのである。

### 「奇クサロン」原稿求む

「奇クサロン」は大変好評です。読者の皆さまの共通の広場として、読者通信と共に発展させてゆきたいと思っておりますのでマニヤ通信、短信往来、呼びかけ、モデル通信、文通交際、写真、絵など何んでも構いません。どしどしお寄せ下さるようお待ちしております。

## 〔SM〕より見た世界史シリーズ

## 悲劇の女王 “ゼノビア”

黒淵 嬰 一

悲劇の女王 “ゼノビア”

紀元二六〇年、ローマ帝国皇帝ヴァレリアヌスは新興国ペルシャのサポール一世とエデッサに戦い、大敗して捕虜になった。そして皇帝の衣裳を纏った俘鎖で繋がれ、見世物として曳廻された。伝えられる処によれば、ペルシャ大王は馬に乗る際、捕虜皇帝を地に逼らせ、首を台にして鞍に上る事にしていた。ヴァレリアヌスが屈辱に耐えずして獄死すると、その衣裳に藁を詰めて人の形に作り、ヴァレリアヌスに似せた顔を付け、これを鎖で縛って神殿内に置いた。

ローマ帝国東方の首府、アンティオキア始め、タルスス、カエサリア等の大都市は短期間に略奪され、シリア、カッパドキア、キリ

キア一帯にペルシャ騎兵が拡った。タウルス山の隘路さえ無抵抗で放棄された。武器を把握り得る年齢の男は悉く殺戮され、女と子供は縛られてメソポタミアに送られた。

ローマ帝国東方諸州が潰滅に瀕している中で、パルミラだけが降伏しなかった。パルミラの元老院議長であり、軍司令官でもあるオダエナトスの名で鄭重な贈物が届けられて来たが、信書はペルシャ大王を対等に扱っていた。サポール一世は怒って贈物をユーフラテス河に棄てさせた。

パルミラはローマ人の町ではない。シリア砂漠のオアシスを中心に自然発生した貿易中継基地で、ローマの保護を受けてはいたが、

帝国と運命を共にする必要は無かった。

勝誇るペルシャの大軍は小国パルミラの城壁で頑強に阻止された。その間に城中から討って出たパルミラ騎兵隊が大王軍の輜重隊を蹂躪した。ペルシャの大軍自体は言うに足る損害を受けたわけでもないが、砂漠の中で食糧や攻城資材を失っては退却の他無かった。失われたローマ帝国の体面はパルミラの一シリア人オダエナストに依って保持された。しかしサポール一世にとっては、パルミラ騎兵隊の先頭に立って突撃して来た指揮官の方が印象的だった。巧妙な戦術運動。厳正な統率。ペルシャ王の眼前で勝利を奪い去った勇氣。だが、その軽快柔軟な所作と、軍を督す



る高い声は男のものではない。

ペルシャ大王はパルミラ再征の大軍を起した。ペルシャ的な量的優越に基準を置いた軽騎兵団に対し、パルミラの軍隊は鋼鉄の甲冑で固めた重装騎兵を用意していた。貿易に立国の基礎を置いたパルミラの財力は高価な鎧を揃える事が可能であり、独立と自由を尊ぶ市民からは少数だが勇敢な戦士を得る事が出来た。運動戦に長じたペルシャ騎兵に対し、ローマの重装歩兵は全く不適で、パルミラの鉄甲騎兵は妥当な戦備だったが、この軍隊が戦力を発揮するのは決定正面に対する突貫力の集中においてであり、そのために軍の先頭に立って嚮導する勇敢かつ有為な指揮官が必要だった。

パルミラ重装騎兵は弓箭歩兵の掩護射撃下に幾度かペルシャ大王の前衛を破った。

「パルミラ騎兵を卒いるは何者か」

サポール一世は度々に亘って左右の者に尋ねた。大將軍の紅袍を靡かせ、金冑に駝鳥の羽毛を飾り、銀色の胸甲、アラビア馬を駆った女將軍がシリア砂漠に砂旋風を捲起して疾駆した。

「オダエナトスの妻ゼノビアです」

臣下が答えた時、パルミラ軍は大王の本陣

に迫っていた。親衛隊長バーラムはゼノビアの投槍に貫かれた。ゼノビアの方は無防禦に露出していた左腿にバーラムの矢を受けたが自分で鎧を抜捨てた。サポール一世は象牙造りの戦車を棄てて逃げた。ペルシャ大王はシリア砂漠の中に最も大切なものを失った。名誉と、そして陣中に召連れた妾数名である。

パルミラ軍はペルシャ王の妾達を城壁上に縛り、大王の無能を嘲笑したがサポール一世はどうする事も出来なかった。オダエナトスが全軍を以て突出し、ペルシャ大王は兵と共に潰走した。クテシフォンに逃げ込んで辛くも城門を閉す迄敗走の足は止らなかった。

アルサケス朝ダリウス、クセルクセス時代の全盛を再現するかに見えたササン朝ペルシヤの興起は小パルミラのオダエナスト夫妻の智勇に阻まれ、ユーフラテス河から西に僅か数百軒国境を拡げたに留った。サポール一世は憂憤の内にクテシフォンの宮殿で歿した。ヴァレリアススの後継者ガリエヌスは暗愚な君主だったが、東方領土の救出に感謝し、オダエナトスに皇帝の称号を贈って己の共同統治者に立て、彼が既に掌握していた東方の支配権も承認した。破格の待遇に感激したオダエナトスは死ぬ迄ローマ帝国に忠誠を尽くし

た。ただし恩賞の実質は寧ろゼノビアに贈られるべきであつたかもしれない。オダエナトスの年令は既に人生の終に近く、最初の妻は既に亡く、第二の妻ゼノビアは二十才を幾らも出ていなかった。オダエナトスの功績は大部分智勇兼備の妻によると言われた。

ローマは当時東からはゴート族の、北からはアレマン族の侵入を受け、オリエントを顧る事が出来なかった。東方領土は自然にパルミラの支配に帰した。千年の平和にして小規模な繁栄の後、パルミラは突如として史上の大国に生長した。

オダエナトスは微賤から軍人となって立身し、晩年に至ってローマ帝国の東方総督になった。パルミラの名門ゼノビアとの結婚が彼の地位を確実なものとした。ゼノビアはマケドニア系プロトレマイオス朝の血統と自ら称しクレオパトラの子孫と号したが、ゼノビアの美しさは先祖クレオパトラと少くとも等しいか又は多少とも勝っていた。(ただしクレオパトラ七世は絶世の美人とは思われない。彼女の魅力はもっと他の点にある) 智識の高さは三百年前に比類無きを示した先祖と甲乙をつけ難く、後述する如くに寡婦となった後も王位のために貞操を売る等の行為無く、殊に

勇氣においてはアクティウムの戦場から逃亡した先祖とは比較にならなかった。

紀元二六七年、オダエナトスは甥のマエオニウスと、その一味に暗殺されて短い統治を終った。前妻との間に出来た長男ヘロドも同時に殺された。既にパルミラの實権を掌握していたゼノビアの地位は微動もせず、直ちに陰謀を計った一党は逮捕された。三十才前後にしてゼノビアは、名実共にパルミラの支配者となった。世上オダエナトスの暗殺をゼノビアの教唆と為す説もあるが、そこまで疑う必要は無い。結果的にはゼノビアとその子供のみが残ったが、ゼノビアの正々堂々を好む性格は陰謀や暗殺には全く不適だったから。

ゼノビアは、セム人種とグレコマケドニアの特徴を性格的にも身体的にも兼有していた。ギボンの記す彼女は、眼は大きくて黒く、皮膚の色は幾分浅黒かった。ただし色の点は後述する如く必ずしも先天的なものとは思われない。齒は真珠のように白く、髪は豊富で黒に近い茶色だった。顔は優しい愛嬌のある整った美しさを持っていた。身長は多分百七十糎に近かったと思われる。子供も五人いたから胸の隆起も長大な体格（ローマ人の標準において）に似合っていたと考えてよい

だろう。声は高い調子で、何時も必要以上の音量を出していたらしい。学識は当代最高のもので、ラテン語、ギリシヤ語、シリア語、エジプト語を同等に操り、ペルシヤ語をも理解し得た。ゼノビアは東洋史を自ら著して子供の教育に使用し、ロンギヌスを教師としてプラトンやホメロスを学んだ。議会や軍陣に必要な雄弁術も心得ていた。東洋は本来婦人に隷従を強いる習慣の地であり、ゼノビアの傑出は一層の驚異だった。

ゼノビアの政治は女性的感情に支配される事が無かった。ロンギヌスやセマンティウス等の顧問官の指導も良かったが、赦免が必要な時には個人的憤怒を自制したし、政策が罰を要求する場合は憐憫の情を抑えた。マエオニウス一味の処刑はその適例で、暗殺者達は獅子との格闘を強制され、当然の結果として猛獣の腹中に葬られた。妻や子供達も断絶の刑に伏し、砂漠中に立てた柱に縛りつけてミイラになるまで放置された。

ゼノビアの経済は重税を伴う極度の専制と一部では言われたが、新興帝国を維持する軍備の必要のためであり、一層の大発展を期したシリア帝国基礎工事への投資でもあった。ゼノビアの趣味は狩猟だった。当時の西ア

ジアには未だ獅子が棲息しており、ゼノビアは獅子、虎、熊、豹を絶大な歓喜を以てとし、皮を得て居室を飾った。女王は馬車が嫌いで、儀式的必要以外は乗馬騎行した。帝王の正装も政治や祭礼の際には着用したが、それ以外は軍服を最も好んだ。紫のガウンの下には、何時も胴着型の将官服を着用し、革帯に金柄銀鞘の短刀を差していた。当時の軍服は上体の胴部のみを包むもので、気候風土の要求に従い、腕も脚も掩わなかった。肩だけが広い旧式の水着を厚くしたものと思えばよい。ただしこれは当時のデザインをその尽着用したのであって、ゼノビアが露出症だったのでは絶対でない。わが女王の左腿には薄い矢創の跡があったが、醜い程のものではなく、彼女はこれを隠そうとはしなかった。ゼノビアが騎行する時、紫の帝衣が風に流ると人民は美事な腿に残る名誉の傷を拝む事が出来た。又ゼノビアは必要とあれば、兵と同じ重量の装備で歩兵隊の先頭に立ち、幾哩でも行進した。戦場や狩猟で疲労する事は知らなかったらしい。以上の点からゼノビアを想うに、オリンピック出場資格のある、柔軟かつ強靱な、鍛練された均整美スタイルに教養ある深厚な美を併せ持っていたに違いない。た



だしシリアの烈日下、常に露出されていたその五肢が何の程度に陽焼けしていたかは解らない。

かつてグロマ・フィルム社が製作した作品において、ゼノビアに配するにアニタエクバークを以てしたのは、雄偉な体格の一点を除き、性格的にも年令的にも、全く不適当だったと思う。筆者はこの女優から知的な美を見出せないし、ゼノビアの貞節な性格も連想出来ない。ゼノビアは確に魅力ある女性だったが、その魅力は大切に保存して、自らこれを売物にした事は一度もなかった。クレオパトラ七世はこれを一種の武器として行使したが、ゼノビアは生命の危機に臨んだ場合といえども例外を設けなかった。

対比列伝の著者プルタルクスが二七二年迄生きてクレオパトラとゼノビアの対比をもつて彼の大著を完結させなかったのは世界的損失だった。もっともこの比較に関する限り、後者の優越は明瞭である。プトレマイオス家の女王は名門を相続しながら一代でこれを失い、シリアの女王は同じローマ帝国と戦うに、小パルミラより興ってアントニウスを借らず、自力をもって創建と維持を行なった。大ケーザルの未亡人は専制君主として振舞

い、堂々たる治世の間に時としてヒステリックな錯乱を見せたが、オダエナトスの寡婦は顧問官の献言を容れて女性としての欠点を現さなかった。クレオパトラ七世は戦場から逃亡して敗因を作り、臆病の本性を露呈しつつも、最後に妙な所でギリシャ婦人の真勇を思い出し、死によって、縄目の恥を拒否してオクタヴィヤヌスやローマ市民のみならず、筆者及び読者の絶大な期待を失望に終らせた。ゼノビアはこの点においても正に我々に応えてくれた。にも拘らず、クレオパトラとゼノビアの間に、エリザベス・テラーとアニタ・エクバークの差以上の人気差があるのは、はなはだ不当と言わなければならない。

ローマ元老院がオダエナトスに贈った称号は個人的榮譽であり、彼の死と共に消滅すべき性質のものであった。ゼノビアが東方の女王と称して統治権を相続した事は帝国に対する叛逆を意味した。のみならずゼノビアは將軍ザブダスを派遣してローマ帝国から「先祖の地」エジプトを「奪回」した。ゼノビアの領土と動員し得る資源、兵力は、クレオパトラの二倍だった。ペルシャ、アルメニア、アラビアは勢威に恐れて朝貢使を送った。ローマ帝国は本土をゴート族とアレマン族に脅かさ

れ、西方の富裕なイベリア、剛健なガリヤ、ブリタニヤを分離政権に横領され、東方領土も同様な状態にあり、暗愚な皇帝ガリエヌスはゼノビアを如何ともする事が出来なかった。しかも帝国の体面は東西の叛乱政府が共に女によって横領されている事で、失墜していた。東のゼノビア、西のヴィクトリアである。

二六八年、ガリエヌスはアウレオルスに暗殺された。アウレオルスは数週間後にクラウデウスに殺され、皇帝となったクラウデウスはゴート族をニッシュで破った。クラウデウスが僅か二年の光輝ある統治の後、陣中に病歿すると、帝国中興の英主アウレリヤヌスが皇帝となった。アウレリヤヌスはゴート族との対戦を帝国の勝利をもって完結させ、アレマン族をイタリヤで全滅させ、西の女王ヴィクトリヤが老死して子のテトリクスが相続した機に乗じてこれをシャロンに破って西方領土を回収した。

ゼノビアは、東方を五年にわたって支配したが、ついにローマ帝国と決戦する時が来た。二七二年、アウレリヤヌスは十万の帝国軍を揮いてポスポラス海峡を渡り、第二のアクティウム劇を開幕した。アウレリヤヌスは

既にローマ軍に強力な騎兵を加えていた。

アンティオキア市外で第一回の決戦が行なわれた。ゼノビアは二万の鉄装騎兵、五万の弓箭歩兵の総指揮権をザブダスに託し、騎兵隊に親臨して督励した。ゼノビアは三十代を幾つか越えた女盛りで、独身の若く美しい女王のため、パルミラ騎兵ごとくが絶対の忠誠を誓って功を競った。しかしパルミラ軍が勇敢であればある程その突撃は無意味だった。帝国軍のマウレタニア及びイリリアの輕装騎兵はパルミラの鋼装重騎兵の猛突撃を支えずに八方に散乱して退却し、緩慢な輕戦を支えつつ、敵が重い鎧に耐えずして疲労する迄逃げ続け、パルミラ軍の団結と突撃力を分散させた上で、小部分宛包圍殲滅した。ローマ歩兵は身体を掩う位の大楯を持ち、これを重ね連ねて巨大なドームを作り、その中に籠ってパルミラ弓箭兵の矢が尽きる迄持耐え、最後に反撃して敵を潰走させた。

東方の女王は信賴する騎士団を失って敗退したが、毫も屈せず直ちに第二の大軍を編成した。エメサ神殿に祈願を捧げ、月章の軍旗を手に、ゼノビアは奮戦したが、戦況は前回と同一の経過を以てパルミラ軍の大敗に終わった。要するに東方の装備と戦術はすでに旧式

化していたのだ。

ゼノビアは僅少な残兵と共にパルミラに退いた。第三回の野戦軍を編成する事は不可能だった。エジプトもパレスチナもすでにアウレリヤスの副将プロブスの別動隊に奪われていた。プロブスは五年後にローマ皇帝となつた名将である。城壁に囲まれたパルミラ市のみがゼノビアに残された資産だった。しかし東方の女王の勇氣は少しも衰えていなかった。

「私の治世の最後は、私の生命の最後と同時にであらう」

剛毅なわが女王は逆境に屈せず、こう宣言してパルミラの城門を閉じた。

千五百年の後、同じような境遇で、風采の上らない小男が同じ意味の事を叫んで英雄と言われた。

「我、フォンテーヌブローに入る。勝利者となるか、死屍となるに非ずばこの城を出ず」

彼の名はナポレオン・ボナパルトである。

ゼノビアの豪語は空威張ではなかった。彼女の精密な頭脳はシリア砂漠を味方の計算に入れていた。ローマ軍は水と食糧の欠乏で苦しむに違いない。同盟軍のアラビア騎兵は信義や名誉よりも（イスラム教はいまだ発生し

ていなかった）ローマ軍の装備や物資を目当てにゲリラ戦を展開するだろう。ことにペルシャのサポール二世は、パルミラが亡びたらローマの全圧力を蒙る關係上、援兵を送ってくる事は確實と思われる。

しかしゼノビアの正確な計算は予想外の事から崩れた。サポール二世は病死し、ペルシヤは後継問題で混乱していた。アラビア人はアウレリヤヌスの金力で買収され、攻圍軍に加わった。ローマ皇帝は帝国の資源を無制限に行使し得たから、攻圍陣は次第に強化された。パルミラはそれでも堅守善戦し、アウレリヤヌスすら矢傷を負ったが、間もなくエジプトを征服したプロブスの大軍が到着して攻撃力を倍加した。

ゼノビアがパルミラを脱出したのは、クレオパトラがアクティウムから逃亡したのと異なり、ペルシヤに自ら赴いて群議を纏め、その兵を卒いて解圍戦を行なう目的からだった。パルミラの防備をザブダスとロンギヌスに託し、快速の乗用駱駝を駆った女王と親衛隊は夜闇に紛れて東方へ疾行した。しかしアウレリヤヌスの哨線は忽ちそれを悟り、輕騎兵を以て追跡して来た。もしも、ローマ兵の投槍が女王の駱駝を傷つけなかったら、必ずゼノ



ビアはユーフラテス河を渡り、ペルシャ兵を以て自身の王座を救ったであろう。天運女王に与せず、駱駝は倒れ、激しい衝撃を以て女王は砂の中に横転した。僅少な衛兵は女王の周囲でローマ兵と戦い悉く討死した。アウレリヤヌスから、東方の女王を殺す事なく生捕るよう厳命されていたローマ選抜兵は、楯を以て垣を作り、中に女王を囲い込み、若干の犠牲に耐えつつ、剣を持ったゼノビアの腕が疲れ果てる迄押し続けた。闘志においては最後迄屈しなかったゼノビアも、ついに体力尽きて砂の中に押伏せられた。金冑は飛び、紫の帝位は裂け、絹の将官服は破れた。剣は既に手中から失われた。髪は乱れ、美しい顔の半分が砂の中に埋った。肩も露わな弾力のある美事な腕が、女王の意志に逆って背に廻り重ね合わされた手首の上に、固い縄が幾重にも巻きついた。満身の汗の上から砂を一杯に浴びたゼノビアは尊厳も自由をも奪われ、檻を纏った泥人形の如き姿で引立てられた。

と下で、革紐を以て固く巻締められ、一層高く盛上っていた。紫の帝衣も今はなく、掩うものも無い脚は膝と足首で柱に固定され、頸までも柱に縛られて顔を正面に向けていなければならぬようにされていた。

パルミラ城中は忽ち騒然となり、数時間後なす処なく開城降伏した。

戦勝のローマ皇帝はエメサにおいて東方の女王を引見した。アウレリヤヌスの命により、敗北した女王に対しても適当な尊敬が保たれていた。ゼノビアは身体を清め、香油を塗り、髪を整え、白の平常服を与えられていた。ただし武器を把り得る両手は、後で軽く形式的に縛られていた。

「歴代ローマ皇帝に反抗したのは何故か」

アウレリヤヌスは嚴重に詰問した。もっとも、この審問はゼノビアを赦免する何等かの理由を発見する目的で行なわれたものだった。ローマ帝国が東方に発展しようとするればパルミラが必要であり、それは平和時には貿易の門となり、戦時には出撃の基地となる筈だった。そして、パルミラを存続させようとするれば、市民の敬愛する彼等の女王を許さなければならなかった。だが、剛毅なゼノビアは、囚えられ、縛られていても威厳を失わ

ず、尊敬と不屈を巧妙に合せた返答をもってアウレリヤヌスを困らせた。

「ガリエヌスやアウレオルスの如き輩を、大ローマ帝国の皇帝に相応わしい者と見做す事は私の自尊心が許しませんでした。陛下のみは私の征服者として、又真の皇帝として承認致します」

アウレリヤヌスはゼノビアが助命を歎願すれば、他の者若干を罰して女王を許す心算だったが、今は処分について軍隊の裁判に附す他無かった。当時軍隊の総意は帝国最高の意志であり、アウレリヤヌスといえども軍隊の選出によって帝位に即いたものだった。

グロマ・フィルム社がアニタ・エクバークを起用した事は営利企業である以上容認され得るし、一旦起用したからには彼女の性的魅力を利用しないのは不得策だったろう。しかし、史上顕然たる事実、ゼノビア就縛の場、アウレリヤヌスと会見の場、そしてこれから述べる軍事裁判の場とアウレリヤヌス凱旋の場の中ただ一つでも、その真似事でもアニタ・エクバークによって再現して見せたなら、この出鱈目な内容を持った作品にも別の意味で価値を認める事が出来たかもしれない。

パルミラ戦犯達に対する軍事裁判はエメサ

市外の野で開かれた。これは一種の人民裁判であり、判決は無罪放免か死刑の両極端何れかだった。皇帝は壇上から審理を統裁し、被告は一段下の台上で判決を待った。数万の兵士、即ち判事が四方を埋めた。ゼノビアは黒の祭礼服で頭から足まで包んだ謙虚な服装で手を後に縛られて被告席の中央にあり、彼女の大臣、顧問、將軍等も同席した。

アウレリヤヌスがゼノビアに対する告発状を読み始めると、兵士等は騒然となり、終まで読ませもせず、「死刑」「死刑」を怒号する声が大暴風の如く湧き起った。槍を隙間もなく立連ねて林となし、早く女王をこの上に突き落せと催促した。ゼノビアの雄偉な体軀が不利な印象を与えた事は疑えないが、兵士等は戦後の興奮から血を見なければ納らない精神状態になっていたのが原因だった。

ゼノビアの作爲的な勇氣はこの時に到って跡形もなくなり、ギリシヤ的剛毅が砕けた下から西アジア的本能が現れた。偉大なりし女王は蒼白になって慄え上った。ギボンがゼノビアが今迄の名声と忠実な臣下を犠牲にして自己の生命を購った行爲を歎じているが、筆者はわが勇ましき女王がついに女性であった事を曝露した点を歎びたいと思う。アウレリ

ヤヌスは巧妙な誘導諷問を以て叛逆の罪を他の大臣や將軍に転嫁し、放心状態の女王はほとんど無意識の内に皇帝の質問を肯定していた。その結果女王は生命を許され、ゼノビアの女性としての欠点を常に擁護してくれた顧問官に死が与えられた。大学者でもあったロングヌスは、ゼノビアに対し一言の不平も洩らさず、却って不幸な女性に憐みの言葉をかけながら従容として処刑された。ローマ兵士は多くの血によって満足を得た。不屈の女王が始めて泣いた。己の不幸のためでなく、身替りとなった顧問達に対しての涙だった。両手は背後にあり、濡れた顔を掩う事も出来ない、女王は何時迄も号泣していた。

パルミラは寛大に処分された。ゼノビアの一族は単なる象徴的君主としてパルミラに居住する事を許された。城壁は破壊され、商業都市としての存立のみが認められた。宮殿と神殿の財宝、馬、駱駝、武器は引渡されたが、個人の財産は侵されなかった。総督と六百人の弓手隊が駐留したが、パルミラの人口から見れば形式的な兵力に過ぎなかった。

アウレリヤヌスはポスポラス海峡を渡る処でパルミラの再叛と守備隊の虐殺を聞き、全軍を以て不信の市を反転急襲した。戦備未了

のパルミラは無防禦でローマ皇帝と帝国軍の憤怒に曝された。恐るべき大破壊と大殺戮がそれに続いた。

「武器を把った叛徒に限定さるべき大虐殺は凡ゆる老幼婦女の上にまで及ぼされた」

皇帝は元老院に送った書簡に自らかく記している。掠奪と破壊の後、皇帝は僅少な生存者に対し都市再建の許可を与えたが、最早気力も財力も尽きていた。歴史はオアシス都市の灌漑施設が一旦放棄されると、その町は砂に埋没する事を教えている。今後少くとも千年、小規模であるが確実な繁栄を約束されていた西の楼蘭は、かくて僅か十三年の、燦然たるも短い栄光と引換えに全生命を焼尽した。ゼノビアの首府は次第に衰えて土民の寒村となり、ついに廢墟と化した。現在のパルミラはシリア政府の観光収入源としてのみ役立っている。

ゼノビアは既に政治権力を失っており、今回の叛乱は、エジプトのフィルムスが教唆してパルミラ人の一部を動かしたもので、ゼノビアとは関係が無かった。しかし全パルミラが罰を受けた以上、女王が許される筈もなかった。捕虜としてローマ市中を曳き廻される事は、クレオパトラ七世の一死以て拒否した





処だが、ゼノビアは東洋的諦観をもってこれを甘受した。

アウレリヤヌス凱旋の壮観については、ギボンの麗筆が鮮烈な描写を余す所無く試みているので、筆者にはこれを書き写す仕事しか

残されていない。

二十頭の象、四頭の大虎、大鹿その他珍奇な鳥獣の行列。

戦利品の武器、軍旗、東方の什器、調度品、金銀宝石類、その他の財貨。

テトリクス廃帝父子を含む夥しい捕虜の行列。ゴート人、アレマン人、サルマチャ人、シリア人、エジプト人等々。中でも実戦場で捕獲されたゴート族の大女はアマゾンと誇称され、身長二米に近く、半裸の胸も掩わず、手を背に縛られていながら、観衆注視の中を傲然と歩いていた。

しかし、これ等を詳述する必要はない。読者同様、ローマ市民の眼も素通りして美しくかつ雄偉な東方の女王一身に集中されていた。衣裳一切を奪われたゼノビアは、僅に一フィート半の腰布一枚を与えられたのみで、行列の最後部近くを歩いていた。ただしこの布はキオス島の織姫が支那産の絹布を一旦解き、独得な技法で織直したもので、霞を織って作るという伝説を生じる位に薄いものである。腿も掩わないこの布が腰を一重巻くだけで、左の腰骨の上で金の留針に支えられていた。

頭上には金の冠が与えられ、東方の女王本来の高位を示していた。冠は幅広の金の鉢巻で、真珠の列が鏤めてあり、ゼノビアの豊富な髪はこれに支えられて後に垂れていた。

雄偉な女王の裸身は、夥しい金銀珠玉で飾られていたが、その悉くが、嚴重な枷類だっ

た。肉付のよい腕は堅く背に廻り、両手首は後で固く重ね合され、革紐を以て嚴重に縛つてあるが、貴金属でないのはこの一箇所だけだった。

腕関節の少し上を、金の環が左右一箇宛締めつけ、銀の鎖が背で左右を繋いでいた。足首と膝に金の重い足枷がはめられ、銀鎖が膝と膝、足首と足首を結んで、女王の大股な歩幅を二フィート以内に制限していた。豊かな胸には小粒な宝石の真珠が縄の如くに掛り、魅力ある双丘の上と下を一巻ずつ締めていたが、美事な両半球はこのようなもので支えたり、飾ったりする必要が無い位、立派に上を向いていた。

女王の長い滑らかな頸には金の首環がはめられ、首環には各種の宝石が飾ってあった。首環の後部は鍵形になり、一本の銀桿が鍵の部分と後に組んだ手首とを連結して手を首に吊上げ、一種の首縄の如き作用を為して、ゼノビアが常に姿勢を起して歩かなければならないように拘束していた。ただし筆者不学のためこの器具の正確な構造を明らかにすることが出来ない。

首環の前部からは金の鎖が約四フィート伸び、その尖端を一人の奴隷が持って美しい牝

獣を誘導していた。(原文には曳いていたと書いてある。ただし筆者はわが愛する女王の憐れな状態をこれ以上冒瀆するに忍びないので敢えて修正しておく)

裁判以来、ゼノビアは高貴な氣位を断ち、屈辱の運命に対し従順に服従していた。しかし、金銀珠玉の重量は強健な女王にとっても心身の重荷だった。汗の上から埃は吹きつけ喘ぎながら女王はカピトリヌスに上る長い階段を登って行った。

ローマ近衛軍団の兵二人が鞭撃手として、女王の左右に並んでいた。ゼノビアの裸身が如何に打たれたか、何の程度に傷ついたかを想像したい者は勝手にするがよい。その有様は最早書くに耐えない。幸にして、簡潔な原文は鞭撃手の同行を記すのみで叩いた記事が無い。須らく筆者の仮定を許されよ。憐れな女王に随従する兵士は単なる介添であり、観衆のため、時に鞭を持って空を裂き、地を打ったが、女王の膚を直接叩いて凌辱する事は決してなかった。ゼノビアが階段に蹴いて倒れかかった折など、急ぎ駆け寄って抱き支えた程だった。(実際は地に倒れたゼノビアの傍で、早く起てよと責めたてる鞭撃手を描写する方が合理的かもしれないが、心弱い筆者に

は書けない)

ゼノビアの後には、象牙造りに金板を張り、宝石で飾った彼女の壮麗な戦車が挽曳されていた。戦車の上には女王の甲冑、衣裳が組立てられ、宝玉類が積んであった。かつてゼノビアはこの戦車に乗って、勝利者としてローマの市門に入る事を望んだものだった。ゼノビアの戦車に続いて、オダエナトスの戦車も空しく曳かれ、女王がペルシヤ大王から奪ってパルミラへの凱旋を飾った戦車も更にローマに奪われて曳かれていた。

ゼノビアの娘二人はあまり幼少なので手を軽く縛られただけで、細い鎖に腰と戦車を繋がれて続いていた。黒いガウンを着ているので縛られた手首も観衆から隠す事が出来た。二人共、母親と自分達のために、沿道の群衆に「お許し」を哀願しながら歩いていった。

ネロ帝より二百年。コンスタンティヌスに先立つ事四十年。いまだキリスト教は充分に浸透していない時代である。わが女王とその姫達を助けようとするローマ人はついに現れないのか。

筆者もまた、わが愛する女王の悲境に涙を流し、その不運に同情しつつも、曳かれ行くゼノビアの後姿に、人為の実現し得る最高美



の嘆賞を贈りたいような複雑な心境にある。  
さて、最後に、一部読者の望むものはゼノ  
ビア処刑の光景であろう。ローマ市民もまた  
それを望んでいた。政治犯の処刑は、手足を  
縛ってタルペイア崖の絶端に立たせ、眼下遙  
かなティベル河へ真逆様に突落す壮絶なもの  
である。あるいはまた、クオヴァジス等に書  
かれている如きローマにおける処刑に対し、  
一種の芸術という賞揚の語を贈ったならば、  
世の指弾を受けなければならないであろう  
か。

しかし、ゼノビアは許された。皇帝はロー

マから二十マイルのティボリにおいて別荘を  
贈り衣裳と宝石の一部も返し与えた。前女王  
を慰めるために訪問した事もあった。ゼノビ  
アはこの地で、短くはあったが、独身のまま  
で天寿を終えた。娘達はローマの貴族に嫁し  
その家系は四七六年、即ち西ローマ帝国滅亡  
迄、顕著な家として史書に記されている。

二七五年、アウレリヤヌス皇帝は、不慮の  
死を遂げ、帝国臣民哀悼の裡に葬儀が行なわ  
れた。ゼノビアと征服者の間に何等かの関係  
が有ったか否か、歴史は何も記していない。  
ただアウレリヤヌスの葬儀後間もなくゼノビ

△ローマ帝国衰亡史第十一章クラウディウス  
及びアウレリヤヌスより▽

アもまた世を去った事を伝えるのみである。  
ゼノビア。  
ギリシヤ的勇氣と東洋的優美の権化。  
我が愛する女王。  
その姿は流れ去る時と共に、朦朧の彼方に  
霞んで了った。  
しかし、千七百年の歲月という厚い壁を隔  
てて筆者はなおも呼び続ける。  
ああ永遠の恋人よ。

(終)

## 【最新版】女体緊縛フォト五十選

### B組五十集 大手札判印画紙(9×13寸)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B2	逆エビ責め全裸像(水本)
B3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B4	後手十字縛肩口上(梨花)

B5	足の裏擦り責め(竹野)
B6	おへソいじめ大写真(関谷)
B7	剥いだバタフライ(関谷)
B8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B10	無防備双手吊り(絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B12	一条纏わぬ股間縛り(水本)
B13	全裸亀甲股間縛り(関谷)
B14	足踏付け二つ折り(大塚)
B15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B16	手錠にもだえる(竹野)

B17	尻突出エビ責め(水本)
B18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B20	投げ出した全裸(関谷)
B21	美しき尻部の露出(絹川)
B22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B26	責めに気を失って(関谷)
B27	さアどうでもして(関谷)
B28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B29	投げだされた女体(竹野)
B30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B32	全裸逆エビ片脚挙(東浦)
B33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B34	すべてをさらけて(関谷)
B35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B36	クリップ鼻挟み(絹川)
B37	台上的マゾポーズ(大塚)
B38	吊られゆく美体(絹川)
B39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B40	マゾ女性の表情美(東浦)
B41	喰い込む股間縄(絹川)
B42	灸責めに悶える(梨花)
B43	犠牲台の人身御供(大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B46	手枷足枷大写真(四方)
B47	鎖に悶える足首美(柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B50	女囚菱縄さらし(絹川)



## 芳子を飼育する方法

中 田 明

丁度一年前、遠藤百合子嬢が読者通信に名乗り出て、その後『被虐モデル』としてグラビアに登場した折、私は「マニア通信」に彼女に宛てた一文を寄せた事がある。御記憶のよい読者なら御存知であろう。三十八年度十

二月号誌上の「願いの叶った百合子嬢へ」がそれである。その呼びかけは全く空しく、遠藤嬢は、その後にもS告白などで誌上に通信が掲載されても、私の提供した事項には何等の反応も示してはくれなかったし、同様に彼

女以外のマゾ傾向の読者からの応答もなかった。

今回、再び中川芳子と云う被虐願望のマゾ女性存在を知るに及んで、遠藤嬢に責めのアイディアとして様々な『教育』を施さんとして試案されたものを、奇ク誌上には未発表となつてゐるのを幸いに、中川芳子嬢に当てはめてみたいと思ひつた。彼女はより具体的な責めプランを求めていたし、奇ク誌を読み返してみても特に目立つたプランの提示がないし、きっと小生の試案には興味と関心を湧かすものと思う。

芳子は数年前から読者だったと云うし、それらを経て然もなお強烈な飼育願望を吐露しているのであるから、この際は非とも彼女の希望に沿つてマゾヒスチンとして飼育したいと激しい情熱を感じている次第である。更に芳子を単にマゾヒスチンとして育成するだけが興味の全てではなく、そうした性傾向を背負った女性の将来性をも考慮して、女性の職業教育も併せて遂行してみたいと考えている。

やさしい言葉でなく、きつい言葉で命令して下さい——と本人が云う以上、かなり高度なプレイの実践も可能だろうし、積極的な協



力態勢が出来ているものと考えてよいだろう——従って教育者として、飼育調教の指導者としての私は厳格な態度で芳子を典型的マゾヒスチンに育成させようと思う。

十一月号の読者通信には、広島の小川氏より大胆な加虐プランの提示があったし、他にも二三交歓希望者の声が出たが、小川氏の考え方には自己の肉慾的行為の愛玩化と結びつく飛躍的な思想が露骨であり、プレイとしての明るさや悦楽のニュアンスが欠けてマゾヒスチンとして完成させる過程の配慮が荒々しく思われて感心しない。

性の従属と云う汚辱感に陶醉出来る性癖の持主であろうと想定したとは云え、極端な行為より「飼育」という言葉の響きからして想像出来るように、馴らして行くと云う過程こそ大事な事であるし、好ましい結果を見る為にも、いきなり恐怖感を抱かせるような表現よりも、空想を混える余地のあるプランの方が親切であり、悦虐のムードが次第に横溢して、効果的に目的達成がなされるのではないだろうか。

前置きが長くなり過ぎたようだ。ここからその飼育方法に入ろう。(東京在住の私が、「観光」と云うことで大阪から彼女を呼び寄

せた想定しよう。滞在期間は一週間——従ってその七日間に行われるカルキュラムである)

出頭命令によって私の前に現われた芳子はまずお互いの幸福の為になるように努力するよう宣言する——何故なら、犯罪者として処罰するのでもなく、憎悪や嫌悪からリンチを加えるような、合法・非合法な手段の処刑とは全く別な意味があるからである——飼育を受ける事、途中挫投逃亡しない事が確認されるのである。書類としては身上調査に自筆記入を命じ、口唇による捺印を終えさせる。

いよいよ中川芳子は素材として登場した訳である。

中川芳子「651」(上二数字は年数、下はその月数——即ち一九六五年一月に登場したと云う称号)は、部屋の中央に立たされて私の目の前で衣服一切を脱ぎ「芳子の記録」に記入する為の身体検査を受ける。極く通常行われる身長、胸囲、坐高の測定ばかりではなく、身体各箇所のサイズ測定は臍窩や耳朶の厚さにまで及ぶ。ポロライドカメラによる正面、側面、背面の写真撮影、毛髪、体髪の脱け毛保存。更に「コンテッサの椅子」縛り

と小生が呼んでいる肘掛椅子に四肢を緊縛する方法——奇ク十一月号(通刊一九六号)の攪り責めにあう美女八梨花悠紀子モデルVがこの緊縛方式に近い——で、唾液、その他の体液、分泌物を蒐集し、それら一切を、脱衣した衣服と共に保管する事にする。

以上は芳子と対面した当日の作業であり、一流ホテルのゴージャスな雰囲気の中で厳粛なうちに冷徹に且手早く行われ、終了後は直ちに就眠させる。産院での新生児のように足の裏にマジックで「651」と書かれて枷がはめられるのである。

第一日目——翌朝、午前七時起床——日課となる美容体操を指導、マゾ的屈伸運動である。終って五〇〇C Cガラス浣腸器で、グリセリン浣腸施術——排せつまでの忍耐タイムを一分計の砂時計を使って計る事にする。後手に胸一まわりの単純な縄をかけて冷水シャワーを浴びせた上、ルームチャージの為の時間は食堂で過す事になるが、勿論、六五一号は絶食であり、ミルク一杯が与えられるだけである。食堂へは囚衣と呼んでいる水着だけではつれて行けないから、ノースリーブである代りにランジェリーとしては晒布の褌をしめ

させて、通常通りの服を着せておく。

部屋に帰ってから適性検査を始める。様々なフォト、コレクションを羅列し、その反応を調査し芳子の最もエクスタシーを示すものをマークすることにする。

マゾヒスチンには鞭打ちが不可欠であるから、防声具——戦時中家庭に備付けたゴム製の防毒面——をはめ、壁の吊金具を利用した両手高吊りにして臀部を主に芳子の年令の半数分だけ打ち据える事にする。なお、鞭はミシンベルトを編んだ本格的長尺ものである。鞭打ちが終るとキンカンを塗って手当をする。

再び浣腸——耐久プレイと云うより、俗世解脱の為……と云った方がよ



いだろう。

芳子の体内から完全に残滓がとれたと確認出来るまで施術された上、拘束Mベルトを締付けさせ、就眠させるが登山用の寝袋の中である。

なお、日中、私が外出する用がある時、芳子はテレビを見る自由が与えられるが、コンテッサの椅子縛りにされる。

第二日目——午前七時起床。

日課の美容体操が終ると沐浴——洋式湯槽の中に腹這いに臥させておき、冷水を注ぐ。全身くまなく洗拭した後、全身の産毛剃毛。腋毛や体毛を形良く剃ったりした後、描き刺青をする。これは実際には墨を使わず、針のみ走らせる。

豊乳器を使う乳房責や、ビデイを使う洗滌責めなど可能な範囲を適用してみる。

乳枷をはめ、捕縄をMベルトと結びつけた上で、人目に立た



ぬよう前日のように食事へ行くが、芳子は二日目の絶食が続けられる。

部屋へ戻ってから囚衣に着替えさせ、ビニール袋に首まで入れさせて発汗作用を昂めるように、ヘヤードライヤー等の熱風を送り込んだりして呻吟させる。食塩水、ビール、ウイスキーコーラなどを強制的に飲用させた時、バイブレーターをかけて刺激するなどし、トルコ風呂以上の効用を観察しながら暫時放擲しておく。プレイが進行し、効果が上って袋から出された芳子は、汚れた囚衣もとったまま、後始末を出来るだけ綺麗にするよう命じられ、その評価が本日の鞭打回数となる。

第三日——日課の美容体操が終ってから、再び身体検査を行う。かなりの疲労と順応性が判断され、それによって休養が与えられる事になるが、四肢はベッドにくくられての静養である。

食事が許可されるが、献立は牛乳をかけたコンフレーグ一皿、ウィンナーソーセージなどであるが、犬のように四っん這いになって手を使わずに食べさせる。

私の用事と、機嫌次第でその日の夜は外出

するかもしれない。乳枷とMベルトで身体を緊縛された芳子は護送される囚人が、ボデーガードをつけた高貴な婦人のように、びったりに私に支えられて歩くのである。

第四日目——ホテルでの教育指導は終ってこれからが本格的調教である、と同時に労働に服役させられる。押入れに山と積まれた新聞や雑誌の切抜きと整理。各種風俗誌、写真集のスクラップ。又、本日より悦虐フォトの撮影が開始される。

撮影第一日目としては、主に「縄による縛り」を主に、着衣、ヌード様々に仮借なく縛りを実践し、海老縛りのまま鴨居から吊り下げるような事も試みる。

三日も家を空けておいたのであるから、部屋の清掃は当然芳子の使役の一部であり、嵌口具、犬の首輪と鎖をはめてそれをさせ、終って鞭打ちが行われる。

就眠は押入れの中の寝袋を使わせる。

第五日目——飢えた芳子に再び皿の食事が与えられる。使役は掃除、洗濯、スクラップの整理など。

撮影第二日目として黒い下着やストッキング

を着用してのアメリカン・スタイルの女体緊縛が主になされ、欧米風の残酷味の強いものを撮る事にする。

第六日目——日課が終った後の芳子に、東京へ出て来てから始めての米飯での食事が与えられるが、逆に用便を禁じる。トクホン責めとか読者が名付けた絆創膏貼りがなされ、  
「Mバンド」の併用などで羞恥責めの極限を彷徨させ、被虐認識の限界の中で悦虐耽溺のムードに陶醉させ乍ら、絶対的服従の宣誓へと訓育する。

撮影三日目は「フェチ関係の資料」となる写真の撮影で、特に新考案の責具の使用を芳子に試みる。

第七日目——この日は慰安日である。明日は「観光」も終った事になり、芳子は大阪に帰らねばなるまいから、土産話となるように、東京見物をさせなくてはなるまいし、土産物のいくつかも持たしてやらなくては恰好がつかないだろうから外出する、

他人目には風邪を引いてマスクしているとかわせる大きなガーゼのマスクの下は、口腔一杯に塩をまぶしたスポンジが詰められてい

## 「花と蛇」に寄せて

近 藤 一

て、上下の口唇はトクホン貼りがなされているのがかくされている。オーバーコートの下は、特製の拘束帯が縦横厳重にかけられてあるだけの姿で、画鋏を植え込んだブラジャーや、生花用の剣山を並べたヒップパット、ビニール製のデルタパット、水枕を加工した腹帯などがランジェリーとなっている。

それらの装いで、出来るだけ人通りの多い盛り場を選び、芳子が人につかりこづかれて、思わず呻くその度び毎に、帰宅後の最後の鞭打回数がきまるのである。

街でお茶を飲み、食事をし（勿論芳子は見ているだけ）充分外出の楽しみを知った後で帰宅すると、芳子は全ての拘束具から解放される。口から詰め物はとられ、水が飲まされる……しかも必要以上に吸い口で流し込まれる……片手片足吊りの珍妙な壁飾りにされて晒される。

パイプレーターやヘアドライヤー、電気半田鎧などが並べられて行くのを絶望的な屈伏状態のまま芳子は目にさせられる。そうしてそれらが……最後の仕上げであるかのように

白い肌に向けられるのである。

テープレコーダーが回転している中で、芳子は苦悶し呻吟し歓喜しむせび泣いて、マゾヒスチンとして生れ変わって行く事を自覚させられ、それを喜ぶに違いない——更に素晴らしい女性にまで訓育するには、重ねて機会ある毎に積極的に鞭撻させねばなるまいが、そうした明け暮れの中で、口笛吹けば寄ってくる忠実な犬のように、従順で素直なマゾ女性となり、奇巧読者の良きアイドルになる事を願う次第である。

異なるムードの中で表現されていること、反抗の気力が衰えることが魂の抜けた女体を意味するのでなく精気に満ちた「新しい女」の歓喜に繋がっていることなど、何度読返しても後味はすっきりしています。

私が大いに教えられた点は、責めの心理描写です。加虐者または被虐者の心理を、彼らの口から語らせる表現方法もありますし、また作者が記述する方法もありますが、内心の表徴である外観的行為を刻明に描写することによって読者の推測を誘うことも極めて効果的でしょう。慎しみ深い美女が、死にたい程の羞恥を覚える屈辱の所為を衆人環視の中でしかも自ら進んで行なわなければならない悩乱は、なまじの説明などせずに、忠実な客観

臨時増刊『花と蛇』特集号の素晴らしいことは、とても完全に表現しきれません。

まず、ストーリーの佳さが挙げられます。悪い奴の残虐が専ら心理的加虐に重点を置いていることと、秘密シヨウのスター造りという創造意欲があることで、必らずしも嫌悪されるものでないからでしょうか、貞操を蹂躪され、淫らな演技を強いられ、囂りものにされた拳句、誰の子ともつかない胤を宿してしまふ深窓の美女たちが、さして同情を感じないばかりでなく、却って「新しい女」として

再出発する努力を買いいたい気持です。

次には表現の巧みさがあります。作者の団鬼六氏が旧号にS小説の作法について書いておられました、『花と蛇』を一貫して、非常に親切な読ませる記述が読けられました。所謂ヤマ場が連続して盛込まれており、嗜虐愛好の読者が知りたいと思う描写が詳細にしかも歯切れよく綴られているのです。犠牲が若く健康な美女であって、それも型の異なる性格を持っていること、強要→反抗→玩弄→強制→屈服というような馴致の過程がすべて



的描写を続けることによって却って如実に表現されるでしょう。

同性愛も佳いアイディアでした。静子夫人与京子との強い愛の愛戯の中から真実の愛情が生まれるという想像も愉しいものですし他方では桂子と美智子という新鮮なコンビも生まれているのです。この二組がいずれも若く美しい女性の動と静の対照的コンビであることも印象的です。絵のように美しい同性愛を想像できることは、これらの美女たちが、川田、田代、森田、吉沢、井上達の毒牙にかかったことも大した汚点としない程の救いになっています。この『花と蛇』では、ありき通りの救いは却ってマイナスで、また、森田組や葉桜団の組織に山崎探偵事務所が太刀打ちもできないでしょう。警察への届出は初めから避けている点も巧みな構成で、美女たちの救出は当分望めません。囚われの境遇から脱出しえない裸形の美女たちの救いは、心を入れ替えて現在の姿に歓びを味うことの筈です。それが秘密ショウのスターであり、美しい妊婦ヌードであり、同性愛の女なのです。それまで身につけていた地位も名誉も自尊心も女の誇りも総ての衣服や装身具も剥ぎ取られて、過去の虚飾を棄てた新しい女の生き方に生甲斐を覚えることこそ、本当の救いなのです。

その意味で、静子夫人が森田や田代の玩具

になり森田組の所有物になって喜悅する姿は見事ですし、処女であった京子が川田によって女にされ、しかも静子夫人と共に剃毛された挙句、互いに愛し合う姿も心憎いほど愉しいものです。静子夫人と京子は、お互いを少しでも淫虐な責めから守ろうとして、遂に女の総てを奪われつくした間柄なのですから、二人の愛情は森田組や葉桜団から離れても変りえない程強固なものと思われるのです。さらにまた、読者の中には反対の声もあった美智子への蹂躪も吉沢によって実現されそうですが、これも自然の成行でしょう。葉桜団の首領であった桂子も、処女か又は男の味を殆ど知らない女であったろうと思います。

十五回に亘って掲載された『花と蛇』は、終始惹かれ通しの素晴らしさで、読返すほど愉しみは大きくなるのです。欲を言えば、更に今後の進展を発表して貰いたいと思うのですが、静子夫人と京子の新しい生活ぶりや桂子と美智子に対する調教などが欲しいところです。首領の地位を逐われた桂子だけに団員の少女たちのリンチの苛酷さやそれを受ける屈辱の激しさなども恰好の材料の筈です。

四馬孝氏のグラビアや挿画の佳さも敢えて多言を要しないところです。いずれも細面、明眸、すんなり伸びた四肢と豊かな胸の膨らみや逞しい腰つきで、男心をそそる美囚女ばかりです。丸顔の美女もあるでしょうが、瓜

実顔の美女の方が哀愁を漂わせていて、被虐の女の美を表現し易いようです。

特写フォトもなかなか充実していました。『花と蛇』のシーンにふさわしいような作品をアレンジしているのです、その写真を見ながら読者は、静子夫人や京子への嗜虐のイメージの断片をつかみとれるでしょう。唯、惜しむらくは『花と蛇』のストーリーを実演したフォトが無いことです。適切な配役によるフォト・ストーリーもよいと思います。出演可能と思われる女性について、私なりに感じをつかんでみたのですが、如何でしょうか。

◎静子夫人 スラリとした外観は着やせしてあるのであって裸身は充分に脂肪のつた女盛り。色白で慎ましやか。何といっても主要な役なので、関谷富佐子という声もありましたが、私は異なる持味の絹川文代と梨花悠紀子のダブル・キャストが佳いと思います。

◎京子 理智的な美貌という点からは梨花悠紀子ですが、思い切った抜擢として遠藤百合子を鍛えるのも面白いと思いますが如何でしょうか。

◎桂子 大塚啓子なら順当でしょうが、新人新井マリ子の美貌と均斉のとれた肉体の演技力を買いたいと思います。

◎美智子 高校生、五月亜紀子にピッタリの役柄でしょう。